

らへ参らせ、いかに〜と申して、聲を惜しまず泣き給ふ。大王も后も御心惑ひ歎き悲しみ給ふ事かぎりなし。日頃もいかにと思ひながら、けふこの頃かやうにはあらじと思ひしに、かゝる憂き目を見る事よとて御歎きあり、世の常の人をさへ惜しむ習ひなり。況してや有り難き不死の薬の如くにましませば、光り浮き雲に隠るゝが如くにて、歎き悲しみ給ふ事限りなし。

さる程に太子は、摩耶國にて姫宮の隠れさせ給ふをば夢にも知らせ給はで、はや三年は立ちぬ。前世の御契うすかりけん、姫宮の御事のみにて明し暮し給ふ、千人の后も御心に入らせ給ふは、一人もおはしまさず、たゞ姫宮の御事のみにて明し給ふ。三月十日頃に成りぬれば、花もやう〜散り初めて、景色も哀れなりける折節、ひるの御轉寝に寂びしくあり、姫宮はど問はせ給へば、これには御座しませす。これより西に須彌山と申所に御座しますと申す。驢がて須彌山の麓へ行きて御覽するに、廣々である所に、唯一人ゆきまよひ、太子姫宮に向ひの給ふやう、君はなにとて獨り是れには御座するぞとのたまふ。姫宮仰せ

太子の夢

あるやう、誰れ故と思し召すぞ、御身故にかやうに候とて、御袖を御顔にあて、御涙せきあへ給はず。太子は未だ此の世に座しますに、自は斯る習はぬ旅に獨りおもむく事の悲しさよとて、さめ〜と泣き給ふ。御有様かねて見しより猶も美しく見えさせ給ふ。大王爲ん方無く思し召し、忘るゝ事は侍らねども、斯く過ぎ行くまゝに、今まで音づれ参いらせ候はで、物憂くこそ侍れとて、耶摩國にての御事かき口説き語り給ひけるに、夢のつらさは懸て打驚ろかせ給ひ、御涙塞きあへ給はず。淺ましや三年待たせおはしませと、深く契り奉りし、さこそおぼつかなく思し召すらんとて、胸打ち騒ぎ、やがて大王へ御暇を申させ給ひければ、暫し待たせ給へ、御供の者用意せんと仰せければ、あまり急ぐとて、御供の人々も連れさせ給はず、たゞ一人金麗駒に打ちのり、數の鞭を當て給へば、村雲の中へ混れ入りぬ。かた道三年に行くぞ急がせ給へば、六日に飛び着かせ給ひ、瞿婁國の大王に参り案内を乞はせ給へば、人々申やう、姫宮はこの程はかなく成らせ給ひ、大王の御歎げき申計り無しとありければ、さればこそ夢の醒めぬる如くよとて、御



太子いそぎ歸れり  
女は既に死にけり

泪に咽ばせ給ふ、稍ありて、大王に向ひ申させ給ふやう、吾は維曼國の  
虫、金色太子と申者なりとの給へば、大王驚かせ給ひ、これへくを請  
じ給ひ、對面あり、互に御涙せきあへたまはず、稍ありて、大王太子に向  
ひの給ふやう、然るべき御事にや、國の軍を止め、姫宮二度返し給ひ、此  
三四年添ひ奉まつる事、偏に太子の御威徳なり、姫ゆゑにかやうに成  
らせ給ふぞとて、御吊ひ淺からず申候ひつるに、遂に空しくなり候て、  
けふ七日になり候との給へば、太子泪を押へて、我摩耶國にて夢に見  
奉まつりし事を、細やかに語り給ふ事申もおろかなり、姫宮の御姿を  
其まゝ置き奉まつり候、太子の給ふやう、變る御姿なりとも、今一目見  
參らせたまきと有りければ、住給ひし御所へぞ入れたてまつる、乳母の  
女房達は太子を見まいらせ、姫宮の御事を歎き悲しひ、皆わつと消え  
入り給ふ、太子姫宮の錦の褥を引き明て御覽じければ、唯寢入りたる  
様に見えさせ給ふ、猶色白く面瘦せ給ふ、露ばかりも變りたるけしき  
なく、美しくぞ成らせ給ふ、太子御覽じて御心の中爲ん方なく思召け  
り、御側を見給へば、晝すさみたる物あり、御らんするに、

こひわひて野へのけふりとなりぬるを

たれかうきよにあはれと見む

めぐりあふことしなればまきはしら

つひのなこりのはてしなりけり

と遊はしけるを見るに付けても、いと哀ぞ増りける、太子餘りの御  
歎きにや、姫宮の御側に生たる人の様に添ひ臥し給へる御姿、いと美  
くしく見えさせ給へば、姫宮の戀悲しび給ひしも、理りとぞ申あへる、  
太子暫しまごろみ給へば、御夢に姫宮在りし時より猶解やかに成ら  
せ給ひ、あなあさましや、太子は未だ此世に座します物を、自から契を  
深く頼みたる故に、世を空しく成りしなり、太子變らぬ御心ざし深く  
ましまさば、みづからをいま一度御覽せんと、思しめし候は、自から  
を尋て來り給ふべし、われは娑婆世界と申所にはや生れ候なり、この  
世にて逢ひ參らせ候事は難く侍るとて、自は歸り候なり、とくく訪  
はせ給へとて、さめくく泣き給ふ、かくなん、  
このよこそ二たびあはぬ中なりと



つひには君にあふよしもかな

かやうにの給ふ程に、御袖を控へて我を具し給へとて、御返事申さんとし給へば、大王太子を慰め参らせんとや思し召しけん、然のみ歎かせ給ひそと仰せられける、御聲に驚かせ給ふ、太子かくなん、

むはたまの夢にすがたはありつれと

さむるうつゝにおもかけはなし

と仰せられて、この由を大王へも后へも申させ給へば、いと、御歎き申計りなし、太子は彼の所へ尋ねて行かんと仰せける、大王の給ふやう仰せはさる事なれども、如何にしてさやうの所へは尋て入せ給ふべき、是へ渡らせ給へ、姫宮の御姿を見奉まつらん、其ゆる維曼國の父母の御歎きも罪深しとて、止め申させ給へども、維曼國の大王后の御方へは、文ふみども細々こまごまと遊はし参らせられけり、摩耶國へも文あり、思ひかけぬ御情おまじに預かりつるなんぞ、遊ばし送り給ふ、瞿婁國の大王申させ給ふやう、我命有らん間、如何ならん道迄も尋ね奉らんとて、御涙の隙よりかくなん、

いきてわかれ死にてわかる、おもひゆる

ひだりみぎりにものそかなしき

このたまひて、歎けき給ふ、さて太子は金麗駒に打向ひのたまふは、畜生も物の心は知る物なり、汝は駒と雖ども其故あり、我は然るべき所へ行かばやと思ひ立ちぬるなり、送り着くべきかと思せければ、伏し轉びつ、嬉しげに見えけり、太子喜び給ひて、打乗り霞の鞭を西に向き打給へば、何處いづことも無く空に上り夜盡ともなく三年迄と馳せ給ふほどに、高き山あり、打登り見給へば、僧一人本尊に燈あかり搔き添へて、頸に懸けたるに逢ひ給へり、太子は御心細く思しめし、人に逢へかし、知らぬ山路を問はんと思しめしけれ共、つやく逢人も無く、如何に成り行く身の果ぞと思しめしけるに、此の御僧に逢ひて、嬉しく思しめし、馬より下りさせ給ひ問はせ給ふ、僕思ひ寄らぬ事にて候へども、大梵王宮の黄金の筒つづみ井いと申所や知らせ給ふやと問ひ給へば、この僧大に驚きける體にて、如何なる人にておはするぞ、この道は有漏の身にては通らぬ道なり、むかしより今に魂より外は通らぬ道なり、との給へ



ば、太子申させ給ふやう、然るべき契り有りて、かやうの途に趣き候、よく教へてたび候へど仰せありければ、僧仰せあるやう、實やかに哀れに侍り、さりながら此道は容易く入らせ給ふべき様有るべからず、思しめし止り、是より歸へらせ給へかし、我が身もさやうの所をば傳へ承はりて候へども、くわしき事は知らぬ由申させたまへば、太子是まで思ひ立つかひもなく、歸るべき事はあるべからず、命あらん限りは尋て見んと、御涙を流させ給へば、僧も袖を濡し給ふ、其時僧のたまふやう、其れ程に思しめす事ならば、是より西に向はせ給ひ、九月おはまして御覽じ、犬二三匹腰に付けたる人に逢ひ給はん、是迄は誰が教へて入らせ給ふと問せ給は、娑婆世界にては、一切衆生を孝養菩薩、又長庚星とも申す僧の教との給へど、仰せければ、教の如く九月行きて御覽するに、犬二三匹腰に付けたる僧、清けにて見えさせ給ふ、太子馬より下りさせ給ひ、もの申さんとの給へば、僧何事ぞと答へ給ふ、太子娑婆世界にて契りし女人淨梵王の使と申所に生れたるよし、夢に告げ侍る彼の所へ尋行くなり、教へてたび候へど、の給へば、昔より

太子娑婆世界に尋ね入る

今に此道は有漏の身なから通る事無し、不思議にぞ覺えたる、さやうの所傳へ承たまはり候へども、くはしくは知り参らせず、哀れなる事哉、手もはかなき事に化されて、年に一夜の契を頼み侍も兼たる歎きに思ひ知られて、痛はしくこそ候へど、教へ給ふ、是より西におはして、太なる川あり、其川の早き事かぎりなし、かの所へ三年して行き着く道なり、川の廣きは三百由旬なり、如何にしても渡るべき様更に無し、其川の邊りに、右近の橋、左近の櫻とて木あり、其所に幼き男子一人、女子一人を左り右りに置き、愛し居たる女人あるべし、問はせ給へ、是迄は誰が教へて入らせ給ふと問ひ給は、彥星のをしへぞと仰せ候へど、太子に向ひ申させ給へば、嬉しく思しめし、駒に乗らせ給ひ、三ねんの途を三十日の間に着き給ひて御覽すれば、大なる川あり、更に渡るべき様なし、然らばとて歸るべきにもあらずとて、霞の鞭を當て給へば、向ひの岸に程無くつき給ふ、教の如く二人の愛人を愛したる女人有り、美しく見えけり、太子馬より下りさせ給ひ、黄金の筒井といふ所や知らせ給へど申させ給へば、女人のたまふ様いかなる人の教



へにて是迄渡り給ふと問はせ給へば彦星の教へにて侍るなり實に  
 然る事有り来る秋毎の言ばを契りいつとなく心細き住居にて愛者  
 とも慰むる事も侍らず不思議の音信を承たまはり候とて笑はせ給  
 へば太子申させ給ひけるは娑婆にて假初の契りを結ひたる女人に  
 引かされて尋ぬる心の苦しさを哀れと思しめせ哀れさやうの所を  
 教へて給ひおはしませとの給へばさやうの所有りとは承たまはり  
 て候へども委しき事は知り候はず是より西に向かひて三年途をお  
 はして僧の愛でたきに逢はせ給はんに問ひ給へ如何なる人の教へ  
 とあるへし此間に脱文おほせられよとありければ太子御涙を流がしたまひ  
 てかぞ

あさまじやいか、まよへる道なれば

いと哀れげにの給へば女房もかぞよみ給ふ

いままさらになにをなげくぞうき事を

かざる道とはかねてしらすや

とて如何にもして平かにおはしませとて御涙を流させ給ひけり太  
 子御名殘惜しませ給ひけりさて馬に召して三年の道を行過ぎて御  
 覽するにゆゝしげなる僧七八人あひ奉り太子馬より下りさせ給ひ  
 て斯くの如くの所や知らせ給ふと問はせ給へば僧大に驚ろき給ひ  
 てのたまひけるは昔しよりこの道は有漏の身ながら行くこと更に  
 なし怪しくも侍る物哉との給へば太子然るべく候は彼の所教へ  
 てたび候へ知らぬ道をたどりゆく事露の命も惜しからずとて御涙  
 を流し給へば僧御覽じて哀れなる事にて侍るぞ是より三十三年お  
 はして猶空へおはしましてそこはかともなき山の中を三七日おは  
 しまし候はんするに黄金の足駄はき黄金の杖を突き香染の袈裟を  
 掛け衣着たまへる僧に逢ひ給はんに此の僧彼の所をよく知り給へ  
 る問ひ給へ誰れが教しへぞと問はば七曜の星のをしへにて候と申  
 させ給へと仰せければ太子御涙を流し給ひはかなかりける契りか  
 なとてかくなん  
 しらぬ道におもひいりけんかなしさは



此間に脱文あるべし

こひちならずはたれかゆくべき  
 道の給ひて今更歸へるべきにもあらずとて龍に打乗り三年にゆく  
 道を十三ねんに行き着き給ひければ須彌山の如くなる山有り火の  
 山とて炎燃え焦る、事隙なし又それを四十九日おはしてこの山を  
 南に御覽して焦熱大焦熱のしきを西へ行き給ふべし其れを過ぎて  
 長夜の闇とて此の道こそ一切衆生の魂迷ひあるき候なり罪深き者  
 は後悔悲しひ合へり此の苦しひは大焦熱の苦しひに劣らずして後  
 を前も知らず候へば痛はしくこそ候へ但太子は妄念の罪をは受け  
 させ給へども大焦熱の苦しひは受けたまはず罪ふかき者を思し召  
 し遣らせ給へ彼の道をおはしたまはん時は南無能滿諸願大悲虚空  
 藏菩薩と念じ給へ光りを放ち參らせん光りに付ておはしませこれ  
 を行き過ぎ給ひ竹の林あるべし其内を十三日おはしましてゆ、し  
 むいづくしき也後の三里ばかりおはして御覽候へ隨身二千八はか  
 り棚引て銀の輿に召されておはします人に逢ひたまひて問はせ給  
 へこれまでは如何なる人の教へにておはしますぞと問はせ給は

娑婆にて一切衆生を照し給ふ明星星又冥途にては虚空藏菩薩と申  
 僧の教へと仰せ候へとの給へば太子細に御教へ候へば遙の道にま  
 よひしもはる、心ちして嬉しくこそ候へ返々導きおはしませとて  
 馬に打乗給ひけりさて錐の林劔の山をすき給ひて長夜の闇を過ぎ  
 給ふ其山のくらしき事かぎりなし罪深きものまよふ事心のうち推  
 量るべし其時教の如く南無能滿諸願大悲虚空藏菩薩と唱へ給へば  
 光りを放ち太子を照らし給ふ太子うれしくおぼしめしされども行  
 末心細くてかくなむ

我がこひは夢の夢ちにまよふかな

はる、夜もなき心ちこそすれ

さても乗り給へる龍堪へかねて臥しぬ其時太子御涙を流し給ひ、い  
 かにや汝畜生なりといふとも我此道に迷ふべき由を世に嬉しげに  
 て在りしにより思ひ立ちぬるみつからを何と成れとや思ふぞ假令  
 堪へかたくともこれ迄來るに、ことに長夜の闇にすて置くべきかと  
 て紅の涙を流し給ふ龍も黄なる涙をぞながしける其時龍物を申し



けるまことに御痛はしく候へば送り着け参らせんと思ひ参らせ候へども龍は三年畜ねば息止る習ひなり腹筋切れて息止るとて世に苦しげにて見えければ太子右の御袖をおしきりて口に合給へば口にくみたるを御らんじてうれしくおぼしめしてかくなん、

さりとともとのむこゝろのつよければ

こひこそ人のいのちなりけれ

さて又太子龍にのり給へば飛びてゆくを哀れにおぼしめしてかくなん、

心なきけたものまでもこひちには

あはれをそへてたよりとぞなる

太子常に南無阿彌陀佛と申させ給へり又南無能滿諸願大悲虚空藏菩薩と念じ給へば光りをはなち給へりさしも闇やみなれども日のひかりの如く照し給へば太子うれしく思しめして漸々行き給へば白濱の原に出させ給ひ此の道を十日おはしまして御覽せよ美しき小松三里ばかりおはして涼しき風ふきていと面白くおはしければ

隨身千人ばかりたなびきて白銀の車に乗らせ給へる人に逢ひ給へる太子馬より下り給ひて申させ給ふやう大梵王宮の御許に黄金の筒井と申所や知らせ給へると問はせ給へば白銀のくはまの簾を揚げさせておはする御姿を御覽すれば冠り直衣の御姿美はしく愛でたき上臈の車より下りさせ給ひて仰けるはこれまで尋ねきたりたまふはまめやかに不思議にこそ候へと仰せければ太子暫しの縁に結ばれて候らひし女人ゆゑにこれまで迷ひ候也とて御泪を流させ給へば誠に痛はしく見え奉るなり自らもくはしき事は知らねども是れより西にむかひて四五日おはしませ白濱の様に霞かけて日の光りも長閑にていと懐しく風吹きて山のけしき木々のけしきも面白き所を七里ばかりおはしたる時大臣公卿を三千人たなびき黄金の車に乗り給ふ止事無きに逢ひ給はゞ御尋候へ彼の所へ常に行きかよふ人なり問ひ給へ是まではいかなる人の教へ給ふぞと問はせ給はゞ娑婆世界を照し給ふ月光菩薩の教へにて候冥途にては太子菩薩と仰せ候へ彼の渺々ある所をそこはかとも無く迷はせ給は



此邊脱文あるが

南無歸命頂禮天子本地太子菩薩の御上へに差し參らせんと仰ければ、太子うれしく思しめして、御馬に打のりて西をさしてゆき給ふ。御教への如く白濱の如く霞掛けてそこはかともなく、地は水精の如くにて、行く道も覚えさせ給はず、其時歸命頂禮月光天子菩薩天子本地勢至菩薩と念せられければ、西と思しき所より、黄なる日ひかりを太子の御上に差しまいらせ給ふ。是を案内にておはしければ、公卿三千人ばかり引き具して、黄金の車に乗りたる人に逢ひたり、太子馬より下りさせ給ひ、便なき申事にて候へども、娑婆にて契し人大梵王宮黄金の筒井と申所に生れたると、夢に告侍るなり、尋ね行くなり、願がはくは大慈悲の御志を以て教へさせ給へ、車の簾打揚て下りさせ給ひての給ふやう、實に怪く有り難くこそ候らへ、有漏の身是迄は不思議にこそおはしましたれ、御身尋ね給ふ所は自も委しく知らずとの給へば、太子の給ふやうは、はかなき縁に引れいつを限りの逢瀬とも知らず、心苦しきとて御涙を流させ給ふ。昔し釋尊は凡夫の時、耶須多羅女を捨てさせ給ひてこそ、凡夫の纏をば一大事と思しめせ、されど

も釋尊は衆生利益せんがために、方便に世に出でさせ給へり、太子は未だ凡夫の御身にたまはせば、いかに悲しく、思しめすらんと、御心の内御痛はしくこそ候へ、是より西に向ひて行き給はん時、世に熱き風吹きて、冥宮のほの燃え焦る、を見るに、心も消えぬべし、又大なる川あり渡るべき様更に無し、向ひの岸に木三本有り、下にはたけ拾六丈の姫鬼あり、此方の岸には僧一人おはします、此僧一人に逢ひ給へ、いかなる人の教へぞと問はせ給は、娑婆にては日光菩薩とて、一切衆生の願ひを滿て給ふ、大慈大悲の觀世音の教へと仰候へ、其僧は尋ね給ふ所よく知り給へり、道にて心細く思しめさば、其時歸命頂禮日天々と唱へ給へとて、すぎさせ給ふべし、太子くはしく教へ給ふ嬉しき限りなし、又龍に打乗りて七八里もおはしますらんと思しめす時、あつき風ふきて、めうくわつの炎ほ燃え焦る、を御覽じて、太子歸命頂禮日天々と唱へ給ひて過ぎ給へり、又大なる川あり、近く打より見給へば、ひろさ一万由旬、浪は炎ほにて、浪の間には毒蛇群かりて、或は人を呑み人を捕へけり、渡るべき様もなし、川の端に二十二三ば



かりなる僧、香染の袈裟にて錫杖を杖に突き給へり、まことに美しくおはしけり、太子馬より下りさせ給ひて、物申さんとの給へば、僧何事ぞとひ給ふ、大梵王宮の黄金の筒井と申所を知り給へるかと申給へば、僧いかなる人なれば、有漏の身ながら此の道にはおはしましけるぞや、太子申も便無く候へども、娑婆にて唯假初の契りを結びし、女人を尋ねて是迄來たり候、是れより歸るべきにも非ずとて、御涙を流させ給へば、僧も哀れと思し召し、御泪をぞ流がさせ給ふ、川を渡らんとし給ふとて、かくぞ詠み給ふ、

いささらはうろのこの身をすてはてん

のちはまよはぬ道もありやと

我有漏の身にて協はずば、生を替へても逢ひやせんと、川へ身を投げんと思しめしければ、御僧かく詠み給ふぞ有り難き、

うろの身をすて、もいまはなにかせん

こゝろかはらでにしへゆくべし

と仰ありて、教への如くおはしまし、深く頼み給はゞ、なごか三世の諸

佛も謔り給はずらんまたかひく、しからずともこの法師を頼み給はゞ、吾れ昔し願を立て、十惡五逆の罪作らん衆生を導かんと思ふなり、釋迦如來三界の衆生の苦に逢はんも、一人も惡所に落とすべからずと承り候ひしにより、此かた地獄にすみ侍り、又六道四生におもむくはしめ此川の端にて定まり候なり、この故に自から川のはたを去らずして、一切衆生を救ふなり、罪ふかき罪人は獄卒も媚賺す、あまりにおもき罪人は、苦に代り候なり、炎に燃え焦る、者は、人に無き事云ひ付けて歎かせし者なり、毒蛇に呑まる、物は、娑婆にて欲心に執して、人の物を多くして取り、我物をば惜しみ、或ひは男女に心を懸け、妄執ふかくあるゆゑに、身のうちより炎燃え出てなげき候人なり、又鐵の背ある鳥に突かれ候は、好き物をば我が呑み喰ひ、人には惜しみたる故なり、紅蓮大紅蓮の氷に閉ちられてなげくなり、或は人の着たる物を剥ぎ取り、海川の魚くつを捕りてよを渡たり、佛法なご耳に觸るゝこともなく過る人なり、彼に橋三ツあり、黄金の橋は上品往生の人の渡るなり、又銅の橋は善根を爲るに末途けぬ人渡るなり、太子の迷



ひ給ふ故なり、さりながら大梵王宮を尋ておはします人ならば、此川を渡らせ給ふべきこそ痛はしくこの給へば、太子仰せには、假令この川にて命をうしなひ候とも、歸るべきにもあらず、願はくば御僧助て給ひおはしませどありければ、答への給ふは、御心に念し給はん事は、惡魔眞金剛智即と咒して、御心を剛く持せ給ひて渡らせ給へ、川の彼方の岸におはしまして、南無地藏菩薩と唱へて向かはせ給へ、又一由旬の木三本あり、下に長十六丈ばかりの鬼神あり、頭は赤く毛はそらへ生て、眉毛は三十丈ばかり生下りて、齒は上下へ生ひ違ひ、頬は鐵の如くにて眼大にして日を出せり、恐ろしさ限りなし、罪人の衣を剝ぎとりて、かの木の枝に掛くるなり、かの鬼神は罪人の煩惱の衣厚きが故に剝きとるなり、鬼神は昔しの業因なり、人のため吉きことを猜み妬み、凶き事を喜び、病有る人を憐れまず、儉貪邪見なりし者なり、思ひ知るべき事なり、かの三本の木のもとを乾の方に御らんじておはしまし候は、此鬼神是へくと招くとも、南無地藏菩薩と御唱へ候て、西に向かひて三日おはしまして、ゆゝしき所へおはしましたらんに、

六ツの道有りて、何れとも辨まへ難くあらん時、西南方二佛と念して、猶ほ西に向ひておはしませば、南に向きてゆゝしき道の候はんずるを御覺じられ給は、誠に世界も廣く清よげに見えて、美しき尼女房多くありて、これこそ愛でたき所にて候とて、招き候ともゆめく渡らせ給ふべからず、造作五逆罪なんと、念し給ひ候て、おはしませ、この女房尼は皆恐ろしき人なり、又巽の方にゆゝしき世界あり、皆白銀黄金の家を作り並べ、九重の塔を建て七寶修營の堂もあり、菩薩聖衆まひ遊び、黄金の塔を建てたる内より美しくしき女房の紅の袴を踏みしだき、扇さしかざして、いかにや往生人ならば、是へ參らせ給へ、一切衆生の願ふ所なりとて招きたてまつらんに、夢々おはしますべからず、佛と覺しき光りは右きに光りを放ち給ふ、魔炎の光りは左りに周ぐり、光りの色も黄に見え候、極樂も斯やと覺え候なり、光明遍照と唱へさせ給ひて通らせ給ふべし、此世界は僞慢地獄と申なり、ひつじさるの方へ向きて、いみじく作り廣げたる道あり、門の内には内裡などの様に美しく作り廣げたる、ゆゝしき女房殿上人など集りて、くれ



なるの扇差して是へくと招き奉つるべし、是こそ八萬地獄の初めに候へとて、即得往生と念し給ひて、過ぎさせ給へ、又うしとらの方にあたり、おそろしく草生ひ茂けり、おほろにも人の踏たりとも見えぬ道、慄くとも、此道をおはしませ、美しくしき白濱へ出て御らんせんに、白銀の地を踏み給ひて、一日ばかりおはしますと思しめさん時、やうく涼しき風吹き、紫の林くれなるの林あるべし、其を過ぎては異香薫じ、色々の花咲き亂れて宮殿樓閣玉を瑩きけり、或ひは伎樂歌唱の所もあり、或ひは座禪說法の床もあり、何れもめてたき所なり、これを過ぎさせ給ひて、遙に空へ上り給ひて御覽せんに、其れは兜卒の内殿と申所へ参らせ給ふべし、菩薩聖衆の法の如くにつらなりて、空には音楽を奏し、うる木の下には鳧雁鴛鴦の囀つる聲皆法音なり、池の邊りにはいろく聖衆舞ひ遊び、弘誓の舟を浮べ調へ、面白しとも尊とさとも中々申も限りなし、これをも過ぎ給ひて、猶ほ空へ昇らせ給ひて御らんせは、黄金の門あるべし、その邊りに龍をは繫なかせ給ひて、扉押開らきて御覽せよ、栴檀の木あるべし、其木の下にこそ黄金の筒

井あるべし、其うへの栴檀の木に上らせ給ひて、かの女房を待ち給へとさまく細やかに教しへ給ふ、太子うれしくおぼしめし、暇申給ひ、龍に乗り、南無十方三世の諸佛と念じ給ひて、川にうちいり給ふ、渡らせ給へば、さうなく向ひの岸に着き給ふ、地藏菩薩をしへさせ給ふ如く、鐵がねの木三本有、下に十丈ばかりの鬼神あり、彼を乾の方へ御覽じて、過ぎさせ給へば、かの鬼神此方へ入せ給へと招きけれども、南無大悲地藏菩薩と念じ煩らひなく過ぎさせ給ふ、西にむきて三日ばかりおはしまして、御覽すれば、ゆき作り道六ツあり、西南方二佛と唱へてすぎさせ給ふ、又南のかたにゆき世界あり、美しくしき女房あつまりて、此方へと招きければ、太子五逆災難ねんじてすぎさせ給ふ、また巽の方にゆき世界あり、白銀黄金の内裡を造りたり、人の姿を見れば、菩薩聖衆もかくやと覺たり、美しくしき女房くれなるの袴を踏したき申やう、是こそ一切衆生の願ふ所にて候へ、入らせ給へと招きけり、太子これは地藏菩薩の教へ給ひし、憍慢地獄と覺え、光明徧照と唱なへて過ぎさせ給ふ、又坤の方には、娑婆にて内裡の如くに美



くしく造り廣けたる宮の邊りに、法師などはあまた見えたり、道は青く美しくして、門の左り右きには、若き殿上人女房あまた並みゐたり、往生人ならば是へ參らせ給へ、これこそ極樂淨土にて候へ、三途の川の端にて墨染の衣きて、何とも知らぬ修行者法師の筋とも無き道を教へ給ひて、そなたへ入らせ給ふは、無間地獄へ越く道にはや入らせ給へとて、招じけれども、太子は即得往生と唱へ過ぎさせ給ふ、太子思しめすやうは、地藏菩薩の教へ給ひし地獄なり、御教へなくばかの所へ行かん事よとおぼしめし、八万地獄の口なりとて、急ぎ過ぎ給ふ、又罪つみの方に向きておはしませば、草深くおぼろげにも、人の踏みたりとも見えす、地藏菩薩の教へ給ひし儘に、慍いせく候へども、叢を分け入り給ふ、三日ばかりおはしまして、御覽すれば、美しくしき白濱あり、其れを御覽すればいと涼しき風吹きて、小松生ひ並らびたり、地を見れば金銀瑠璃にして、御影も映るほどなり、心すみて嬉れしく思しめして、次第におはします程に、紫の林くれなゐの林を過ぎ給へば、赤梅檀の林にもなりぬれば、異香薫じて光りをまじへ、宮殿樓閣ちようくわに

見えて、或ひは伎樂をなし、或ひは説法衆會の所もあり、池の中に蓮花咲みだれ尊としとも中々申ばかりなし、めしたる駒の足音も所から御法の聲にそ聞えける、かやうの所を御覽すれば、御心の止る事限りなし、然有るべき事ならねば、過ぎさせ給ふ猶空へ昇り給ひて御らんすれば、大なる門あり、金銀瑠璃なり、これは兜卒の内院なりとぞ仰せける、くわしく御覽すれば、七寶の塔を立て並べ、天蓋幡は天に翻がへり、宮殿樓閣重々にして、菩薩聖衆かづをしらず、うゑ木の下には、鳧雁鴛鴦迦陵頻といふ鳥囀づる聲皆法の聲なり、池の中に蓮花咲き亂れて匂ひを交へ、弘誓の船に棹さして、天人聖衆法師の如くに列なり、天の樂を奏し舞ひ遊ひ給ひ、或は法音の降るに場もあり、或ひは座禪入定の床もあり、或ひは始めて往生する人の互に供養をなし、娑婆にて憂かりし事を語り合ふ物もあり、深き風吹きて匂ひみち／＼たり、太子是を御らんすれば、御心とまりてあはれ姫宮を尋ねぬ身ならば、かやうの貴き所に有らまほしく、暫く御心を止めておはしませども、さて有るへき事ならねば、爰をも過ぎさせ給ひ、姫宮を尋ねずば、か、



る有難き所をいかでか見むと思しめして、また猶空へのぼり給ふやうく、近付き見たまへば、しろかねこがねの築地をつき、黄金の門を立てたり、即て門をば此間落し門に立て給ひて内へ入りて御らんずれば、實に黄金の筒井あり、其のものとに赤梅檀の木あり、高さ一山旬あり、高く登へ上りて更に上ぼる様もなし、されども太子は上らせ給ひ、井の許を下し、姫宮の渡らせ給ふやと、久しく待たせ給へばや、久しくありて、此の頃戀ひ悲しひて尋ね給ふ、姫宮と思しきが、黄金の花籠に黄金の花を摘みて持たせ給ひて、おはしますを御覽すれば、娑婆にて御覽じ給ふより猶美しく、光り指し添ふ心地して、玉の簪玉の飾りあざやかにして、筒井の許に臨みて花をすゝんかごとて、水をむすびあげんとし給ふに、池水にうつり昔契し太子の御面影見えければ、ひめ宮不思議に思しめし、我すでに大梵王宮に生れながら、猶も妄念の心には、昔し契し人の見えけるぞや、耻かしなど、獨いひ給ひて、かくぞ詠じ給ふ、

むかし見し夢の夢に見し人の

太子姫に會合す

つゝ、ゐの水にうつるはかなき

この給ひて、梅檀の木を見上させ給へば、太子と御目を合はせたまひ、此はいかに夢かや、昔の人の此井にうつる不思議やと思ひしに、うつつに見奉る事の不思議さよとて、御泪せきあへ給はず、太子は木より下りさせ給ひて、有し御事とも語り給ふ、姫宮仰せけるは、太子有漏の身ながら、何にとて是迄はおはしまし候ぞと、御志しの有難さよとて、御泪計りなり、太子摩耶國の事、婁國へ参り、大王に對面申て、姫宮の隠れ給ふを歎ぎ給ひし事、夢の告げありて御心を盡し給ひし事、様々語り給ひ、ひめ宮御側ま近く寄給へば、ひめ宮仰せけるは、自に近くは寄給ふべからず、昔こそ迷ひの凡夫にて候へ、今は大梵王宮とて有難き所に生れて候へば、朝夕花香を供へ奉る身にて候へば、只今も此花灌ぎて参らせんとて是迄参り候へばこそ、逢ひ参せて候、自は天の飛行と申物を持ちたり、太子は未だ有漏の御身なり、暫く御待候へ、天人達撰らび候は、是より歸へらせ給ふべしと仰せければ、太子御恨の涙をながし給ふ、仰せにはあはれ人の爲まじき物は戀なり、此道と申す

彦火々出見尊の海宮の事と似たり



は、おぼろけ人の通るべき道にても侍らず、我不思議に諸天諸佛の御憐みにより、煩ひなく此の道を尋ね参り逢ひ奉るかひもなく、如何なる天人なりともなごか憐れみを懸ざらん、是程の御心を中々恨ても何かせんとて、御袖を絞り給ふ事限りなし、いかにもして本の道へ歸りなんとの給へは、其の時ひめ宮の給ふやう、ことわりも知らず恨み給ふぞや、自は太子に猶増りて思ひ奉りしなり、太子はなほも摩耶國にて、千人の后にも慰みておはししが、自は太子を待ち詫び歎きし事たどへなし、幾久しく存らふべき身なれども、纔か十五六になる世を空しくなり、親にも物を思はせ、心を盡くし參せしも、誰が故ぞや、不思議に縁ありて、大梵王宮に生れて候へども、猶煩惱の紐や強かりけん、女人の身を變へずして生るゝこそ悲しけれ、苦しき事も無く乏しき事候はねども、女と云れ候なり、君は暫し待せおはしませ、大梵王に参りて此由申べしとて、黄金の空殿に参らせ給ひぬ、太子姫宮の給ふも誠に道理と思し召して、彌々御泪眼きあへたまはず、さてもひめ宮は大梵王に参り申給ふやう、娑婆にて契りし維曼國の金色太子、是迄

二人毘沙門天吉祥  
天となりて再縁を  
結ぶ

尋ねきたり候有し事共こまやかに語り申させ給へば、大梵王も委しく聞し召して、哀と思しめし、昔より戀する人多しといへども、有漏の身ながら是迄尋きたる人を歸へすべきにもあらず、黄金のつゝゐの水にて身を禳ぎ、天の羽衣を着せて具してまいれとの給へば、ひめ宮大に喜び、此由申させ給へば、太子嬉しく有難く思しめして、こかねのつつゐの水をあび、天の羽衣召し給ひ御覽すれば、大梵王はまことに相好氣高くおはしまし、玉の冠り鮮やかにして、こかねの床の上に御座を敷て座し給へり、太子は床より下の座におはしませば、床の上へ引きあげ給ひ、太子をつくくくと御らんじて、慈悲の御眼より御泪を流し給ひて、如何なる人にて入らせ給ふぞと問はせ給へば、我は維曼國の者なり、ひめ宮故に是まで尋ね参りたりと申させ給へば、大梵王の給ふ様ひめ宮は元より此國の人なり、假に人間に生れたり、如寶珠とは此の人の事なり、太子に深き契り有りて、辱くもこの許に生れながら、又逢ふことを得たり、女人の身を改めて菩薩の位に昇るべき人なれども、太子に心ざし深き故に、未天女の位にておはします、太子は



未有漏の御身なれば、是におはしまし候べきにあらず、是より東に福徳山といふ山あり、何事も是に劣らず樂しみ榮えたる所なり、其山へおはしまして、毘沙門天王と顯はれ給ひて、一切衆生を道びき給へ、姫宮は吉祥天女と顯はれ賜ひて、毘沙門の傍に御座しまして、絶えぬ契りを結び賜へ、毘沙門天女と顯はれて、萬の人の福を願がはん時、此の箱の蓋を明け給ふべしとて、三つある箱の中に、少し小きを取り出たし、太子に奉まつり給ふ、ひめ宮には飛行の玉を奉まつり給ふ、一切衆生の願はむ時は是を蒔き給へと仰せければ、ひめ宮も太子も喜び給ふ事限りなし、さて福徳山におはしまして御覽すれば、白銀黄金を鑲て木立美しく、宮殿樓閣重々にして、十方淨土も斯やと覺えてめでたかりけり、さてこの山の主しに成り給ひて、毘沙門天王と顯はれ給ふ、姫宮は吉祥天女と顯はれ給ひ、一切衆生の人ねがひを満て給へり、四わうてんのうしとらの方に、毘沙門天王とは此事なり、さても太子の父大王は、三百五十歳を保ち給ひて、普賢菩薩と顯れ給ふ、瞿婁國の大王は五百歳を保ちて、惡魔降伏と顯はれ給ふ、母后は楊柳觀音と顯はれ

給ふ、摩耶國の大王は三百歳を保ちて、勢至菩薩と顯れ給ふ、太子摩耶國にての千人の后は、皆星の如く顯はれ給ふ、何もた、人にておはしませずか、る貴き菩薩と顯はれ給ふ、一切衆生の佛と顯はれ給ひ、凡夫を救はん爲なり、有難きとも中々申はおろかなり、是を見ん人々は、皆三寶をうやまひ父母に心ざしを盡し、君に仕へん者は、忠節を爲し、我より下の者には慈悲を爲し、情け無き事をふるまふべからず、殊に慈悲有りて、この毘沙門を信せん人は、現世にては福徳を爲し、後の世にては必々佛道に生まれつかふへし、何んぞ世の中の仇なるに報はんや、この冊子見終らん人は、毘沙門の眞言におんへいしらまんやそわかと、三返南無吉祥天女と唱へ給ふべし、



語りものにせる同名の古刊本あり末に通あぶら町ふ  
ちた新板と記して年號なしそれには全篇を六段に分  
ちて挿繪したり主意はすべて同じけれど文句は頗異  
なりけだしこの本を種として謠ひものに作れるもの  
なるべし

貴船の本地





貴船の本地

寛平法皇とぞ申ける、其頃大臣一人おはします、宇治の大臣とぞ申ける、御子をば本院の中將定平とぞ申ける、帝の御覚えもかしこくて殿上にてかたを並ぶる人も無し、朝夕御前を離れずしてぞおはしける、法皇御感のあまりにや、中將に宣旨なりけるやう、いかに定平うけ給はれ、何といふとも、汝の榮花には、みめよきてうに近付てたはふれたるにしかじ、都の中に見目よからん人有らば、假令夫妻有りといふとも、汝に許すと宣旨なる、中將いげの公達方、こもりの日みすなごいふとも、姫君達よきと聞くをば迎へ取りて御覧じけるに、されども御氣に合ふ人無りけり、迎へては送り給はす、一々難をぞつけられける、髪かみの長さを蛇身の相、あまりに短きは鬼神の相、色の黒きは牛の相、あまり白きは憶おぼめたる相、見目は好けれど心無し、心あれど見目わろし、脊せの高きは山木やまぎの相、あまり少さ

みめよきてうに近付てたはふれたるにしかじ、都の中に見目よからん人有らば、假令夫妻有りといふとも、汝に許すと宣旨なる、中將いげの公達方、こもりの日みすなごいふとも、姫君達よきと聞くをば迎へ取りて御覧じけるに、されども御氣に合ふ人無りけり、迎へては送り給はす、一々難をぞつけられける、髪かみの長さを蛇身の相、あまりに短きは鬼神の相、色の黒きは牛の相、あまり白きは憶おぼめたる相、見目は好けれど心無し、心あれど見目わろし、脊せの高きは山木やまぎの相、あまり少さ

こもりの日みすなごいふとも、姫君達よきと聞くをば迎へ取りて御覧じけるに、されども御氣に合ふ人無りけり、迎へては送り給はす、一々難をぞつけられける、髪かみの長さを蛇身の相、あまりに短きは鬼神の相、色の黒きは牛の相、あまり白きは憶おぼめたる相、見目は好けれど心無し、心あれど見目わろし、脊せの高きは山木やまぎの相、あまり少さ

○貴船の本地



扇合せ 圓融院  
合詞に宮の御方に  
うへおはし給ひて  
亂舞うたせ給ひて  
日に上爲させ給ふ  
云々上爲させ給ふ  
しける螺鈿の御口  
給ひける十枚の御  
給ひて唐の羅の御  
そごのさいでにつ  
しみて花の枝につ  
女耶白の枝につ  
りて付させ給へる  
そ初なるべき  
そ初なるべき

きは貧相なりとの給ひてこそ送られければ都のうちには心に  
叶ふ人も無し、心のみ澄して、春は花の本にて日を暮し秋は月の前に  
て夜を明す、御膳も定まり給はず、その頃内裏に卅日の花の連歌あり  
けり、諸官の司参りて扇合せありけり、中にも中将どの、父方に源氏  
の大<sup>おほい</sup>臣との、御扇は銀の彫り骨<sup>ほね</sup>黄の蟹<sup>かに</sup>目都に聞えける雙びなき書  
かきを召して、黄金二十兩たびて、視<sup>し</sup>目を驚かす程の繪をかけと仰せ  
ければ、うけ給りて目をおどろかす程の書は見めよき如くみめよき  
女房をぞかきたりける、魂を入て物をいはせ笑みを含くみ動く程に  
ぞ書きたりける、法皇御敬覽ありて多くの扇あると雖ども、この扇に  
上越すはよも有らじ、朕<sup>ま</sup>が寶に思せども、中将に御宣旨なる、開<sup>ひら</sup>けて御  
覽じて思し召しけるやう、あはれ扇や、骨の尋常さよ蟹<sup>かに</sup>目の愛<sup>あ</sup>たさよ、  
かきたる書<sup>う</sup>の美<sup>う</sup>くしさよ、いかなる筆のかきたるぞ、主<sup>ぬし</sup>ある人を見て  
かきたるか、いかなる定平なれば、九百六十人の女房の中にも、是程に  
みめ美<sup>う</sup>き人の無るらん、とても人間に住むならば、かやうの人に相馴  
れて、一夜をも明してこそ、今生の榮花もおもふべけれ、扇を開きて

やまうは やまい  
なり

見給ひて、唯假初と思へども、戀といふ二た文字のはかなき事は、逢よ  
り外にや止むべき事ぞ無からまし、中将一間ごころにおはしつ、内  
裡の出仕もなかりけり、法皇此由聞しめし、山々寺々に祈りをかけ、大  
法秘法をつくせども、その効し更になかりけり、戀のやまうなれば逢  
はではいかで止みなまし、扇の書を戀ひ給ふなり、いつくの時逢見  
んども思はず、せめて扇のぬしの許に行き、何處<sup>いづく</sup>にある人を見てかき  
たるぞ、尋ねばやなどと思ひ、大臣<sup>おほい</sup>殿へおはしましければ、人相<sup>ひとがら</sup>をさ  
る人にて、いかに中将どのの面<sup>おもて</sup>瘦<sup>すく</sup>せて見え給ふ、戀をさせ給ふかと仰  
せあれば、中将耻<sup>は</sup>かしながら此詞につきて申<sup>ま</sup>、嗚呼<sup>あ</sup>がましき事にて候  
へども過ぎにし頃内裏にての、扇の書を見てより此かた戀路に迷ひ  
候なり、その書かきは何處<sup>いづく</sup>にやさふらはん、尋ねばやと申給へば大臣<sup>おほい</sup>  
殿打笑ひ給ひて、それこそ殿の正體無き戀なれ、人の戀するといふは、  
よき人の姿を物越しに見て、あはれ餘所<sup>よそ</sup>に見初て戀ひもし、逢ふて逢  
はざるが戀し、又は互に忍び忍ばるれども、親の惜しみて戀しなご、  
いふ事こそ候へ、書かきが心き、で見目よき人をかきたればとて、其



鞍馬 平安宮の北  
賀茂より奥にあり  
毘沙門天を祭る

れを戀るといふ物や候べき、いかに中將どの、戀慰さめに見ゆべき女房の物語りせん、聞ていか程戀しきを忘れ給ふべきと仰ありければ、中將申やう上品に語り給は、三月は慰むべしと申給へば、大臣殿聞しめして、さらば語りて聞せ申さん、是より鞍馬に参り給て、大門より南に細道あり、是を遙に行きて見れば、僧正が谷の奥に大なる池あり、名をばみぞろ池といふ、この池の丑寅にあたりて、岩あり、岩の邊に穴あり、穴の底を三里ばかり行き、國あり、國の名をば鬼國といふ、大王一人あり、名をばらんとはそうといふ、此むすめ二人あり、あねをば十郎とせんといふ、年十六歳なり、妹をばたつ女の宮といふ、とし十三になり給ふ、見ゆべき事、漢家本朝にも有難し、毘沙門の妹吉祥天女にも勝れたり、三十二相足らひて扇の畫にたまさりて美しきぞよ承はれ中將とありければ、中將申給ふやう、さやうの人には何として行き逢ひ候べきと申給へば、凡夫境界にてはかなふまじ、佛神三寶に祈誓申さば、夢現にも見せ給ふべきかとあれば、中將これを聞ては、恨めしかりける世の中かな、無しと思は、さても止みなんに、有るぞときけば

太秦長樂寺云々  
の西二里計に在  
り廣隆寺といふ  
樂寺は同京東山  
今洛東三條山に  
院は洛東三條山  
俗に北野三條山  
共いふ北野三條  
稻荷に同北野三  
神祇園は今の八  
京社の北に下上  
あり春日寺は和  
住吉天王寺は長  
攝津國に在り長  
大和國にして十  
面觀音なり十一

戀しさのみぞ増りける、中將歸りて、ゆめの明燈菩薩を掛奉り、夢の中に見せ給ふべしと申せども、夢にも見えず、佛神三寶に申て、行逢べしとぞ大臣どの御物語り有ければとて、内々束帶脱き置て、白き淨衣に立烏帽子召して、父大臣に暇申て三條を出で給ふ、清水に七日籠り給ひ、南無歸命頂禮若我誓願大悲觀世音然るべくは所願成就し給ふべしと申せども、その験も更になし、それよりして、太秦長樂寺蓮花王院、北野、平野、稻荷、祇園、賀茂、春日、住吉、佛法始まる天王寺、伊勢大神宮の靈佛靈社残りなく参りめぐる程に、程なく三年にも成にけり、長谷に参りて申やう、觀音は三十三へん衆生の願を満てんと誓ひ給ふなり、定平が所望をかなへさせ給へと申給へば、七日と申に觀音の示現を蒙り給ふやう、自は近江の湖の本のまゝ、山となり、諸方を見たれども、汝が婦妻の行くへを知らず、鞍馬へ参りて申せ、それこそ汝が願意成就すべけれど有りければ、中將打驚きて悦びけり、三百三十三度の禮拜をがみ奉り給ふ、明くれば鞍馬へ参り、南無大悲多聞天定平が申す所願成就し給へと、七日籠り申させ給へども、示現も更に無からま







五障 女人は輪王  
 三障は皮相障障肉  
 煩悩障心相障障な  
 り  
 五障 女人は輪王  
 三障は皮相障障肉  
 煩悩障心相障障な  
 り

そへて持ち給へるが、美しくしき姿を見てよりは、やいつしか心移りて、かの扇をば腰に指してぞおはしける。中將さし寄ての給ひけるは、いづくの人にて渡らせ給ひ候へば、たゞ一人まいり給ふぞ、の男身さへこれほど山深くして荒涼しく候に、とありければ、宮このよし聞し召し、妾鬼國と申所の者、一人も具足せずとの給へば、中將申給ふやう、この御堂に三七日籠り婦妻を所望申候へば、この曉の御示現に面にある女房を、汝が婦妻たるべしと御示現を蒙ふりて候、いつくの里までも御供の由申されければ、龍女きこしめし、妾が住みかど申は、佛法も無く人もなし、さやうの所へおはすべきかどありければ、中將いかやうにも候へ、佛の御計らひにて候へば、いつくの里までも参り候べしとの給へば、宮この由き、給ひて仰せけるは、さなきだに女房は五障三障とて罪深く五障の雲あつくして晴れがたくけんねん無量劫とて人の愛念着ぬる物は、五百生に生れあはして其の苦み止む事なし、されば妾數ならぬ身をば惜まねども、殿を見奉るにぢ、に一人の子なり、妾もなひ給ひて候は、五日十日ならでは存命へ給ふべか

らず中將ごのと語り給へば、中將此由き、給ひて宮を見奉りてよりは、止まりても思ひ死に死なん事治定なり御供申てこそ死ぬべけれ、火の中水の底までも、御供と申されければ、宮もさすがに振り棄て難く思し召し、佛の御計らひならばとて中將を打連れて、汀の水解けんさて、男女の契りのほごを思へば、わりなき物はよもあらじ、唯かりそめの心地して、鬼國をさしてぞ行き給ふ、鞍馬の奥僧正の谷岩間をつたひ尋ね入、みぞろいけの端にゆきてうしとらに岩屋あり、此は穴の端にて、宮は中將の袂にすがりの給ひけるやう、これより中將ごのかへり給へ、かく申まじと思へども、此穴へ入る者の千人に壹人もかへることなし、鞍馬へは月毎に参らんするなり、命こそ限なれ、常に逢奉るべきとの給へば、中將御身故に死ん命は露塵とも思はず、いづくの雲の果までもとの給へば、方及ばずして岩の底へ打連て入り給ふ、穴の底へ入給ふより、月日の光りも見え給はず、長夜の闇の如し、足に任せて尋ね入り、くらき闇路に迷ひつゝ、思ふ妻ゆゑなれば、是も飽せず覺えける、あなのそこ五十里ばかり入りて見れば、大なる國あり、これ



こそみづからが住家鬼國と申國にて候へと宮の給ひける高さ所へ登りて見れば、日本國を五ッ六ッ取並べたるとも、いかでか是程廣かるべきやと覺えたりや、遙に行きて見れば、大なる川あり、汀の白砂などの面白く、邊も耀き渡りて心詞も及ばれず、この橋を打渡り遙かに行きて見給へば、鐵の築地あり、高さ十丈ばかりあり、これ妾が父大王のまします鬼國の惣門にて候へとあり、築地の上を十町ばかり歩み給へば、銅の築地あり、これも十町に築あげたり、同じく門をぞたてたりける、これこそ大王の中門にて侍れとありしを、六七里ばかり歩みて行けば、白銀のついぢあり、これも十町に築き上げ、同く門をぞ立てにけり、これこそ大王の花の都の中にて候へと、給へば、見るに實に詞にも及ばれず、金銀瑠璃をのべたるとはかゝる事にや申すらん、水精の真木柱中の桁組白銀にて、天井おなじく張り回はし、七間四面の守殿九間の渡り廊下、十二三間の遠侍、銅をのべて立てつゝ、け、瑠璃玻璃をのべて板にしき、白銀黄金綾錦を以て張り、玉をつらねて、懸け、黄金の扉七重の屏風、八重の几帳、九重十重の臺に、心詞も及ばれ

比翼の歌に在天願作運  
長恨歌に在地願作運  
比翼の歌に在天願作運  
長恨歌に在地願作運  
比翼の歌に在天願作運  
長恨歌に在地願作運  
比翼の歌に在天願作運  
長恨歌に在地願作運

す、二世の契り比翼の語らひをなしてぞまし／＼ける、宮の給ひけるやう、君は花の都の人なれば、卿相雲客の遊びに戯れてやおはすらんに、かゝる物愛き所にていかゞ寂しく思すらん、四方の景色御覽せよとて、中將をいざなひて行きければ、青黄赤の色を現はし、草木枝をならべ、梅や櫻は咲き亂れ、遠山の霞にかかる雁がぬも、遙かに渡る呼子鳥、谷間を傳ふ鶯の初音を聞や珍らしき、中將かくやと打ながめける、立わたるかすみうちの鶯は

花のふ、きに迷ひてぞなく

とかやうに打詠めつ、又南を見給へば、松にかかる藤の花、岸間を傳ふ青柳の糸亂れ、山吹おそ櫻卵のはなどこなつ、あやめ草、晴天の蟬丸は聲ども惜ますぞさけびける、これや夏かど見えにけり、西を眺め給ふに、紫苑りんだう、うつほ草、露おもげなる女郎花、松むしすゝ虫くつわむし、かれ／＼鳴くやきり／＼す、紅葉の落葉散り積り、秋の名残や惜むらん、北を眺め給へば、時雨霞はひまも無く、松の緑に霧降りて、池に鴛鴦浮き寝して、庭に白雪降り積りつらなるは、蓬萊宮とも云つべ



しか、るめでたき所に襦袖かさねて何時迄も斯てぞ契りける所に、  
 龍女の宮の御色打かわりしほくこみえさせ給ひけり、妾が住家に  
 只今不思議の物参らんする、忍びて見給へとありければ、障子の内に  
 て御覽するに、雷鳴り落ち天地震動して動き渡る、去る程に御門のそ  
 とに五町ばかりの鬼神ゆるぎ出て申やう、宮はわたらせ給ひしか、大  
 王より急ぎ渡らせ給へとの御使なりと申せば、宮此よし聞し召し、妾  
 此程鞍馬へ参り下向し候ほどに、やがて参り候んと申せとありけれ  
 ば、乙磨うけ給りて歸りけるが、御門より立歸りて申けるは、大王此ほ  
 ぞ九献も御召し無し、生け肉にまいらせん嬉しさよ、人臭く候とぞ申  
 ける、宮の給けるは妾が内にけふ此ごろいかなる凡夫のあるべき、此  
 ほど精進にて鞍馬へ参りつれば、罪淺き凡夫の踏む土を踏みつれば、  
 さやうにあるらん、見苦し歸れと頻にありければ、慥に人くさく候物  
 をとて、つふやきてぞかへりける跡にて仰けるは、是こそ妾が父大王  
 の内に、屈夜及とて御厨子の兒にて候、年九になり候、女子にて候と  
 かり給へば、あら恐ろしや、見たりとも覺えず候、九になるさへ、丈け五

慧杖か慧は定戒  
 慧の杖にして智慧  
 發の杖と云る意の  
 名なるべし或人の  
 いへり  
 すらんは 未審なら

丈ばかりあり、十四五どもにもならんするはいか、候べき、此を従へ  
 させ給ふ大王の御威勢いかほどの事ぞとのたまへば、宮の給ひける  
 は、大王に面を合せんには、御命助かり給ふべきかと語り給ふ、さて大  
 王へ参らせ給ふべきほどは、何所にて待ち参らせんとの給へば、宮聞  
 き給ひて、哀れ君ははかなき事を仰せ候ものかな、妾が候はぬ時は、面  
 四におびただしき鬼神ども來りて、手を響かし地を叩き候はん時は、  
 石の唐櫃に入れ奉り、大地五丈が下に埋みても、いかでか殿の御いの  
 ち候べきと有りければ、中將恨めしかりける世の中かな、五年十年も  
 なくして、わつかにけふ七日添ひ奉りて離れ申さん事よとて、袖をし  
 ぼり給ひける、宮は帳臺にいりて、人を大になし、さすれば少さくなる  
 杖ありゑはつじやうの杖といふ是にて摩りたまへば、中將俄にその  
 脊三寸計りに成り給ふ、宮肌の守りにをさめて、下に掛させ給ひ、父大  
 王へ心凄く参り給ひぬ、大王の給ひ遣るは、宮は此程いづくへおはし  
 たるぞとの給へば、此ほど精進にて鞍馬へ参りて候とのたまふ、さて  
 は精進にてましますか、御酒参せよとありければ、らんはごも見事な



る瓶子に酒を入れて肴調へてぞ參せける、又御肴にとて人一人生きながら取出す、なか／＼肝心も身に添はず、如何なる物ぞよく見ばやと思ひて守の口に目を當て見れば、中將の母方の從弟二條の花見の少將とて、春は花の本にて日をくらし、秋は月の前にて夜を明す詩歌管絃にもくからず、ならぶ人なりし人なりし、三十一にぞなり給ふ、父母にひとり子にてましますが、父は七十二になり給ふ、母は六十にぞならせ給ひける、又七五になる幼き者あり、誰を父ともいはん一方ならぬ悲しさよと歎く有様、見るに心も消え入る心地して、定平も是にありと言はまほしけれども、心ば計にて、我も／＼あの難を遁るべきとも覺えず、肝魂も身に添はずぞありける、この花見の少將は賀茂の神宮におはしけるが上の松原より、見めよき女房とたはぶれて、心ならず鞍馬のおく僧正が谷みぞろ池の端に岩あり、この岩のはたにおはして、思はざる外に、鬼國へおはし給ふ、さても大王の給ひけるは、はや／＼庖丁して參らせよとありければ、枝より下ろし一々に庖丁す、大王いかに此程宮は精進にておはしつらん、よく／＼宮に參らせ

よと仰せられければ、宮はもとより佛道を願ひ給事にて、常に佛法ちかき鞍馬へ參り、生死を離れん爲に肉食を斷つと申給へば、大王聞しめして、不思議也、我等が中に肉じきを止めて、佛にならんといふ物出來たる、是こそ物の始なれとて笑はれける、さらば是へ參せよとて、うしろの口前の左右の口頂きの口八の口におしいて、舌にて味はへ酒とりよせて呑でのち、面を赤め、眼を見いたして拳を握り、膝を押へ、頻に宮の方を二三度にらみ、御前は日本より男して越えたる、朕に得させよ、生け肉にせんとあれば、宮御顔あかめ、夢々候はぬ由申給へば、大王大いに腹をたて、中々耻見ぬさきに參らせよ、争はゞ耻を與へて取るべきなり、速にまいらせよと責られければ、宮はとかくの御詞もなく、候はぬとばかりにてあれば、大に腹を立て、悪くさよ、さらば取りて見せんとて、引き伏せて雪の肌、手に手を添へて探し給ひける所に、后菲蘭女走りより、大王の御腰に抱き付き、いかに況んや天を翔る翼地を走る、獸も子を思ふ道、何れか劣り勝るべき、如何に申さんや、姫が肌、父が杖をあて、探すのこそ悲しけれ、一度は隠すともゆる



無去世界 地獄を  
云なり釋氏要覽に  
地獄趣ある註に  
吐婆論云泥犁迦  
奈育無去の音コ  
なるを音便に云  
てクに轉れるなり

し給へ申と強に障おぼひ給へば、放逸の鬼なれども、後に制せられて、本の座敷になをりけり、宮は水の泡とも消なばやと、悲しみ給へども、露霜ならねば、消えもせず泣くく、立ち歸り給ひけり、大王重ての給ふやう、餘りに母なげく程に、今宵ばかり赦すなり、速になごりを惜み給へ、あすの午の刻に参らん、男を惜くば、汝を供御に爲ん、二人に一人は必とるべきぞと責られける、宮わが所に歸りて、慧發杖の杖を出し、中將を撫で給へば、本の背せにぞなり給ふ、手を取り組みて泣きつ、中將殿語り給ひける、見初め奉り、鬼國まで御とも申、死なん命は惜しからず、今更おごろくべきにあらず、去りながら逢ひ奉りて、今夜七日の契りにて、程なく離れ参らせん事のあへなさよ、夫妻は二世の契りなれば、今の世こそ程なくとも、來世にては待ち奉るべし、後世よく吊ひてたび給へとの給へば、はかなや君の空しくなり給ひて、後は、此國は無去世界の所にて、佛法も無く人間も無し、定めて僧の一人も供養し難く、經の一部も讀む事叶まじしからば、殿の奈落の底に落ち給はん事の悲しさよ、二世の契と申とも、妾わがいのちは四萬歳殿の命は百二十

年は過候はず、去れば君は是より都へ歸り給へ、我身の後世を吊らひ給へ、われ殿の御いのちに代り、父の餌食えきになり候はん、中將殿との給へば、かへし給ふども、ごとも御行末の事を思はん、五日三日も存生なからうまじ、いつくにも死なん命ちは同し事なるべし、われこそ御先に立ち候はめとの給へば、宮の給ひけるは、君の先だち給ひては、たれか御跡を吊らふべき、妾わがが申さん事よく、聞給へ、御身の先だち給ひたりども、我も此難を遁るべしともおぼえず、そのうへ妾わががあね十郎御前も波羅奈比國より妾を語らひて來たり、二人ながら生肉にとられ、是を思ふにも、たゞ君は都へかへらせ給ひて、後の世を吊らひてたび給へとの給へば、中將われゆへ父の餌食になり給はん、吾生きていかでか堪らゆべき、たゞ諸ともにとありければ、うたての殿の仰に候や、ひと道に趣きては、如何して二世は浮むべき、奈落の底にしずまん事の悲しさよ、御心ざしもつきせずば、都へ歸らせたまへ、佛法のふところにて、九丈の錫杖を修し、千部の經をよみ、五部の大乘經を開き、堂塔をたて佛を供養し、一日經をかき給ひて、五戒をたもち給ひ候は



善知識 摩訶般若  
云能説 空無相無  
作無生 無滅法及一  
切無智 入人心入  
歡喜信樂 是名善  
知識 死する共中將  
女の修行によりて成  
佛せば中將は此善  
知識なるべし也

んに何の疑候べき、妾ほどけに爲るならば、二世の契を結び九品の蓮臺に生れ逢ん事疑あるべからず、君の御ため善智識とこそおもひ候へど申し給へば、實にも逆中將も二條の御所に送られ給ひける、宮は泣くく鬼國に歸り給ふ、中將は宮に名残を惜みて暫く申べき事ありとて、互に手を取組み今はいつの世の何時にか逢ひ奉るべき、また空しく成せ給はん臨終をば、いかでか知り奉るべきと申給へば、吾等が最後はあすの午の時なるべし、吾が叫ばん聲は人こそ聞すと、も君の御耳へは聞ゆべし、實を知らんと思し召さば、半挿に水を入れ前におかせ給へ、水の色、紅の如く血になるべし、その時をかならず臨終の時とおぼしめさるべし、妾が孝養には天台山より千人の沙門を請じて、九丈の錫杖を修し五部の大乘經を讀み給んに、なごか成佛せざるべきとの給へば、中將重ねて申させ給ふやうは、宮の戀しく思ひ候はん時は、何を紀念に見奉るべきやと申されければ、實にもとて肌かたみの帶を取いだし中より切り、かたくを中將殿に奉り守りにぞおさめ給ひける、宮は暇申ぞ中將殿とて遙に出てさせ給ひけるが、また逢

べきと思ふだに、妹背の中はかなしきに、況んや借老同穴の契とおもひしに、長き別れと成にける、恨めしかりける憂き世かな、今を限りの事なれば、互の心哀れなり、中將宮を遙に送りつ、宮中將を送り、互ひにおくり送られて、行きもやらす止まりもせず、さてもあるべきならねば、宮ははや鬼國へ歸り給ひける、なつかしき妻の別れといひ、けふを最後のみちなれば、一方ならぬ歎きにて急くとなけれども、足に任せてゆくほどに、鬼國に歸り給ひけり、大王この由見給ひての給ひけるは、あら憎くや男送りて歸りたる憎くさよとて、八人のらんはともくればに仰せ付け、手とり足とり十二一重をはぎとり、紅の袴ばかりを許して丈けなる御髪を邪見の手に打搦みて、五尺の鐵の翹くわがねに引きふせて、庖丁するこそ無慙なれ、さて大王は一々に庖丁させて八の口におし入て味はひ、あらいしや此の十三年が程そだてたる子なれば、日本にほんの凡夫めが味には増したるとて、舌打をぞし給ひける、后菲蘭女の思ひ中々おろかなり、月日の如なりし二人の姫君うしなはれて、生たるかひもなきぞとぞ思はれける、さて中將は都にと、まり給ひて歎き給



ふぞあはれなり宮の臨終明日の午の刻と仰られしとて、はんざうに水を入れて御前におきて見給ふに、宮の御聲と覺えてはつと叫び給ふ音、爰まで聞えけるは今ぞ臨終なりけると、肝心も惑ひつゝ、しばらくありて心を鎮め御覽すれば、はんざうの水くれなるの如くなり、見るに涙も止まらず今は亡き人の後世を吊らはんと思しめして、法皇へ出家御暇を申されける、みかごの宣旨には汝失ひてこの三年があひだ戀しゆかしと思召しつるに、いかでか御許有るべきとぞ宣旨なり、力およばず俗の身ならばとて戒をたもち給ひける、殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒これ五つの戒なり、是れをたもち、宮の遺言の如く孝養をそせられける、天台山より千人の僧を請じて、九丈の錫杖を修し五部の大乘經をよみ、一日は經を誦し即身成佛吊らひ給ひける、さて中將晝は王威に従ひ夜は星を頂きて夜とともに蓮臺野の無常堂に行きて念佛を申、宮の後世をぞ吊ひ給ひける、さてしも中將殿父方の伯母二條の御局とておはしけるが、懷妊し給ひて七月と申に御産あり、見奉れば三十二相のかたちをうけたる姫宮左の御ゆび一つましまさず、

蓮臺野 北野の東  
外野の西にあり  
古七野の一にあり  
地なく火葬を行ひし

さる程にこのよし御覽じて、かたわなりとて、乳母に仰つけ、蓮臺野に捨られける、折ふし中將殿の出でなされ泣く聲き、給ひて、殺生戒とて、物の命を殺さぬなり殊に二門なり、爰にて忽ちに失なは、定平が五戒破れなんと、二條へ歸り乳母を付けてかしつきける程に、きのふけふとは思へども、はや年月送りけるほどに、十三にぞなり涙ふ、中將ある夕暮にこの姫君の有様をつくく、と御覽じて涙を流し給ひけるが、不思議や鬼國にて離れし宮の御おもかげに、髪のか、り立居のふるまひ、目もこ口びるに至るまで少しも違はず、誰れ教へさりければ、詩歌管絃に長じ、春は花の本秋は月の前にて、夜を明す風情、中將よくく見たまひて、飽かで、別れし宮の御事いよく、思召し出で、ぞ涙に咽せびたまひけり、姫君此よし見給ひて申させ給ひけるは、いかに中將殿いつも御歎きの色深く見えさせ給ふ物かなとの給ひければ、中將聞給ひて、されば姫君聞給へ、鬼國にてあかで離れし龍女の宮の御姿に、少しも御身のたがはせ給はず、それに付けても昔こひしく覺え候とて、今更涙せきあへず、問ふにつらさの増るかなとの給へ



草の帯 花田は月  
 草にて染るを云古  
 用ひし帯に此色な  
 備馬樂石川に石川  
 らのこま人に帯をさ  
 られて辛き悔ひす  
 はなれたる帯のな  
 げなれたる帯のな  
 此絶えたる帯あり  
 此な思ひ絶たる帯  
 文を書るにもある

ば、姫君中將の袂たもとにすがり泣く／＼語り給ふやう、いかに中將ごのた  
 しかに聞給へ、みづからをば如何なる物とか思しめす、妾わがまこそ鬼國に  
 て君の命にかはり侍りし、龍女の宮にて候なりと申給へば、中將あき  
 れてき、給ふ、よく／＼聞かせ給へば、五戒をたもち九丈の錫杖を修  
 し五部の大乘經を讀み、一日經を書き、吊らはせ給ひつるに因つて、即  
 身成佛して極樂淨土に佛の御まへにてさとりを開き候ひつるを、梵  
 天帝釋の仰に、娑婆に戀しく思ふ者のあり、二世の契をむすびたる物  
 なれば餘りいたはしく候へばとて、戻されしに、我やどるべき方なく  
 て、君の伯母ごせんせんの胎内に宿りて候ひしに、左の手にゆび一つなく  
 て、母の不興をかうふり捨てられしを、どりあげ育て給ひける、ゆびの  
 なきは飽かたで離れ奉りしとき、の紀念かたみを持て候とて、生れて十三年が  
 間なかりしゆびを、たゞいま開き給ひける、手のうらに縹はいたの帯の裂を  
 御らんじて、夢かと思へば、現まなり、まもりの中より縹の帯をとり、い  
 し合せて見給へば、かたみの帯にて、少し色までも違はずありけり、嬉  
 しきにも涙なり、互に袖を引き違へ昔を語り泣より外の事ぞなき、さ

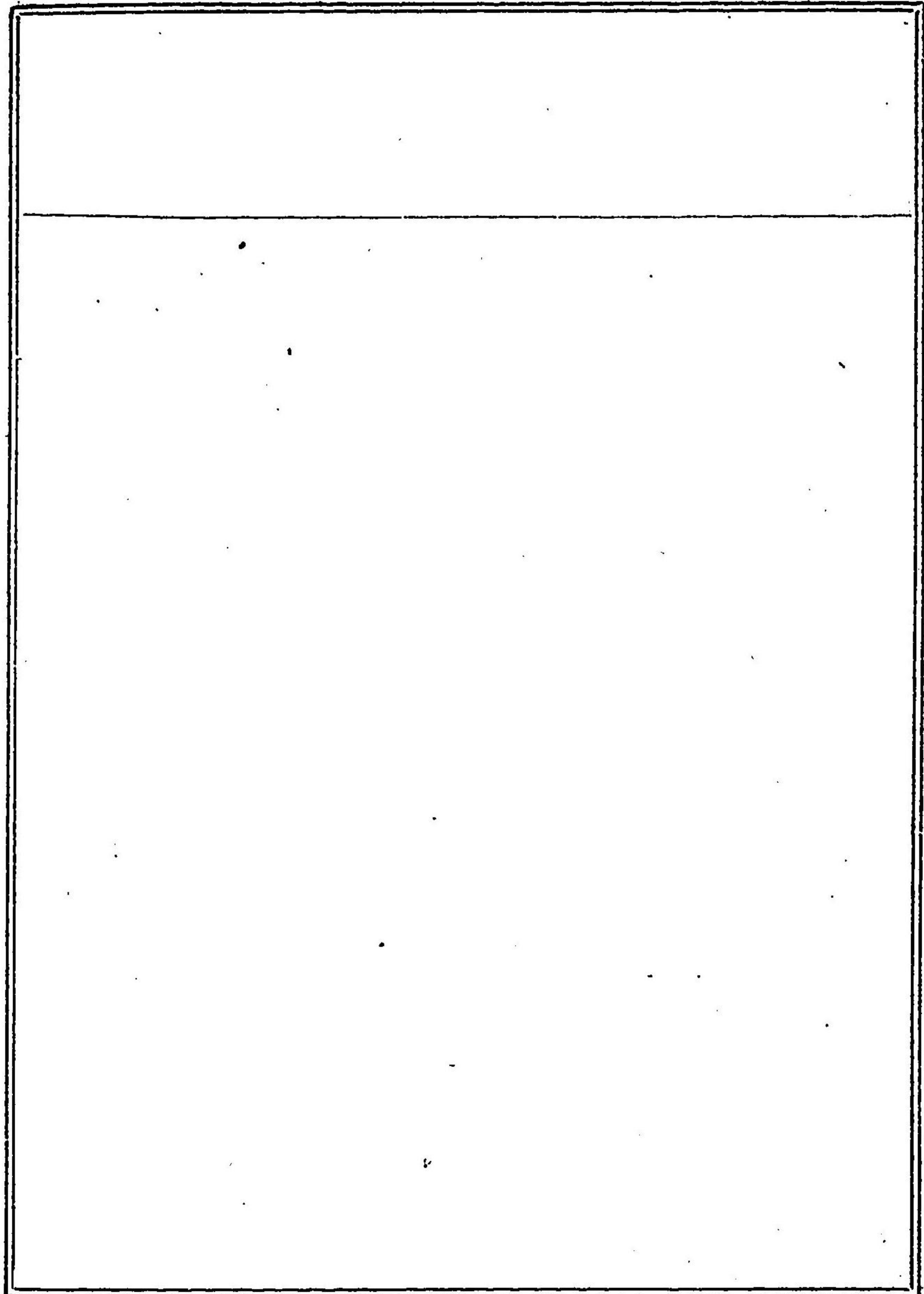
れども涙のひまよりの給ひけるは、恨しや更に賤しきしづが腹なり  
 とも、餘所よその腹にも宿り給はで又の契りも有べきに、昔より今に至る  
 まで、一門の契といふ事なしとの給へば、帝その由きこしめし、宣旨な  
 りけるは、別れて五年十年ありて行逢ふだに深き縁とはいふぞかし、  
 况んや一河の流を汲だにも、五百生の契といふ、これは十三年にて生  
 れ合ふ、その上過去のかたみを持ちて來たらんには、一門なり共くる  
 しかるまじとて、宣旨を下し給ひぬ、又夫婦にぞなり給ひける、悦びの  
 宣旨を蒙りて、こたび比翼の契を結び給ふなり、か、りける所鬼國の  
 鬼これを見て申けるは、あら憎くや一度喰れたるにも、懲りよかし、猶  
 も契を忘れず、また生れて逢ひたる契を忘れず、又生れて逢ひたる事  
 の悪くさよ、行きて二人ながらとりて喰んとぞ罵りける、鞍馬の毘沙  
 門これを御らんじて、別當に示現ありければ、別當大きに騒きてみか  
 ごとへ奏問申されければ、帝王きこしめして、明法道の衆徒を召して、例  
 文ぐまを開かせ給へば、申すやう、この鬼は節分の夜來りて、日本の人を喰  
 べし、但し此鬼のわたるまじき事あり、七人の博士にて、七々四十九軒



の家の物をとりて、鞍馬のおく僧正が谷みぞろ池の端なる岩穴塞ぎよく封じて三石三斗の豆を煎りて鬼の目を撲つといふ事をするならば、鬼の十六の眼を潰ふされて抱へて歸り候べし、夫猶も、鬼が人を喰んとせば、鱒を焼て串にさして、五門にたて侍らば此焼串を取るべしと、例文にぞひきける、七人の博士を召して四十九けんの家物にて鞍馬のおく僧正谷みぞろ池の彼の岩穴を封じて塞ぎ、三石三斗の煎豆にて、鬼の目撲といふ事をいひて、目を撲ちければ眞の眼うたれ抱へて歸りける、らんば總王申ける、穴をこそ狭ければ、封じ塞ぎけるとも、天をばよも塞がじ、いざや行て取んとて、八萬四千の鬼を率つれて雲霧の如く渡りけるを、又鞍馬の毘沙門別當に告げ給ふ、急ぎ帝へ奏聞す、又明法道の例文を引かせ給へば、吾朝に五節供といふ事を始めて鬼をたばかるべしと申せば、さらばとて節供を始め給ひぬ、正月七日に若菜をつみて七くさとして叩き、三寶にたてまつるべし、ふし矢の的を射る事鬼の眼を射といふ事これなり、三月三日桃の花しんを取りて、鬼の脛を呑むとてこれを呑む、鬼呑みといふ事也、草の餅は鬼

の身の皮とてこれを喰ふ、五月五日にあやめのねは鬼の髪とてきざみ入てこれ呑む、粽を結ひては鬼の髻とてこれを喰ふ、七月七日に素麺おにの血筋腸とて是を喰ふ、九月九日の菊の花は鬼の眉毛または身の毛とて酒に入て呑む、皆この祭五節供のいろくをして、その祝にせらる、らんばそうわうこれを見て、力及ばず申やう、日本の者は強ちにかしこく、心健きぞや、たばかられて叶ふまじとて歸りはんべりけり、宮中將は思ふ願ひをめで給ひてぞありける、その後宮はこゝにて正覺ならんとて、百廿年のよはひをたもちて、衆生の願を見んとて、きた山に貴船の大明神と生じまして現じ給へり、衆生の守りとなり給ひける、中將ごのも百八十年の齡をたもち、客人神と顯れて、衆生を守り給ひぬ、寛平法皇の御代より一門の契ありしなり、されば貴船の大明神を信じ奉らん人は、病ちうやうを除き、不老不死ともなり、鬼神の難をも遁るべし、妹背の命も長からし、諸願成就すべき事更々疑あるべからず、それに依てかゝる本地由來の物がたり、秘すべし秘すべし。







國學院講師、今泉定介先生述

# 平家物語講義

合卷全六冊(挿圖)菊判紙  
凡壹千二百頁正價一  
金三十五錢卷二以下各々  
五錢錢宛郵税各金六錢宛

漢文を用ひずして能く漢文の莊重をうつし國文を用ひてよく國文の軟弱に陥らざるものは戰記文にしくはなし特に平家物語は其の調の流暢なるもの文の自在なる優に源平盛衰記におよび太平記を凌駕せり古來世人の賞賛しておかざるも亦故わりといふべし然れども是等戰記文の常として或は故實に涉り或は漢土の故事を引き又忽ち深奥なる佛理を説く等極めて解し難き事多しされば古人も戰記文を解釋せるもの殆稀なり今日中等教育普通文の模範として最も適當なる本書の一の詳解なく學生諸君をして隔靴搔痒の歎あらしむるは誠に教育界及文學界の一大缺點といふべし本店こゝに見る所あり今般今泉先生に請ひて數年間先生刻苦の稿を世に公にすることをゆるさる本書の價値はこゝにいふまでもなく讀者諸君の公評にまかせん唯本書の最も特色とする所を掲ぐれば左の如し

- (第一)本書本文は數本を以て最も鄭重に校訂したる事
- (第二)講義は最も簡にして其の要を得たれば初學の人と雖も容易に解せらるべき事
- (第三)毎卷甲冑刀劍弓矢等すべて武家の故實に關する圖を附して詳解したる事

今泉定介先生講述

## 方丈記講義

正價金拾八錢  
郵税金二錢



















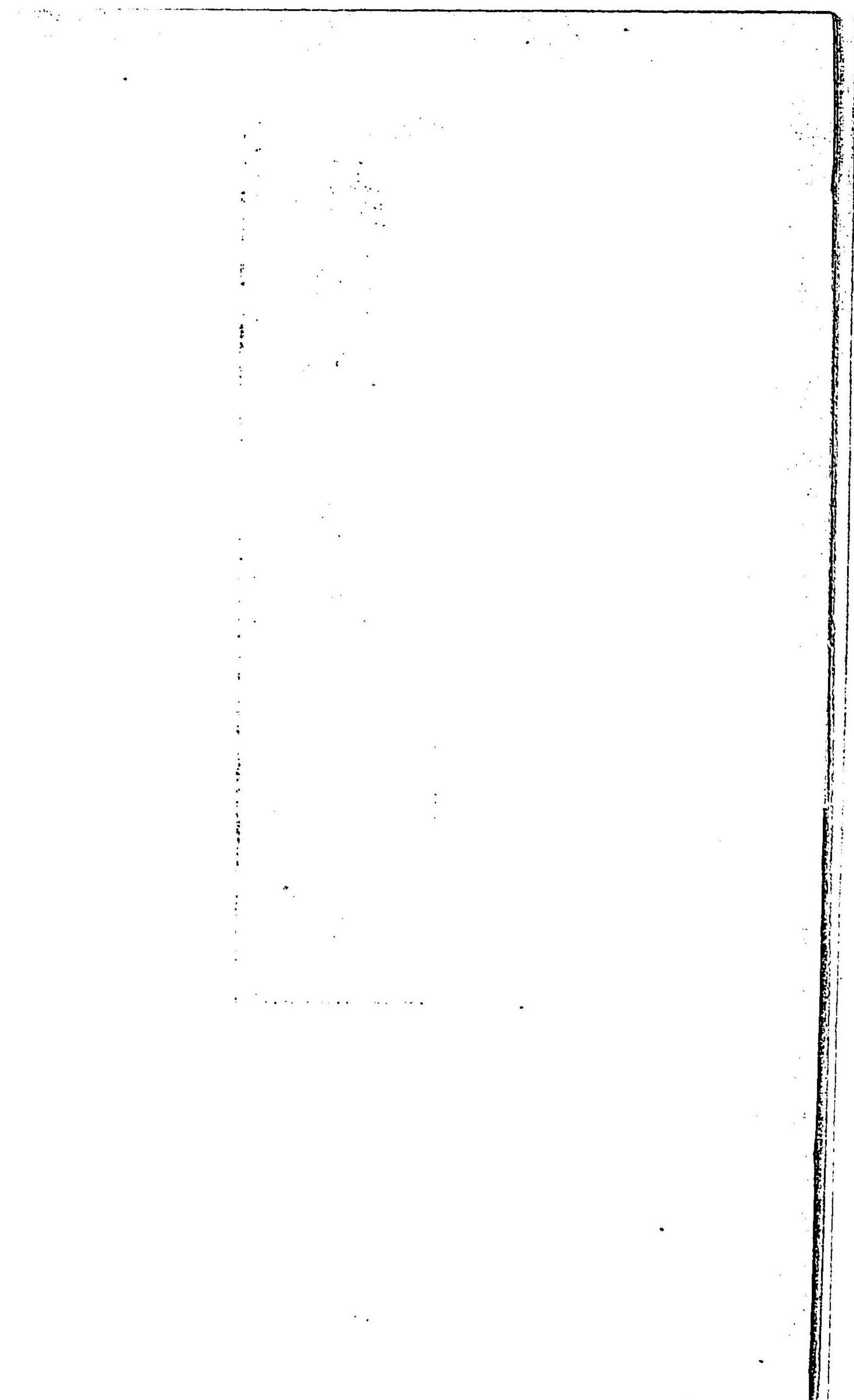
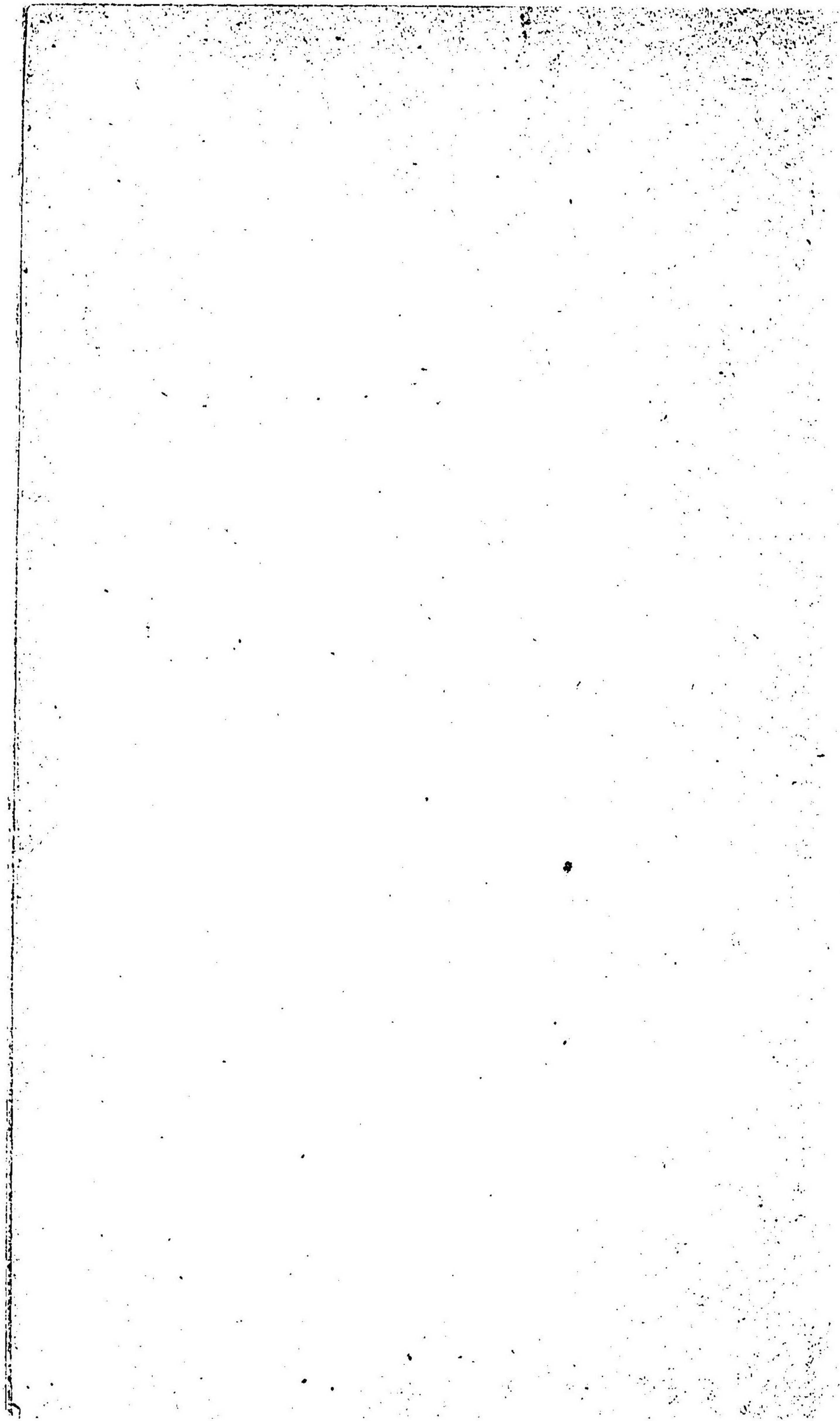
新編清伽草子

卷之三

下

新編清伽草子

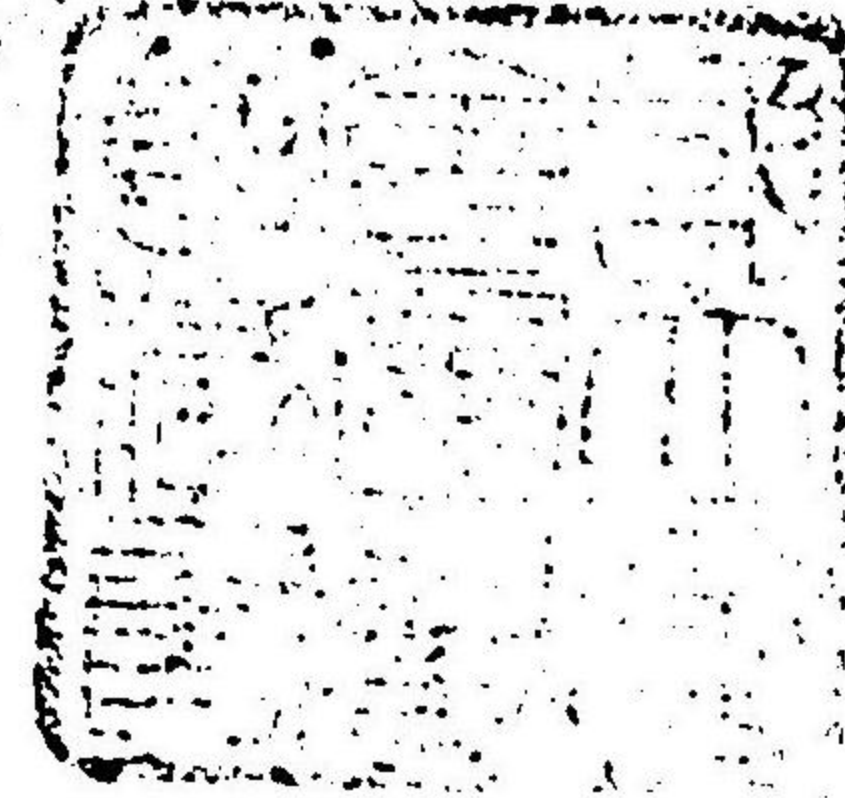




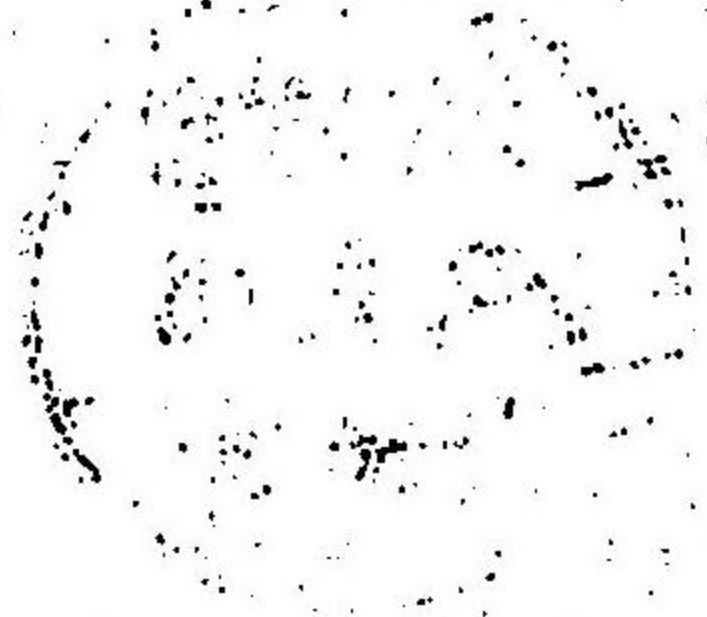


~~811.49 H121A~~

913.49  
H121A



淨瑠璃  
十二段草子



319566



浄瑠璃二十段草子開題

浄瑠璃十二段は、院本の鼻祖たり。後世戯曲を浄瑠璃といへる。既に此に本づく。この作者は、世に小野阿通といへるが、普通の説ながら、其の誤れることは、柳亭種彦の還魂紙料にも辯したり。且於通を、或は織田信長公の侍女となし、或は豊臣秀吉公の妾産殿に仕ふとなし。或は又それよりも後の事ともいふなり。皆信を取る所なし。さて種彦の説にいふ、浄瑠璃師は何某(信長公)の侍女小野阿通が作る十二段に起れりとは、誰々も知るこゝとなり、十二段に起るといふ説はさもあるべし、何某の侍女が作といふは非ならんが、柴屋軒宗長日記、享祿四年の條に、小座頭あるに浄瑠璃をうたはせ興じて、一盃におよぶの語あり。此記駿河國宇津山にてけるなれば、當時はや田舎わたらひする、小座頭のうたふとあるにて、浄瑠璃は古くよりありしを思ふべし。享祿四年は何某が生まる、前年なり、何某が侍女に起るといふ説の非なるを、よく知れり記せり。要するに、享祿四年より前に成れるものなる事は明けし。その作者も詳ならずすべし。聲曲類纂に、浄瑠璃御前十二段草紙とて、繪入の刊本三卷あり、刻梓の年號なし、此書お通が述作せる所のものか、又は餘人のなぞらへ作りしもの歟、詳ならずといへり。一寫本には、浄瑠璃御前繪詞と題せるもあり。この本は、原寫本を本とし、狩谷掖齋氏が校本にて校正を加へつ、古刻本といへるは未見す。

御曹司は俗に云へる部屋也。公子若年の間此曹司に住する故に御曹司と稱する也。又子と稱するも浄瑠璃の四方浄土を云佛國の名なり。法華經寶塔品に見えたり。矢矧里三河國碧海郡にあり。能馬樂貫河に矢はきの里なり。査買にさある所

藥師十二神、藥師の守護なり十二支にたさるなり

浄瑠璃十二段草子

(一) まうし子

去程に御曹司は、いかなる人の住家やらむと、心をとめて見給へば、あるは浄瑠璃御前とて、藝能なさけみめかたち、當國他國に雙びなし、双びなきこそ道理なれ、父は伏見の源中納言かねたかとて、三河の國の國司なり、母は矢矧の長者とて、海道一の遊君なり、かの長者よろづに付けて、浦く寶七つまでこそもたれけれ、中にも白銀黄金をば、水の泡とぞおもはれける、されども長者いまだ子を一人ももたせ給はねば、さころへ宿願申されけり、されども示驗するしは更になし、其比三河の國にはやらせ給ふ、峰の藥師へまわりつゝ、さまざまの宿願をこそ申されたれ、南無藥師十二神、願はくばみづからに男子にても女子にしても、子だねを一人授けたまへ、その願成就するならば、矢矧の家に七つ候寶物を、一つづ、次第にまらすべし、先一番にこん地の錦の守を六十、六尺のかけ帯、五しやくの鬘、八花がたの唐の鏡

○浄瑠璃十二段草子



六十六をもて十二の手箱添へて参らすべし黄金造りのかたな三十  
 六腰揃へてらんかんわたしてまゐらすべし、これをも不足におぼし  
 めさば、眞羽の征箭を百矢揃へて、齋壇いばきに組てまゐらすべし、白銀造の  
 たち百振りそろへてまゐらすべし、紺地の錦の御戸帳月に卅三、八年  
 かけてまいらすべし、緋糸にて髪巻立て、黒の駒を、年に卅三疋づ、  
 五年ひかせてまいらすべし、かの御堂の前に蓬萊山をかざりたて、  
 黄金にて日を造り白かねにて月を造りて、参らすべし、雀小鳥せきどり鳴のま  
 がり羽鶴の本白鶴の霜降をもつて御社壇をたて替へ、年に一度  
 づ、三ねんが間進まゐりらすべし、男子にても女子にても長者を哀れと思  
 しめさば、子種を一人授けたまへ、是を御用ひ候はずば、かの御堂の内  
 陣にて、腹十文字に掻き切り腸はらわたつかんで薬師に抛げかけ、荒人神とな  
 りて、参人に障碍をなし候はん時、長者をうらみ給ふなど、深く祈誓申  
 つ、二七日籠れども、示現更になし、三七日籠られたり、かくて百日満  
 する曉がたに、佛は八十ばかりなる老僧に現じ給ひつ、皆水精の珠  
 數つまぐり、長者御前の枕かみに立ちより、いかに汝うけ給はれ、なん

鶴本白鶴霜降の名  
尺素往來に見えた

汝かつまの源中納言  
言はつまをさし妻よ  
りはつまをさし妻よ  
に云る詞なり萬葉  
集古義に今の詞に  
あひさ云る詞に同  
じさ云ひしはま  
り男をさして妻より

ぢが歎く所餘あまにふびんさに、八尺のかねのぼうが八寸になり、八寸の  
 かねの足駄が四寸になるまで、尋ねまはれ共更に汝に授くべき子だ  
 ね一人もなし、子種のなき謂れを語てきかせ候べし、たかのぬふと申  
 所に池あり、かの池の深さ八万由旬なり、汝がたけを申せば、十六丈な  
 り、此大蛇おほく人を取り、いき物鳥類を亡ぼしたるにより、汝に子だ  
 ねはなきぞよ、矢矧の長者に生る、事は、かの池のほとりに観音堂あ  
 り、この御堂に貴き御付一人まします、かの池の主成佛せよとて、よる  
 ひる法華妙典をおこなひ、汝に回向し給ふ、かの御經を聴聞したりし  
 功力により、ほごなく矢矧の長者に生れたり、汝がつまの源中納言は  
 人もなき高き嶺にすむはしといふたか也、大空の鳥のかすを亡すと  
 いへ共、鞍馬を立廻り、あさゆふ靈佛靈山の鐘のこゑ、御經をちやうも  
 んしたるにより、公家大みやうと生る、といへども、その因果により、  
 子だねはなし、さりながら餘りに歎くもふびんさに、こだねを一人授  
 るぞとて、玉の筥をひらき、玉づさをとりいだし、長者御せんのみだり  
 の袂へうつさせ給ひけるかとおぼしめし、夢うちさめて歡喜の心限



淨瑠璃とは名づけたり法華經序品に又見諸加來自然成佛通身色如金山端中現眞金像

たゆふれいは太庚嶺支那の地名

水邊に居るの上脱文あるべし白樂天の詩に露盤誘引來花下草色猶留坐水邊あり野草芳非は野草芳非紅錦地遊絲綠亂錫羅天句なり

なし禮拜まいらせ下向申車五百りやうそろへつ、長者のもちたる七つの寶を、みねの薬師へ一つづ、次第／＼に進らせたり、其後長者ほごなく懐妊し給ひて、日かす積れば、御産の紐をぞかせ給ふ、彼をとりあげ見給へば、實に玉をのべたる如くなれば、淨瑠璃とは名づけたり、父の爲には四十三の御子なり、母の爲には三十七の御子ともうけ給はる、

(二) 花そろへ

彌生なかばの比なるに、楊梅桃李の春の花、木々の梢に咲きみだれ、たゆふれいの梅のはな、茂みか枝の花ざかりも、かくやと思ひしられたり、御曹司は木のもとに立ち忍び散ゆく花を左右のたもとにうけとめて、古き詩歌を詠めてたち給ふ、鶯のこゑに誘引せられて水邊に居る、野草芳非たる紅錦の地、遊絲綠亂たりへきらの天、とも詠めて立たれたり、  
もえいづる草の烟りに末みだれおぼろに霞む春のよひ月、とながめて立れたり、をりふし長者の住家より、南のつま戸にあたりつ、つ

壺のうちには壺さば家さ家の中間にある庭にて中庭さ云る所をいふなり禁中の桐壺藤つばななども同じ

ま音やさしき琴のねの、松ふく風にひゞきつ、りん／＼とこそ音づれけれ、御曹司はきこしめしいかなる人弾くやらんと、心をとめてあやしめ思しめし、琴のねに心をひかれ尋ねよりて見給へば、こゝに一の不思議あり、あるじは誰とも知らねども、七間四面のやかた、八むねつくり、に結構し、東西兩門飾らせて、壺のうちには樹木前栽かずしらす、軒ばの紅ばい心も詞も及ばれず、一重櫻に八重櫻、しだり柳にふく春風、いと心もうちみだれ、花も紅葉もひささかり、南おもての花園には、まがき透垣まばらにて、月見のための菴びさし、花みんため、の八重垣、洲濱に池を堀せつ、池の中には立て石伏せ石ながれ石、佛をまなぶらんかん石、青黄赤白黒といふ石の敷をぞ疊ませける、をしごり、かもめ、かいつぶり、がん、かも、水鳥數々の水とりどもは、清きいさごに住みなれて、朧月夜のかげよりも、身にしむばかりおもしろく、池の中に、蓬萊方丈瀛洲とて、三つの島をぞあらはしける、島うちの結構さは、百種の花をぞ植ゑられける、紅梅白梅八重ざくら、しら玉椿岩躑躅、牡丹芍薬かきつばた、桔梗かるかやをみなへし、紫苑、りんだう、われ



炭焼く翁云々は朗詠なり

長生殿にはあられどし和漢朗詠集に長生殿裡春秋富に云る詩の意をこれるなり

八功德水は阿彌陀經云極樂國土有七寶池八功德水充滿其中また池中蓮華大如車輪青色赤香黄色香赤色赤香白色白香微妙香潔といへり

もかう、白菊こう菊さまさまに、いく年つもる萬年草何をたよりに浮草の月の影をばやぎすらん、東おもての泉水には、唐松ふち松五よふのまつ、曳く手になびく子のびの松、六十六ほん植られたり、まつの木の間には、ひわ、こがら、四十から、花に馴たる鶯の、さえづる風情を黄金にて、さまざまに造らせて、動くばかりに居るさせたり、北のかたの泉水には、炭焼く翁が、年をへて、頭の雪をほらひかね、おのが袂はうすけれど、冬を待たるやさしさよ、長生殿にはあらねども、四節の四季をぞ學ばれたり、百種の花の事なれば、つぼみて、匂ふ所もあり、散りゆく花のこすゑもあり、嵐に花の誘れて、汀の波に浮みしを、物によくく譬ふれば、八功德水の池の面の、百千萬種の寶蓮花も、いかでか是に勝るべき、島より陸地の通ひには、反り橋を掛させ、池には色々の蓮葉をぞなし、たゆたふ波も、悠々として、汀の前に吹く風も、しんくくと月すみて、孔雀鳳凰桐竹に舞ひあそびければ、さながら極樂世界もかくやらんと覺えけり、

(三) 美人ぞろへ

三十二相妙法蓮華經提婆達多品に三十二相八十種好あり

御曹司は御らんじて、こはいかに義經こそ都にて、多くの泉水を見しかども、かほどの泉水いまだ見ずか、る吾妻の遠國にも、かやうの所ありけるよと、いかにも心をとめつ、御覽じける、折ふし爰に一の不思議あり、あるじは上るり御せんとて、藝能なさけみめかたち、當國他國に雙びなし、雙びなきこそ道理なれ、みな人は卅二相のかたちとは申せ共、かの上るりと申は、四十二相のかたちなり、上八十人、中八十人、下八十人として、二百四十人の女房たち、召仕はれたり、父は伏見の源中納言かねたかとして、三河のくにの國司なり、母は矢矧の長者として、海道一の遊君なり、ふたりの間より生ずるその子なれば、一しおろかのことぞなき、琵琶琴上手、萬の事にいたるまでも、おろかなる事ぞなき遊ばす草紙は何々ぞ、古今萬葉伊勢物がたり、源氏狹衣戀盡し、和歌の心を始めとして、なさけのみちをしる事は、當國うちに聞えける、心ありげの女房たち、花園に立めぐり、木々の木すゑや竹のうら、傾く月のおもかけを、歌によみ詩に作り、連歌をして立れたり、御曹司は籬の蔭にたち忍び、花園山をながめ給へば、上るり御前の其夜の装束いつに



勝れてはなやかなる、うけおり物、からおりもの、櫻、山ぶき、濃躑躅、梅地、  
 紅梅、柳いろ、うす紅梅、菖蒲がさねに、菊がさね、十二ひとへをひき重ね、  
 濃き紅の千しほの袴踏みく、み、丈けに餘れる翡翠のかんざしを、紅  
 梅の段々を山形やうに疊ませて、中程をよせてまふやうに結ばせて、  
 うらふく風にそよとなびかせて、立たたりける其風情、心詞もおよば  
 れず、優にやさしく覺えたり、物によく、譬ふれば、楊貴妃、李夫人、衣  
 通姫に、女三の宮の立姿、朧月夜の内侍のかみ、弘徽殿の細殿も、これに  
 はいかで勝るべき、義經みやこにありし時、いくらの内裡の女房たち、  
 やん事なき上臈たちを、五節のあそびありし時、見たてまつれども、か  
 程の美人はいまだ見ず、同じ人間と生れなば、かやうの人に相馴れ近  
 づきたてまつり、偕老同穴のかたらい、比翼連理の契りをこめてこそ  
 と、思ふ心を猿猴の林にあそび胡蝶の花になれたる風情にてこそ立  
 たれけれ

五節十一月に禁  
 中に行はせらる  
 節會なり公卿及び  
 受領より舞姫を出  
 す中昔は根室の  
 試みて常樂殿にて  
 御覽あり其他曉參  
 また童御らんなど  
 云る事ありて今め  
 かしき節會なり  
 比翼連理の契白樂  
 天長恨歌に曰く在  
 願爲連理枝鳥在地

(四) そこの管絃

上るり御前は猶も月の光りや花の名残をしくや思はれけん、心あり

方聲和名抄に聲懸  
 二十四俗云方聲々  
 音強さあり

げの女房たち十二人めし具せられて、管絃のはしめて遊ばれけり、淨  
 瑠璃御前は琴のやく、月さへ殿は琵琶のやく、冷泉ごのは筆築の役、十  
 五やごのは笙のやく、あり明ごのは和琴のやく、方聲合する物もあり、  
 時の調子は平調也、あそばす樂はなか／＼ぞ、たいしやう、甘州、想夫戀、  
 春楊柳に夜半樂、次第に秘曲をつくされける、月西山に傾けば、光も影  
 も幽かにて、花は木のまに散りしきて、色も匂ひも満ち／＼て、琵琶の  
 おと、琴のぬ澄みわたり、悪業煩惱は雲はれて、極樂淨土もかくやらん、  
 天人も天降り、菩薩も爰に影向なるかと思ほしくて、知るも知らぬも  
 おしなべて、隨喜のなんだを流しつゝ、みな袖をこそしぼりけれ、御曹  
 司は聞こしめし、此はいかに、あなかは物のうき所かや、管絃にやうて  
 う一管なき事よ、笛がなくして吹かざるや、笛はあれども吹く人なく  
 てふかざるや、さあらば是にて義經ふかばや、なんとと思しめし、もしも  
 咎むる人あらば、此頃もてあそぶ草薙笛と申へし、猶もどがむる物な  
 らば、源氏重代のこがね造りのこんねんどうほごぞと思しめし、つゝ、  
 めども包まれず忍べども忍ばれず、進退谷まる我身かなとおほしめ

やうちやうは横笛  
 を云ふ源平盛衰記  
 にも見えたる詞な



千(平調)五(下無)  
上(雙調)句(黄鐘)  
中(盤涉)六(登越)  
下(神仙)口  
歌口 口を當て吹  
く穴を云ふ今の俗  
にも然いへり

聊爾 今の世に疎  
忽と云ふ如し

平家の悪行公卿を  
自儘に罷し法皇を  
鳥羽の離宮に込め  
本羽の門を漲る等  
清盛の暴行を云な  
り

し、餘りに堪へかねて、腰よりやうてうとりいだし、錦の油單をはづし、  
干五上句中六下口とて、八つの歌口、花の露をふき濕し、樂はさまざま  
おほけれど、女は男を戀る樂、男は女を忍ぶ樂、想夫戀といふ樂をこそ、  
人目も憚からず、矢矧の土にもならばなれ、假令聊爾にもならばなれ  
と、遊りへ響けと吹かれたり、内には琵琶琴彈き給へば、門にて笛をぞ  
遊ばしける、内には琵琶ことおし止め、門の笛をぞ聽聞し給ひける、上  
るり此由きこしめし、矢矧はさるべき名所にて上り下りの大名達せ  
うしん止まりて、たび／＼管絃せしかども、かやうのやうてう未だ聞  
かず、音聲息ざし、ほごひやうし、かゝる風情のおもしろさよ、餘所にて  
きくだにゆかしきに、ぬしを見たらん床しさよ、いかにや女房たちと  
ぞ仰せける、お前の女房だち門外さまに立ち出て、懸て歸りて申や  
うは、心憎くも候らはず、晝の頃おほかた人にて遊ひつる、金うり商人  
に朝夕伺候の下人、みやこの冠者にて候ふなるぞと申けり、上るりこ  
の由きこしめし、それは際なきぞとよ、但し此頃都には、平家の悪行世  
に聞えて、關白殿下を押こめて、大臣公卿をも流し失ふ事と聞く、この

方様にてましますとかや、いやしき賤の眞似をして、吾妻のかたへ下  
り給ふらん、此人これへ請じいれ、やうてうふかせ聽聞せん、琵琶琴ひ  
いて此ごのに、旅の疲れをも懋めばや、女房達とぞおほせける、文珠ご  
の進みいで申されけるは、但しこのころ都人は目も耻かし、るなかの  
人は口はづかしや、壁に耳、岩の物いふよの中に、いかでか黄金商人に、  
朝ゆふ伺候の下人をば、御前まぢかくめしよせて、君の御風情わらは  
が有様をみえん事もさすがなりと、叶はぬ由をぞ申されける、上るり  
この由きこしめし、それは定め無きぞとよ、但しこの比やすき例しの  
あるぞとよ、大海ちりを撰ます、花は所を定めぬもの、泥のうちには蓮  
あり、草の中にはこがねあり、卑しき人にてよもあらじ、かゝる人中  
にこそ、管絃の達者はある物を、風情いかなる人ぞ、見て參れとありし  
かば

(五) 笛のだん

玉藻の前うけ給はり、急ぎたちいでまゐりけり、此女房と申は、年を申  
せば十六なり、心まいりの口さ、なり、人に勝れて才幹なり、七つひと



源げんじ

菊綴ち直垂の左右  
の肩袖背に房の  
如くにさち付たる  
を云るなり曾我五  
郎の黄の長絹に  
菊さちしたるを者  
たる事真名會我物  
語にも出たり

へを引きしやうぞいて、くれなるの薄衣引きかづき、丈けに餘れる翡翠のかんざしを梅の匂ひに寄せさせて門外へぞ立いでぬ、御曹司の御姿た、一目見て参り、急ぎかへりて申やう、いかに君きこしめせ、よしある人の姿をは、雲まの月のはしばかり見奉り参らせて候、是にてあらく申さば、君はそれにて心静かにきこしめせ、此人はたゞ世の常の人にてはなし、源げんじの上臈かとおぼしくて候が、召したる衣裳のけつこうさは、縮心ことばも及ばれず、はたには紺りんだうの折枝ついたり、帷子を諸脇しゆんに解かせつ、引き進へてぞ召されける、唐巻染にす、し裏唐綾おもて二かさね、花柄にみなしろをもつて、ひわ柳いろを引き重ね、精好の大口に、顯紋紗の直垂の、下の袴まはりには、おほろげをこふるきくからす、菊さちには、日ほん名譽の花むすびが、結びたるとおほしくて、左右の菊綴には、梅と櫻をむすばれたり、うしろのぬひ物には、唐土の猿と日ほんの猿とを縮はせたり、唐土の猿は大國なれば、せいも大きに、面もしろく伏してあり、日ほんの猿は小國なれば、せいも小さく、面も小さくみえたりけり、唐土のさるは日ほ

んへ越さんどす、日ほんの猿は唐土へこさむとす、たうと日ほむとの潮さかひなる、ちくらが沖にて行逢ひて、越さう越さじの境をば、物の上か秘曲をつくし、縮いてあり、弓手の袖をくたりには、杉の村たちを千本そろへて縮はせたり、杉の木の間より出る月をぞぬはせたり、妻手の袖をくたりには、松を千ばん鮮やかにぬはせ、松の葉越しに朝日の出る所をほのく、とぬはせたり、弓手の肩より下には、正八まんの御社壇とおほしくて、鳥居をさもあざやかに縮はせたり、左の紐にはあまのたくぼくをもつて、浅間の嶽の夕烟と、富士の高嶺の夕けふりの、立ち舞ふ所をば、きやうやうに結んでさげられたり、大口さまを見てあれば、源氏の白旗七ながれ、平家の赤旗七ながれ、左右に十四ながれのはた、棹のあまたに打をくれ、旗くるく、と引き巻きて、落る有様をば、有々どぬはせたり、又袴の結構さは、うらごしには、春の柳をもえたつ程にぬはせ、百種の花をにほく、とぬはせたり、花の本には、多くの大名あつまりて、酒宴なかばと見えてあり、前腰をくたりには、秋の野を縮はせたり、玉椿、桔梗、苜蓿をみなへし、きりうす、き糸す、き







二でう重ねて敷か  
せついで古く盛云  
るは今の上は敷ま  
た薄縁さ云るま同  
物にて常は盛みお  
く故の名なり故に  
客など来れば時に  
ふり二でふし三で  
ふりしく事なり

の使に更科殿三どのつかひに玉藻の前四どの使に有あけどの、五どの使におほろげ殿六どの使に月さえどの、七どのつかひに小櫻どの、をはじめとして、七度の使を立てられける、御曹司きこしめし、こはいかに義經こそ、吾妻路はるかの旅をして、蹴上げのほとりに交はりて、色も黒みて恥かしけれども、かゝる便はよもあらしと思し召し、直垂の衣紋けだかく引きつくりいて、廣えんまでこそおはします、いたはしや御曹司世は末世におよべ共、あつたら源氏の弓取を、廣縁さまにて笛ふくべきかと思しめし、するりと通らせ給ひつゝ、上るり御前の中のでいにしかせたり、纏細縁と高麗べり、二疊重ねてしかせつゝ、虎の皮をはしらかしたる所に、御曹司むすと直らせ給ひける、上るり御前は一段たかき所に、紫縁のたゝみをしきて金銀瑠璃の御座をかざらせしやうしあはせ玉簾ばかりにて、文珠御まへは琵琶のやくじやうるり御前は琴のやく、さらしな殿は和琴の役、敷くゝの管絃の具足をとゝのへ、管絃始めてめされけり、既に管絃もすぎければ、御まへにありける女房達源氏六十でうをおつ取り散らし、御さうしの心を引き

國土の菓子に常國  
の珍菓にて酒をす  
いむる也古くは多  
く菓を肴とせしに  
て伊勢物語に橋を  
着にせし事見え徒  
然草に葉にて酒の  
む事を云へり

冠者を尋ね冠者

みんどの爲に、様くゝの古文章經よみ難字不審をぞ問ひかけたる、さるとは申せ共、御曹司は七歳の年より鞍馬の寺へあかりたまひて、東光房にて學問めされ鞍馬一の兒學者、みやこ一の管絃者なれば、讀むとも書くとも聞からず、吹くとも弾くとも達者なり、人と釋して奉れば、あらあやしや、此殿は、觀音勢至の化身かや、普賢文珠の再來かや、釋迦の御法かおぼつかな、筆をとりての容易きは、弘法大師と申とも、これにはいかでか勝るべき、御前にありける女房たち、紅梅の檀紙を重ね、かれを是をぞ所望せられける、御さうしは聞こしめし、五つのゆびに四管のふでをとりもちて、書いては出たし寫しては奉り、夜も深更に更ゆけば、國土の菓子に種々のさかなをとゝのへて、御曹司にすゝめ奉る、酒宴もなかばになりしかば、暖むひて御かへりある、御前にありける女房たち、今夜はこれに御とごまり給ひて、やうてう遊ばして、妾ごもに聽聞させ、琵琶琴弾きて、たびの御つれゝをも慰め給へや、みやこの殿とぞ申させ給ひける、御さうし聞こしめし、吾もさは存じ候へ共、こがねあき人は用心きびしき人なれば、定めておごろき、冠者







華嚴阿含尺素往來  
云世尊說法之次第  
若法華涅槃也

女人成佛と説れた  
り提婆品なる八歳  
龍女成佛の事ある  
な云ふ要文は採  
るべし

の其うちに沈の枕をかたふけて東西せんともわきまへずまごろみ  
給ふ御姿を物によく／＼譬ふれば楊柳の風になびくにことならず  
御曹司心の中やるかたなくぞおぼえけるあたりを静にながむれば  
かす／＼のしやう經ども散らしてぞ置れけるまづ一番に天台は六  
十卷俱舎は三十卷ふんすいきやうは四十くはん淨土の三部經華嚴  
阿含方等般若法花と打ち見えて數をつくして置れたり双紙にとり  
ては古今萬葉伊勢物語源氏狹衣戀づくし和歌の心をはじめとして  
鬼のよめる千島文までおつと散らして置れたり朝夕によめると  
おぼしくてしろかねの机に金泥こんでいの法花經は一部八卷廿八品中にも  
五の卷には女人成佛とされたり殊に提婆品とて要文あり六のま  
きには壽量品七のまきには藥王品八のまきには陀羅尼品あそばし  
かけてぞ置かれたる御曹司はつく／＼と御らんじて義經こそ都に  
て三度い修學者なりしがかゝるあづまの遠國にもかやうにやさし  
き女も有るやらんと胸さわぐばかりなり去ほごに御さうしは今宵  
を始の事なれば谷の戸いでし窓の軒ばの梅にすみながらまた花な

二三度四五度なら  
して扇を鳴らして  
人の風なり源氏若  
紫に源氏の君扇を  
鳴して女扇を召す  
事見えたり今は義  
經の姫の眠を覺す  
爲にするなり

伊勢おの海人河海  
抄空蟬に引ける古  
勢おのあまのり伊  
衣纏られたりさ人  
や見ゆらん

れぬ風情かやとや言はましかくや言はむと思しけりやありて案  
じつ、腰より扇をとり出し三げんばかり押開き彌生半の比なるに  
涼しきほどにつかはせ給ひ卅ところに燈したる油火を十二所まで  
うちしめし松明ほのかに掻き立て扇をきり／＼と押たみ上る  
り御前の寝亂れ髪かたしきたるゆかのうへを二三度四五度ならし  
て御曹司の仰せられける言の葉の程こそ優しけれ君故に心は雲井  
にあこがれて花の都に春くれば霞ととも立ちいで君のすみか  
を尋ねつ吾婦路はるかに下りたり源氏の大將いかなれば及ばぬ  
戀に身をやつし問ぬに色を顯はして恥かしや伊勢おの海人のぬれ  
衣しはたれぬるを人や見るらむと打ながめ須磨より明石の浦づた  
ひ岸うつ浪に袖ぬらし浦ふく風に身をまかせ君を見そめし始より  
心の間に迷ひにき心づくしのはてしなるあひそめ川の戀のせに如何  
なる契を結ぶらん思ひの床に入りながら高嶺の花はよしなくも手  
折らぬ袖に匂ひそめ雲井の月はいかなれば苔の袂に宿るらん數な  
らぬ身の程しらねどもあの山こえてあなたなる足曳の露ふみわく



伽陵頻迦天竺に有る鳥の名也此鳥殺すに出ずとも其音衆鳥に勝る況んや衆鳥を出るに於てをやと佛書に見えたり

る、さを鹿の妻戀ひかねたる風情して、宿世をむすぶ出雲路の道のしるべもたよりなき都の冠者がこよひしも推參申て候なり、いかにや君とぞ仰せける、上るり此よしきこしめし、さながら夢の心地して、打側向いたる風情して、ねみだれ髪のためまより、伽陵頻迦の聲をあげ、たそや間も馴れざる聲として、都の詞をの給ふは、都のならひにて候ふかや、如何なるにか、る風情はなきぞとよ、其上御身にまさる大名高家のかたよりも、玉梓あまた書き送り、朝夕心を盡せども未だなびかす返事せず、所に従ふ書をぞかく、葉に従がひて露ぞおく、花を見てこそ枝をばをれ、雲に梯およばぬ戀をばせぬ物を、妾と申は父は伏見の源中納言かねたかさて、三河の國の國司なり、母は矢矧の長者とて、海道一の遊君にて、二人の中より生ずるその子にて、一しおろかの事ぞなき、假令いかなる人なり共、いかで御身及ぶべき、殊更御身はかねうり吉次が下人とさき、及ばぬ戀をする物かな、戀もあまたに分られたり、逢戀、見る戀、さく戀、待こひ、しのお戀とて、こひは五つにわけられたり、及ばぬ戀をするものは、それ天竺にはむすぶの神、唐土にては愛

其身はあづまのえひすなれ、北西行在俗の時、北西の武土なり、但し此人は藤原秀郷の後胤なれば、本國は關東なり、御息所は、此段な書にある事なく、他書にあり、物語の章にすべからず

染明王、我朝にていづもちの、さいはらさいの神の、深く憎ませ給ふ物、はやく歸らせ給へとぞ仰せける、御曹司はきこしめし、いかに君きこしめせ、及ばぬ戀もある物を、いかなれば、憲清は、其身はあづまのえひすなれども、十九の年より御息所を戀ひ奉り、玉梓をまいらせ奉りければ、后此由御らんじて、誠やらん、佐藤兵衛憲清は、日ほん一の歌人とき、候ふ、さらば歌の題を出さんとて、百首の題をぞ送られける、憲清これを給はりて、龍の水を得たるが如く、やがて連ねて奉る、后此よし御らんありて、心詞も及はれず、さりながら汝に廻りあはん事は、今宵すぎ、又あすをも打すぎて、その前の世にならんと、是より西の方阿彌陀の淨土にて侍るべしと仰せければ、憲清いよ、思ひに沈みければ、后の御局この由きこしめし、いかに憲清うけ給はれ、是よりも西の方彌陀の淨土さふらふは、これより西にあたりたる、阿彌陀堂の御事なり、后はこの百日まふでをめされけるが、そも今宵とは夕さりすぎ、又今宵とはあすの夜をすぎ、その後の夜、是より西のあみだ堂にて合せ給はんと、の仰せなり、憲清こそ仰けれ、憲清此由うけ給はり、斜







八橋伊勢物語の故  
事なり平家物語に  
御海下家の條に  
ら衣きつなれに  
しなつめなれに  
河の國の八橋に三  
なりぬればくもも  
に物をさあはれな  
りさあり

八重の鹽路大海を  
云ふ大坂詞に荒鹽  
之鹽乃八百路乃八  
爾鹽云々さあはれ  
り出たる詞なり

はやきとて、岩のかぎをば削らん物、竹の林はたかきとて、初利天へは  
のばらん物、三河にかけし八橋の御手にも、のや思ふらん、一樹のかげ  
一河の流を汲むことも、皆是他生の縁ぞかし、笛による秋の鹿の命を  
捨つるも、戀故なり、夏のむしの火に入るも、玉蟲とかやに、賺かされて、  
身を徒になすとかや、かゝる心の無き物までも、戀の道には迷ふとき  
く、君はいかなる人なるとも、冠者は都の者として、九重の雲井を出、八  
重の潮路をへだてさふらふとも、君と冠者との中川の、逢瀬を互にま  
ちてこそ、今まで獨おはすらむ、いかにや君とぞ仰せける、上るり此由  
きこしめし、かへらせ給へや都の殿、明日明夜になるならば、母の長者  
の耳に入り、金賣吉次が下人こそ、姫のかたへ近づきたりとも、もの、  
ふに仰せつけ、小路へ出だし、あき人の手にわたり、死罪流罪におこな  
はれんとき、はかなき君を恨み給ふな、かへらせ給へや都の殿とぞ仰  
せける、御ざうしは聞し召し、明日は何にも爲らばなれ、假令流罪に行  
はるとも、くわじやが爲めには、面目なり、とかく返事との給へは、上る  
り御前此由きこしめし、此殿は諸事にさかしき人にておはします、賺

して見んと思し召し、遂に否とも申さばこそ、妾と申は去年の春のこ  
ろよりも、父におくれ奉り、その爲めに、第三年にならぬ内に、千部の經  
を讀み奉る身にて候ふ、ひるは一部の御經をよみ、よるは一万遍の念  
佛阿彌陀經、意らす回向し奉る也、三年すぎての其後はともかくも、矢  
矧とみづからさふらふは、妻と思しめせ、生死は車の輪の如し、など  
かは廻りあはざらん、かつそは御身の爲なるべし、御經に恐れをなし  
て、歸らせ給へ都の殿とぞ仰せける、御曹司きこしめし、いかにや君聞  
し召せ、堰き止められし小川の水も、遂には洩りてながる、物、竹の節  
々よをこめて、末までおもしろ候ふかや、それ天竺の三藏法師はいか  
なればあしこく王の姫みやに逢ひなれそめて、御子にはしんか大し  
んをまふけ給ふ、これも戀路のゆゑぞかし、いかなれば志賀寺の上人  
は、御年八十三と申に、京極の御息所を戀ひたてまつり給ふ、御息所は  
あまりにその面影のいぶせさに、御とし十七と申に、御簾の外まで御  
出有て、御手ばかりを奉る、上人は御手ばかりを給りて、一首の歌をぞ  
あそばしける



はつ春の初子の此  
て大伴家持卿に載せ  
僧正の詠落果し座  
實なる詠にせし座  
の古歌を詠せし座  
無の或は詠せし座  
邪淫の悪僧なく座  
盜成の悪僧なく座  
る盗をみ破らす座  
る盗をみ破らす座

はつ春のはつねのけふのたまははき  
てにさるからにゆらく玉のを  
とありければ御息所きこしめして、  
今更は實の道にしるべして  
われをいざなへゆらく玉のを

上人は御手ばかりを給りて、三度御胸に押あて、遂に其戀とげたり  
しかば御息所はたゞならず御懷妊ありて、程なく越前の國敦賀の津  
と海津の堺なる、あらし山にて御産の紐をぞ解き給ふ、かれを取上げ  
見給へば面は六ツ御手は十二あり、もとはあらし山と申せども、それ  
より始めてあらし山とぞ申ける、かの者戀て都卒天に上り給ひて、八十  
億劫を経て、其後梵天より天降り敦賀の津にけいたい菩薩と顯はれ  
て、北陸道を守護し給ふも、さなから戀路とうけたまはれ、さて又小野  
小町は、人の怨念懸れる各により、遂に狂人となり、野べを住家と定め  
つ、遂がもとの座となる、源氏女三の宮は、柏木の衛門の督にあひな  
れて、薰大將を生み給ふ、狭衣の大將きこしめしてかくなん、

たか世にか種を蒔しと人とは、  
いはねの松はいかゝこたへん  
どあそばしけるも、由來は戀のいはれなり、斯様に申くわじや原も、三  
歳の年より父におくれ奉り、万部の御經怠らず、ひるは三部の御經を  
よみ、よるは六万遍の念佛阿彌陀經を讀み、更に怠る事もなく、精進の  
所へ不精進の物が参りてあらばこそ、精進と精進が寄り合ひて、此よ  
の物語申さむは何かは苦しかるべき、上るり此由聞こし召し、妾と申  
はこれ何となき卑しき賤が伏屋の柴の菴にて候ふとも、三世の諸佛  
つねに影向ならせ給ふ、わらはに片去給ふならば、佛に恐をなし給ひ  
て、御かへりあれとぞ仰せける、御曹司はきこしめし、いかにや君、佛も  
戀をめさるればこそ、有漏より無漏路へ通ふ釋迦だにも夜及大臣の  
御むすめに、耶須陀羅女にあひ馴れそめて、御子には羅喉羅尊者をま  
ふけたまふ、神だにも結ぶの神とておはします、百王百代まで守んご  
誓ひ給ふ神だにも、伊勢兩大神宮と御立ちある、其の外熱田の宮、諏訪  
の明神、伊豆箱根日光山の社まで、男たい女たいはおはします、まして



や諸くの諸佛三寶過去前世のむかしより今日今宵にいたるまで、  
結び給へる契りなり、男女和合のなさをばいかでか背き給ふべき、  
煩惱すなはち涅槃となる、生死すなはち涅槃なり、一佛皆善根淨土と  
説く時は、谷のくち木も佛となる、萬法一如と聞く時は、衆のあらしも  
法の聲、諸法實相と觀すれば、佛も衆生も一つなり、佛法になぞらへて、  
多くの詞をつくされける、

(九) やまごことは

上るり此由きこしめし、こはいかに、この殿は諸事に賢しき人にてま  
しますぞや、今より後は物いほじと思しめし、木幡山にはあらねども、  
たゞ口無しとて音もせず、御曹司きこしめし、大和ことばに准らへて、  
仰せけるこそ面白けれ、いかにや君きこしめせ、陸奥の人め忍ふにあ  
らねども、物は云はじと候らふかや、津の國の難波入江にあらね共、よ  
しどもあしくとも云はしとや、我戀は物によく、譬ふれば、信濃な  
る淺間の嶽の風情かや、筒井の水にもさも似たり、野中の清水のふせ  
いかや、繁がぬ駒にも譬へたり、弦なき弓にもたとへたり、根笹の上の

口無しとて新撰六  
帖家の歌に木幡  
山あるはさしな  
口なしの宿りな  
ても答はせん  
陸奥の人め忍ふ  
いはて忍ふはそ  
てはつほの石文

淺間の嶽の伊勢物  
語に信濃なる淺  
の嶽に立つ煙を  
こち人の見やは

かめめともよめり

あられかや、下這ふ葛にもたとへたり、笛竹の風情かや、一村す、きの  
有様かや、細谷川の風情かや、うつす水沫のたどへかや、ふたまた川の  
ふせいかや、きよ水坂にさも似たり、化粧の帯の風情かや、沖漕ぐふね  
にもたとへたり、ならのお山のふせいかや、埋火のふせいかや、濃きく  
れなるの風情かやとおほせけり、上るり此由きこしめし、いかに物を  
云はしと思へども、人の方より歌をかけられて、返歌をせぬ物は、これ  
より初利天のこなたなる、山の禁に無量劫をへて舌無き蛇身とうま  
る、物、人のかたより文を得て、ふみの返事をせぬ者は、盲目に生まる  
、物返事はかりはせはやおほしめし、いかにや候ふ都の殿、淺間の  
嶽と候ふは、もえ立つばかりの心かや、筒井の水のふせいと、やる方  
なきこのふせいかや、野中の清水と候ふは、かき分け參ると仰せかや、  
つながぬ駒と候ふは、ぬしなき物と候ふかや、つるなき弓とさふらふ  
は、引にひかれぬたとへかや、根ささのうへの葎とは、引ばおちよの譬  
へかや、下はふ葛のふせいと、もとは一つにて千々に心をくだくこ  
かや、笛竹の風情とは、一よこめとさふらふかや、一村す、きと候らふ

野中の清水古今集  
に古の野中の清水  
をぬる人そ泣むこ  
もよめり



は唯一ひきに磨けとかや、細谷川の風情とは、一度は落て一つになれ  
 との仰せかや、うつす水沫の風情とは、た、一筋に思ひきれとの心か  
 や、二また川のふせいとは、廻り逢へとの心かや、清水坂のふせいとは、  
 人の茂きのたどへかや、化粧の帯のふせいとは、むすび合へとの心か  
 や、沖こぐ舟とさふらふは、こがれて物を思ふとかや、那智の御山のふ  
 せいとは、申さば叶へと候ふかや、埋み火のふせいとは、底にこがれて  
 上に烟のたつとかや、濃くれなる候ふは、色に出ると候ふかや、上る  
 り御前は十四也、御曹子は十五なり、十四と十五の事なれば、馴れう馴  
 れじのすまふぐさ、狂言綺語になぞらへて、詞に花をぞさかせける、御  
 曹司きこしめし、いかにや君、宇都の山邊の葛の道、絶えこそなけれ、陸  
 奥の淺香の沼の花かつみ、かつ見るひとに戀まさり、下野の室の八鳥  
 にたつ烟も、風にはなびくとさく物を、水にもまる、川柳も、枝にひか  
 りをはなさんとて、笠に宿をかす物を、よしやあしとて切り捨てられ  
 し、吳竹も、もとに一よはとまる物、風にもまる、草木だに、翼に宿をば  
 貸すとさく、上るり此よしきこしめし、此はいかに御殿は諸事にさか

淺香の沼の古今集  
 戀にみちのくつみ  
 香の沼の花かつみ  
 わつ見る人に戀や  
 よれたらんさあるに

しき人にてありけるぞや、女人とむまれなば、箇様の人に相馴れて、草  
 の枕のうたたねに、露のなさをこめばやと思しめし、人の思ひを着  
 る物は、蛇身と生る、物、明なば母の長者の耳に入、いかなる目にもあ  
 はばあへ、なびかばやと思へ共、いくらの大名小名の方よりも、詞をつ  
 くさせ給ひしを、遂になびかす返事せず、金賣り吉次と朝夕伺候の都  
 のくわじやに、今宵しもなびかん事かと思へども、昔も鬼の立てたり、  
 し石の戸も、なさけにあくとさく物をと思しめし、宵は酒もり夜中は  
 問答、小夜ふけがたの事なるに、互に見参めされけり、

(十一) 御座うつり

上るり御せんは、岩木をむすばぬ御身なれば、肌の帯の一むすび、解け  
 ぬほどこそさびしけれ、鹿島の神のちかひにて、結び初めさせ給ひけ  
 る、汀の氷うち解けて、羅綾の袂をひき重ね神ならば、むすぶの神、佛な  
 らば、藍染明玉、木とならば、連理の枝、鳥とならば、比翼の鳥よりも、なほ  
 深ぞ契らせたまひける、御曹司も、今宵千夜を一夜、百夜を一夜に譬へ  
 ても、長かれかしこそ思しける、天の石門を引きたて、此世は、間にも

岩木をむすばぬ  
 氏文集に人非木  
 石皆有情さある  
 意なり



祇園精舎 濱達長者  
の佛の爲に建立せ  
し寺の名は四行  
無常云々は四句の  
偈なり平家物語に  
祇園精舎の鐘の聲  
諸行無常のひびき  
ありといへり

やうてうは横笛な  
り

ならばなれ、この儘あれぞ思しめず、とかく更けゆくこよひなれば、  
程なく庭鳥こゑく、に、別ををしむぞ哀れなる、祇園精舎にあらねど  
も、諸行無常の鐘のひびき、今を限りと身にぞしむ、誰とも知らぬ人な  
れど、草の枕に馴れそめて、今さら別れのかなしきは、千世萬世を馴れ  
たりとも、いかでか是には増るべき、五更の天もすぎゆけば、人めや夢  
を覺すらん、やもめ鳥も鳴きわたり、夜はほのく、と明にけり、御曹司  
名残の袖をしばりつ、いとま乞うてぞ御かへりある、上るり此よし  
きこしめし、今日はこれに止まり給ひて、やうてう吹いて、妾ごもに聽  
聞させ、女房たちにも琵琶ここひかせ、旅の御つれづれをも慰め給へ  
とぞ仰せける、御曹司きこしめし、きこそは存じ候へどもあき人の急  
く道にて候ほごに、さこそは尋ね候はん、露の命もながらへ候は、う  
き世は車の輪の如く、周りてきぬる事あらば、餘所になしても訪ひ給  
へと仰せありてぞ泣き給ふ、上るり御せんは御曹司の羅綾のたもと  
をひかへつ、廣椽まで出給ふ、かゝる折ふし、鶯の霞める空の花その  
に、囀りければ御さうし、さりあへず遊ばしける。

別れゆく思ひをどふか、このやぎの花をしみて鳴くか、  
上るりきこしめし、戀て返歌にかくばかり

いととしく花ちる里は物うきによをうぐひすのさのみ鳴らん、  
と遊ばして、行もやらでぞ立れたり、長者御せんは、すぎし夜姫の許に、  
やさしき笛の音聞えつるは、いかなる人やらん、行きて見ばやと思し  
めして、十二ひとへを引き、装束いて、長者のすみかをたち出て、姫君  
の御方へまいらせ給ひける、痛はしやな上るり御せんは、母の長者を  
見奉りて、時ならぬ顔に紅葉を散らしつ、帳臺深く忍はれける、御曹  
司御らんじて、長者御せんとわが身とのあひだに、山の印を結びてか  
け、我身には小鷹の印を結すんで、椽より下へ飛んで下り、扇の笏より  
直し、思ひもよらん、姑しよに見參申すは、づか、しさよとて、はたいた飛越三  
重の堀をも飛こえ、心は矢矧に止れ共、其身は金賣吉次と打連れて、東  
のおくへぞ御下りある、あら痛はしや御曹司、世に従かふ習ひとて、吉  
次が太刀をば右に持ち、源氏重大のこんねんどうの御佩刀はたきをば、左の  
脇にしのばせて、いまだ習はぬ竹の鞭をぬきもち給ひつ、四十二疋



平家物語重衡海道  
下の條に濱名の橋  
わたり玉へは松の  
梢に風さえて入江  
にさわぐ波の音さ  
して心なほす夕ま  
くれ池田の宿にも  
つき玉ひねさある  
文によれりさ見ゆ

うつ山へのうつ  
いに伊勢物語に  
駿河なる宇都の山  
邊のうついに夢  
に人も逢ふ歌を  
けり云ふ古歌を  
されり  
命也けり四行法師  
の歌に「年を経て  
またこゆへしと思  
ひきや命なりけり  
小夜の中山」さあ  
る意なり

の雑駄にうち交はりて、御下りあるこそあはれなれ、名所くはざれ  
くぞ憂きもつらきも遠江濱名の橋の夕潮に、さしても上る、蟹小船  
こかれて物や思ふらん、さらでも旅は物憂きに、松の梢に風かよふ、入  
江に響くは波のおと、心をつくす夕まぐれ、池田の宿にも着給ふ、池田  
の宿をたち出て、そこも知らぬ行く末を、遂にながめましませば、遠  
き梢の花共は、残る雪かど疑はむ、習はぬ戀を駿河なるうつ山への  
うつ、にも夢にも人に逢ふ事もなき、葛の細道わけ過ぎて、小夜の中  
山通るにも、また越ゆべしと思へ共、命なりけりと詠むれば、心ほそさ  
ぞまさりける、日數つもれば程もなく、名を得て音にきこえける、駿河  
の蒲原田子の浦ふきあげにこそ御つきある。

(十一) ふきあげ

かくて御曹司は吹きあげにつき給ひて、其のち一日は旅の疲れ、二日  
は神やみ、三日は病氣と打臥し給ひける、吉次此の由見奉りて申ける  
は、いかに冠者どの聞こしめせ、御身の體は唯の風氣でさらになし、こ

うつりて此病感染  
する人は助る事難  
しと云なれば風邪  
にあらずして疫症  
の傳染病と聞えたり

爪よき馬は蹄の  
強きをよしとする  
故にかく云ふ也  
年祭詞の自陸往道  
者尚緒の堅氏勢根  
木根忍左久彌氏馬  
爪至留限云々とも  
あり

ついで一本にいつ  
さしあり

れは大事の奇病なり、うつりて人の助かること難し、いかにせんとぞ  
悲みける、一日二日とせし程には、や四五日にもなりければ、吉次殿は  
宿の亭主を近づけて、いかに候主の殿我をば誰とか思しめず、奥州に  
かくれなき秀衡殿の御代官に金買吉次のふたかどて、年に一度づ、  
御年貢をなへて都へ上る物にて候、一條尻橋に米屋が宿にて候しが、  
かの米屋より東へくだる冠者を一人ことつかりて候、此程旅の疲れ  
にや、風の心地と候ふぞ、世は情にて候へば、看病してたび給へ、よきに  
勞はり給ふならば、明年の上りには、御恩を報じ候はんとして、爪よき馬  
に黄金十兩とり添へて、主の殿に奉る、暇申て冠者どのとて、吉次も袖  
をまぼりつ、勞はしや御曹司を、そこも知らぬ吹き上げに、唯一人  
うち捨て奉り、あづまをさしてそ下りける、さる程に御曹司吹きあげ  
に唯ひとり、打ち捨てられておはします、其後此所の癖として、邪見か  
ざりもなかりける、かゝる奇病をやむ人を、一つ家には叶ふまじとて、  
情なくも十兩のこがねと馬をばうけとり、遙のうしろの濱に松六本  
ある中に、ほそき竹を柱として、松の葉を取り覆ひつ、に雨風たまる



しやうは笙

こま笛は高麗笛

へしとも覺ねども、沼のまこもを引きはへて、桶と柄杓を取りそへて、御曹司を出しけるぞ哀なる、さるほどにふきあげの浦人ども都より吾孀へくだる冠者が奇病をいたはり、うしろの濱に出されて候ふがしやうこま笛筆簾やうてう、四管のふき物、黄金づくりの太刀とかたなど持ちたるが冠者が分として身の廻りに、六萬貫はもちたるらむ、後は何ともあらばあれ、いざ／＼行きてかの太刀かたなを取りて、暫したのしまんとて、うしろの濱へ行き見れば、太刀は甘尋の大蛇と現じ、かたなは小蛇となつて、近づく者を呑んと追かくる、これをみる物肝を消し、おめきさげんでにげければ、其後言とふ人も無りける、たまたま訪ふものどては、渚の千鳥沖のかもめ、吹上げの濱のまさこの音づれ渡る風より外は音もせず、痛はしや御曹司今をかざりとみてしかば、かたじけなくも正八幡のよにも哀れと思しめし、濃きすみぞめの御衣をめし、老僧と現じ給ひ、御曹司の枕かみに立ちよらせ給ひて、さも高聲に仰せける、いかにくわじや、殿何をか勞はり給ふぞよ、何處より何處へ通らせ給ふ人ぞ、かやうに申は吾孀より、都一見の爲に罷

南無三寶南無は佛  
を拜する詞にて歸  
命と云に當れり三  
寶とは佛と法と僧  
とをいふ義經の不  
信なきに三寶を拜す  
義なり

りのぼる客僧也、もしも都に知る人ましまさば、事づてし給へ懸に届けて参せらんとぞ仰せける、いたはしや御曹司さも幽かなる息の下よりも、是は都よりあづまへ下る冠者なるが異病を勞りするが蒲原田子の浦、吹き上げといふ所に、あらぬ様にて候ふが、今をかざりとみえたりと、三河の國矢矧の宿の上り御前の方へ委しくとゞけてたび給へとおほせける、源氏の氏神正八幡は此由きこしめし、慥かに届け候はん、よきに養生し給へ、暇申てさらばとて墨染の御袖しぼりつ、吹上をたち出給ひ、片時の間に三河の國矢矧の宿につき給ふ、長者の屋形に立ち寄りたまひて、廣えんに腰をかけ、是はあづまの方より、都一見の爲に、罷かりのぼる僧に御茶所望と仰ありて、壁にむかひて、獨ごとをぞ仰せける、あぢ氣なしとよ南無三寶昔が今に到るまで、戀程つらき物はなし、故をいかにと尋るに、逢て別れの戀やらん、逢はで怨むる戀やらん、都より東へ下る冠者ありけるが、いかなる人を見初めてか、戀の病にふし沈み、駿河の蒲原たごのうら、吹きあげといふ所に、松の小蔭を圍ひつ、一日二日とせしほごに、げふ三七日になる



と息の下より申せしが、はや空しくぞなりつらん、南無三寶とぞ仰せける、れんせい此由うち聞いて、いかにや御僧きこしめせ、其殿の年はいくつ計り、風情は何と見えて候やらん、御僧きこしめし、せい小さく鬢の髪少しちみみて、他まで色白く候つる、さて衣装は何と候ふか、こがね造りの太刀とかたなを持せ給ひて候か、と問ひ給へば、尋ね給ふ有様すこしも違はず、凡百萬騎の大將といふとも苦しからずといひもあはず、掻き消すやうに失せ給ふ、れんせい此由見奉り、急ぎ上るりの住家にかへり、上るり御前に斯くと申せば、胸打ちさわぎ、いつぞや吉次が下人に逢ひなれたりして、母の不興を蒙りて、二百四十人の女房たちをも添られず、乳母一人はかりを添へられ、長者の住家より遙のおくに、柴の菴をむすひつつ、あらぬ様にておはします、此よしをきこしめし、いと思ひぞまさりける、れんせい此由をみ奉りて申されけるは、いかにや君きこしめせ、これにて歎き給はんよりも、音に聞ゆる駿河の國蒲原田子の浦とかやに、尋ねて下らせ給へかし、聞え給ふを見まいらすも、同じ苦しみ、わらはもおん供申べしと申されけ

あゆる血あゆるは  
まみ出す様の義な  
り汗あゆるなごさ  
いへり

れば、上るり御せんは斜ならず、に悦び給ひて、いまだならはせ給はぬ、旅の姿に御身をやつし下り給ふぞ哀れなる、今をはじめの旅なれば、御足よりもあゆる血に、路の草葉も千入に染み、涙を路のしるべにて、たごらせ給ひける程に、月日の路に關守すえざれば、矢矧の宿と吹きあげの間を、この爲には五日路と申みちを、九日にこそつき給ふ、さるほどに田子の浦に御着きありて、浦の物を近つけて仰せけるは、いかに候ふ浦の殿都よりあづまへ下る冠者が病を煩ひ候ふて、此浦にあると候ふは、いづくが宿にて候やらん、をしへてたべと仰せける、いざ知らぬと計り申ける、その後上るり御せんは、十二ひとへをめされたる御小袖一かさね、道ゆき人に取りらせ給ひて、かの行末問ひ給へば、姫君の御姿をつくなくと見參せ、あら恐ろしや、此濱へ化生の物か來たれるぞと、足を早めて行きければ、吹きあげの浦人申けるは、此浦の習ひにて、富士の嶽より年に一度つゞ、人をとるが、男が女をとらんとては、みめよき男が下り、女人が男を取らんとては、みめよき女の下りけるが、ことしも男子をとらふとて、たゞ今女が來れるぞとて、う



さりぬべき所さあ  
りぬべき略語に  
て爰なるは峯谷な  
ごに然るべき宿る  
陸しなしとの義な

源氏の氏神正八幡  
の信仰するなりお  
ひつひら氏神さ  
ひは正しく八幡宮  
の神孫と云ふは  
別なり昔源頼義の  
平信仲と云ふは  
八幡宮を建てし  
其子をも八幡の神  
幡太郎と呼ばし

らの物ども皆々東西へ逃げ隠れて、一人もなかりけり、さてしも有らぬ事ならねば、高き峯に深き谷のさりぬべき所はなかりけり、後の濱に御下りありければ、其日も程なく暮にけり、こゝやかしこに立ちより給へども、御宿参いらする人もなし、その夜は浦の濱べに清き真砂をかたしきて、千鳥かもめと諸共に音をのみ争そひ給ひける、此浦の習ひとて、吹きくる嵐烈しくて、波と真砂を吹きたて、高き所は高くなりさてこそ吹き上げの浦とは申なり、いたはしや姫君は、れんせい殿たゞ二人十二ひとへの褌を寄せくる波に濡らしつゝ、涙とともに泣き明させ給ひける。

夜も深更に深け行けば、源氏の氏神正八幡は、世にも哀れとおぼしめし、十四五ばかりの童子と現じ給ひつつ、うしろのはまへ御出あり、上るり御せんの有さまを御覽じて、涙を押へての給ひけるは、いかにや汝が尋ぬる冠者は、此濱邊のうしろなる、松六本生ひたる本に出されて居たりしが、はや空しくや成つらん、村鳥のさわしが昨日けふはいざ知らず、いらせ給へ姫君とて、上るり御せんの御袂をひかへて教

より特に兵神さ  
云しなれど藤原氏  
の春日に於る如き  
さは少しく別なり

へ給ひしが、かき消す様に失せ給ふ、上るり御せんは夢さめて、いかなる神の御告げぞと、嬉しさ限りもましまさず、夜もほのくゝと明けければ、二人の人は立出て、うしろの濱の松原を、ここやかしこど尋ね給へば、いたはしや御曹司荒さはまへの鹽風に、塚の如くに吹きあげたる、真砂の下にぞ埋もれて、姿かたちも見へたまはず、爰にまさごの中よりも、黄金づくりの御佩刀の石づき少しみえたりけり、上るり是を頼みに思しめし、れんせい殿と只二人楓のやうなる御手にて、泣々真砂を掘りたまへば、藁や真菰の中よりも、桶と柄杓を掘り出す、彌これに力を得て、猶々掘りて見給へば、さも淺ましき姿なる、御曹司をひき出し給ひける、いつくしかりける御姿、萎める花の如くにて、見るに泪止まらず、埋れたる砂を衣の褌にてうち拂ひ御膝に掻き載せ奉る、天に仰ぎ地に伏して、悲しみ給ふ御有様あはれといふもおろかなり、いかに候都の殿一夜の契りになれそめし、上るり是まで参りたり、いかなる定業にてまします共、みづからは是まで参りたる、心ざしの程を受け給ひて、今一度蘇生せ給へと、胸にあて顔にあて、流涕こがれ給へ共



伊豆の國は以下加  
持し給へば以下加  
行一本に於て只  
さていつの間  
箱根権現其外神々  
に祈禱をあたか  
け給へばさあり  
よみ返らせよみさ  
は人の死して行く  
夜見の國を云へり  
古書に黄泉をよも  
つ國よみの國さし  
よめり其國より歸  
る故によみ歸るさ  
はいふなり

其かひ更に無かりけり、姫君余りの悲しさに、潮水にてうづうがひをして、天に仰ぎ、願くは日本國六十六か國の大小の御神其外諸神諸佛哀愍納受を垂れ給ひて、此の冠者定業なりとも、今一たび片時の程なりとも、此世へ返し給へど、肝膽を碎き祈たまへば、不思議や諸神諸佛の御はからひにや、上るり御前のこぼさせ給ふ御なみだ、御曹司の口の中へ流れ入り、不死の薬となり、少し息出させ給ひける、上るりあまりのうれさしに、是に頼をかけ給ひて、尚々所々へ宿願を立て申されけり、伊豆の國は走湯權現三嶋の三嶋大明神、御あはれみを垂れ給ひて、此殿を今一どよみ返らせ給ふならば、矢矧に持たる七つの寶を一つづつ、たびくゝに參らすべし、さてまた金地の錦の御戸帳六十六織せて八尺の掛け帯三百卅三筋、五尺の燈三百三十三かけ、八花かたの唐の鏡三百卅三おもて、十二の手ばこを添へて參らすべし、眞羽の征矢百矢揃へて忌垣を結せてまいらすべし、黄金づくりのかたなに、て欄干わたして參らすべし、白銀の太刀百振揃へて、鳥井を建て、まいらすべし、卯の花緘しの鎧卅三兩、四方白の兜卅三はね、緋の糸にて

かみ巻きたて、馬の毛揃へて卅三疋引かせて參らすべしと、深く祈請を申されければ、諸神も哀れとおぼしめし、いづくよりとも、しらす十六人の山伏の通り逢ひ給ひて、いざゝ我等が行力の奇特顯はさんどて、さまゝの加持し給へば、誠にありがたや、佛神の御恵にても、この心地にいできにける、上るり御せんなのめならず、喜び給ひて、れんせい殿二人の中にとり込めて、ないつ笑ひつ、此程の心づくしの有様を語り給へば、御曹司は夢の心地して、さもやつれたる御袖を、絞らせ給ふぞあはれなる、

(十二) 御曹司東くだり

さるほどにひめ君は、御ざうしを引き具して、遙かの奥に柴の菴のそれどなく、烟の立つをしるべとて、立ちよらせ給ひて、一夜の宿を借り給ふ、内より八十ばかりの尼公一人立ちいで、こはいかに姫御せん、いづくよりいづくへ通らせ給ふぞ、かく申自も甘歳に餘る子を一人、此程世間にはやりぬ風、やまふを煩ひ空しくなり、無常の風にさそはれて、けふ三七日になり候ふ、旅は何かは苦しかるべき、卑しき賤が

やまふは病の詠り







平家にこそなびきて候へ、我等も住家は古き宮岩の洞、人影遠き森の下こそ露の宿りにて候へ、上るり此よしきこしめし、君の住家でましまさば龍虎臥す野邊、鯨の寄る嶋なりとも、花の都に勝るべしとあこがれ給ふぞ哀れなる、御ざうしは聞しめし、斯ては叶ふまじと思めし、われは是より奥へ下り、義経が郎等秀衡を頼み、八十萬騎の勢をたなびき、都へまかりのぼり、奢れる平家を追討し、日本を吾が儘とし、矢矧の宿六萬貫の所を君にまいらすべし、御名殘は同じ御事なれ共、さて、愛宕平野の大天狗小天狗を近づけて仰せけるは、いかに面々聞き給へ、此二人の人々を、矢矧の宿へ送り届けてたび給へと仰せありければ、大天狗うけ給はりて、安き程の御事とて、九日に下りつるみちを、片時が間に、やはぎのしゆくにつき給ふ、

足柄山相模國にあり大磯小磯も同國なり、鞍子川此邊に在り、地名ありしに、やさらば今の鞍子と名にして、異所なるか、今のまじり、子と呼ぶは駿河

なれば爰に列れては、遠へり、櫻川常陸國なり、衣川陸奥にありて、昔より名高し

の名所をうちすぎて、奥州に聞えたる、岩井の郡平泉秀衡が館につき給ふ



築  
島

○新編御伽草子

五十

319563



築島の開題

この築島の巻は、舞の本三十六番の一つなり。舞の本の事は、群書一覽に云ふ、舞の本三十六巻は、中古の舞の譜本にて、草子に類するものなり、古雅なる文句多くして、おもしきもの也。此巻にて中昔の俗語などを考ふるに、尤益あり。多田義俊が三十箇條故實辯に、此舞の巻の詞の解しがたきものどもを出して、註釋を加へたり。按ずるに、兼好が徒然草に云、通入道、舞の手の中に興ある事どもをえらびて、磯の禪師といひける女に教へまはせけり云々、これ白拍子の根元なり、佛神の本縁をうたふ、其後源光行おほくの事をつくれり、後鳥羽院の御作もあり、龜菊に教へさせ給ひけるこそ云々、これを以て考ふれば、古き舞の巻の中には、やんごとなき人々の作もまじれることあるべきにや。今此三十六番の目録を左にしるすものなりとて、

- |       |       |         |        |         |
|-------|-------|---------|--------|---------|
| 淡いで、  | 磯黄が島、 | 常盤問答、   | いるか、   | 夢あはせ、   |
| 新曲、   | 劍讀嘆、  | なすの興一、  | こしこえ、  | 四國落、    |
| 元服曾我、 | 小袖曾我、 | 和田さかもり、 | さかし、   | 清しげ、    |
| 未來記、  | 木曾願香、 | かげ清、    | 馬ぞろへ、  | 笛のまき、   |
| いぶき、  | 十番切、  | 大職冠、    | 伏見さきは、 | 堀川夜討、   |
| あつもり、 | まんぢう、 | 高だち、    | 花討そが、  | ゆりわの大臣、 |
| 文覺、   | 筑さかし、 | 志田、     | つきじま、  | 鳥帽子折、   |
| 八島、   |       |         |        |         |

さて擧げたり。貞享の番目を參考するに、それには夢合、劍讀嘆の二種を取りて、ひまた、いつみか城を加へ、合卅六番舞本也と記せり。これらの書、今多く佚して稀に存す。故にその一つを此に收めたるならん。但しこの卅六番も、悉く中昔のものとは見えず、且曲目を考ふるに、多くは平家物語曾我物語などの行はれし後の物にはあらず、徒然草にいへる佛神の本縁をうたふといふものは却て何の本地と號する草子にのこりて、これは多く源平時代の史傳を種とせるが如し。舞の本といへども、昔の白拍子のにはあらざるべし。且文辭もさまで古くもおほえぬや。さてこの築島は、清盛入道が經島を築きし事を作れるなり。

築島

中昔の事かどよ、其頃平家の大将をば、安藝守清盛と申し奉る、御出家あつての戒名をば、淨海とこそ申けれ、ある時一門列座の座敷にて、仰出されけるやうは、夫れ人の世に在るしるしには、大願を起し或は國をあらため、離山荒野を名所となし、民すなほなる政を、末代のかたみと爲る也、天下の職掌を我儘に振舞ふといへども、平安城の興立は淨海のわざならず、然るにかの平の京は、左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、四神相應の地を示し、北には糺こんはじ、貴船の奥より流れ出る、水の方を白川や、東山に三井寺鹿の谷の峯つゞき、鬼門には比叡山傳教大師の草創たり、南に男山石清水と號け、和光の影曇りなく、百王寶祚を守護し給ふ、西山の麓には、松尾と法輪寺、龜山の奥よりも流出る清瀧を、大堰川と名づけ、末をば桂河といふ、仁和寺、御室、廣隆寺、佛法流布の此京にて、絶えする事はあるまじい、つらく物を案するに、難波の四天王寺と、奈良の京も絶えせず、譬へば九條に足らずとも、末代のしる



殿島當時辨天と  
稱す實は市杵島命  
を祭る故に市杵島  
を記して後世いつ  
くしまさは云るな  
り

しに新京を立て見ばやとて、遠き國の差圖まで委しく見るに地形無  
し、さてのみ止まんずる無念さに、兵庫の浦を割つて見るに、纔か五條  
の所なり、是ならでは然るべき地形も更にあらねば、所詮は是を福原  
の新京と名づけ、里内裡を造進せん、此京繁昌するならば、淨海の亡き  
跡の紀念かたみと人も思へかし、安藝の嚴島いづくしまをも此機を以て造進す、人々こ  
こそ仰せけれ、御一門の人々、此儀は然るべう候とて、各兵庫に下り、里  
内裡をたて、斯くて爰に住せ給ふ、時の御しうとに平大納言時忠進み  
出で申されけるは、哀れ同じう候は、あのしう海を埋めさせ、船の泊  
りとなすならば、本朝に於てかほどの名所あらじと申されたり、淨海  
聞し召れて、其れこそ何よりも聞かま欲しき事さうよ、四國西國の船  
共が着くならば、彌富貴たるべし、須磨やいたやは遠淺とほあさなり、一の谷は  
荒磯にて、和田の御崎へ寄る船の磯までつく事なき間、給島か磯より  
吹く風に破損やぶするごと悲しめば、此京たて、曲もなし、とても一期の  
大願に、和田の御崎を筋違すぢがへに巽向たつらきに海上を三町計り埋めさせう、野  
島の上うへに在家を立て、船の泊りになすならば、數千艘の船つくとも、風

承平の將門將門  
は陸奥守府前將門  
軍從五位下平長持  
の男なり承平三年  
三月謀反せらる

如何さう此さう  
はそを延たる也此  
書元來一種の謡曲  
なれは曲節に據り  
て多し前に絶する  
事はあるまじいこ  
ある此も音のひ  
いきなり總て其心  
にて讀むべし

の難には遭ふまじい、但し遙の深淵の埋めんずる事どもこそ、量りが  
たうは候へども、民をはぐ、む政、龍神も佛神も、なか憐み無かるべ  
き、五條の大納言國綱の卿はおはせぬか、御身奉行して島つかせられ  
候へ、國綱の卿は承り、か様に申せば、仰の旨を背き申すに似たれども、  
昔もさる例たとひの候、承平の將門は、坂東八ヶ國を平げ、下總の國相馬の郡  
に京を立て、政を爲し候へども、曆とらの博士なくして、年の界を知らざれ  
ば、五節の祝ひも定め得ず、程なく運命盡き果ぬ、是は末代迄も目出た  
かるべき御願なれば、博士をめされ候て、委まかしき事の子細をも、御尋あ  
れと申されたり、淨海聞し召し、さる事ありとの給ひて、晴明の流れ阿  
倍の泰親泰憲に三代のき、ようい、泰氏と申て、天下の吉凶世をはかる  
博士を急ぎ召れけり、泰氏やがて参らる、淨海御らんじ、今に始めぬ  
泰氏が占かたに、不審はよもあらじ、和田の御崎を筋かへに、辰巳向き  
に海上を三町ばかり埋めさせて、其島の上に在家を建て、船の泊りに  
させんと、近日に思ひ立ちぬるは、成就すべきか如何さう、占うら兆考へ吉  
日とつて、島成就の祈誓をも、冥の加護に任せてたべ、泰氏とこそ仰せ



十二くう或は十二  
たうともあり  
わうさうは旺相ッ

けれ、泰氏承つて、元より占は上手なり、打きく所の支干きやく、五行そ  
うそくのうをんたう宿曜十二くう六みやう、たいようさんじゆつま  
で、わうさうを極めて考ふるに、誤る所は無れども、こゝに一つの不審  
が候ふ、島をつかせて御覽せよ、一度に此島成就せし、事の體に理をう  
け、占ひ申し候はん、吉日は三月十八日、吉時は辰の一點を占ひ定め申  
す、淨海聞し召さらば國綱奉行をせよ、承ると申て、大和山城伊賀伊勢  
播磨津の國丹波七ヶ國の人夫を以て、武庫山しうち山の岩巖石をく  
わつくとひつ崩して、和田の御崎へ運ばせけり、朝埋ける大物は、水  
潮はやくてさし退る、岩を重ね人夫を増し宵に埋ける大もつは、曉引  
く潮早くして、沖へばつと引てゆき、埋れば颯と動崩す、大物大石數知  
らず、螻蟻がいさごの塔には思はく便りも有りぬべし、五萬人の人夫  
を以て、十日ばかりは埋めけれども、少しの効も見えざるは、龍神納受  
なきやらん、扱如何はせんとの御仰せ也、淨海大に御腹を立させ給ひ、  
博士の泰氏を召て仰けるは、汝は何と占ひたるぞ、更に此島成就せず  
水練の入て見せてあれば、埋たる所に石は無くて、由なき方に散り居、

五百成 具足成を  
云なるべし比丘二  
百五十條あり是を  
合せし數なるべし

さすがそこには浪も無く、殊の外靜なると申が、如何やうの仔細によ  
つて、かやうには有るやらん、さてのみ止んず無念さよ、如何はせんと  
仰せけり、泰氏承て、さう無く不審を開き得ず、漸ありて申すやう、實に  
世に住む習ひは、大事の事に候、占の儘申せば、我身の仇、申さねば天  
子の威を下す、兩様重科の身なるべし、夫れ人間に限らず、生を受けぬ  
る類ひは、命に過ぎたる寶は無し、されば佛も戒めて、五百戒の其の中  
にも、殺生戒を第一に持て、教化し給へり、其をいかにと申に、人柱を  
御立て無くては、此島成就あるまじきと、占の面に見えて候、ゆゑ、しき  
罪業、これなるべし、御思案あるべう候、一人ならず二人ならず、三十人  
の人ばしらが立つべきなりと申す、淨海聞し召れて、持せ給へる御笏  
にて、壘の表をてうと打て、やあ此事御披露あるべからず、何として  
此島の成就すべきこそ幸なれ、其れ堂塔を建るも、一たん國のゆるぎ、  
民の心を惱ませば、善も惡を先とする、其れ善惡の二法と云つば、裏と  
表の如し、今此島の人ばしらに立らなん物も、必過去の宿縁なくして  
は、いかに思ふともよも取られじ、さりながら人柱を一度に取らば顯



はれて路次を停めて悪しかりなん時々取れとのたまひて生田毘陽野あたりにかにも人を隠し置き都よりも下る者又初て京へのぼる者中にて取つて押籠めて聲ばし立つなど警めてこくちやうするぞ無慙なるさこそ郷里の戀しさを思ひ遣るこそ哀れなれ捕られぬる者共はかく有るべきと期したらば老たる親に暇乞ひ名残をしき妻子にも紀念を取らせて行末の過ぎ果つべき言の葉もなごかは語りおかざらん唯假そめの事なれば今日よ明日よと待くらし風のそよと吹んにもすはやと思はん志何時を限りに待兼山空しく月日をすぐら山行方知らねばよも尋ねじ吾身の消ん命より待宵空しき故郷を思ひやるこそ哀れなれと牢の扉に取付て悲みあへる有様を見るに涙もせきあへず一人ふたりの事ならず二十余人捕りぬれば生田毘陽野の邊にこそ變化の物の住むやらん道行き人を中にて取つて行き方知らずと風聞する親をとらるゝ物も有り一人もちたる子を取られ消んと悲しむ者もあり丹波播磨伊賀伊勢近國他國の者共が生田のあたりにイみて假令閻魔の者の來て我父我子を取りた

壁に耳岩の物言ふ事へなり神代よりの古言にて大蔵詞に語問志勢根根立草の垣葉乎言止氏云々見えたり

今はさてもさてもは此まにても云の如くなる詞に中止せよと諫むる也

り共、せめて死骸を見せて給へ何時頃か此野邊に旅人の失せて候と尋ね兼ねたる有様は野飼の牛の暮毎に子を尋ぬるが如く也かくする程に壁に耳岩の物いふ世の習ひ兵庫の浦の築島の人柱に悉く取られぬるとぞ聞えける取られぬる者共が里内裏に參り庭上にひれ伏し思ひく心々にこれは丹波のわたの者これは播磨の明石の者或は伊賀伊勢都の者助け給へと聲々に悲み合へる有様は冥途に趣く罪人の閻魔法王うしやうしん冥宮達のしやにての罪を鏡にうつされ獄卒の手にわたりし時六道能化の地藏尊助け給へと聲々に悲しみあふも斯くやあらん生死無常の憂き世の中現世も冥途に違はずとよその袂も濡れぬへし御一門の人々里内裡に參り此由を御覽じて假令ば此島なくとも何の不足か御座あるべき沈むも残るもおしなべて一かたならぬ愁歎ども未來の業とならせ給ふべし今はさても御座あれかしと申されたりければ淨海聞召したまたま淨海が思ひ立ぬる大願の妨げんどの詮議さうや淨海もさほどの道には惑ふへきには候はず夫れ摩迦陀國の阿闍世王はふつしやう國の將



御内外様  
御内は  
平家の族を  
云ひ外は  
他家の人を  
い

あうさながら  
うは前に國土の  
ひやさある詞を  
さ受くるに添  
諸曲の曲節に  
るが如く聞ゆる  
な

軍王に討れさせ給ふ、海日大王は八萬四千人の后を殺す、一聖太子は龍樹菩薩の命を取る、神通第一の目連は、畜生外道に討れ給ふ、無上の國の<sup>虫くひ</sup>給ふ、釋尊だにも提婆達多に御足を打れ給ふ、これをそうよくのほうなり、况や末世の人間に於てをや、善惡二つの機なくして、成就する事有る可らず、國綱の卿はおはさぬか、庭上にひれ伏す奴原を、門より外へ追出し、錠を強く差いて置き、左右なく人を入、るなど、内心に腹は立たねども荒る、氣色を見せんか爲め、御座敷を御立ちあり、板あら、かに踏み鳴らし、此島無益と思さんする、御内外様の人々は、御出仕は協ふまじ、淨海教訓せん者は、天か下に覺えずと、合の障子をばたと立て、籠中深く入り給ふ、御一門の人々此由を御覽じて、此人などむる事あらじ、中々急ぎ揃へよとて、忍びくりに取らすれば、廿九人ぞ取たりける、今一人取んとするに、國土も平安あらざれば、道ゆき人も止つて、邊土遠路の民までもおちおの、いて通らす一人となつて、そ日を送る、あつばれ國土の煩や、あうさながら民の歎き也、爰に諸國を回る修行者一人、兵庫の浦を通りけり、捕手の人數これを見て、爰

譬へば此譬へば  
とあるは詞を改て  
云出せる所に云る  
卷中の例にて他と  
異なり

を通るは修行の身なれども、人まち兼る折ふし、通りあふこそ幸なれ、彼人を數にせんとして、首に掛たる笠もき捨て、懸て人數になしにけり、三十人の人柱の、思ひは何れも劣らね共、取わき此修行者の由來を委しく尋ぬるに、譬へば津の國難波入江の三つまつにさやうふ左衛門國春と申者の候しが、四十のゐんに入る迄、子のなき事を悲しみて、鞍馬の多門に參り、申し子をぞ爲たりける、國春三十三歳、女二十八と申すに優なる姫をまうくる時しも、八月十五夜のくまなき月のさよ中に生れたる姫なればとて、明月女となづけ、漢家本朝にためしなうこそかしづきけれ、そのしんちうはくわう女にて、婉轉たりしさうかは、遠山の月に愛をなし、霞の山さくら匂ひあくまで身にあまり、人にまみゆるそのすがた、池のはちすの朝霧にかたふく風情もかくやらん、姫のすがたを見きく人、およぶもおよばざりけるも、望みは多くありけれど、ませの中の八重菊も包めば色のます風情、領承するかたあらすして、十三のくれまで獨すむ、十四と申す花の春父にも母にもしのび、めこの女房ばかりひき具して、芦屋の野へにたちいで、千草



小川の庄に當りては、  
庄園の土を私に  
有し其地を私に  
村十集めて何の  
村を稱せしめて  
藤兵衛家兼と云  
人は其庄を預る  
室の御家人なり

あづか所は預なり

の色をながめてあそぶ、こゝにひさつ物の物がたりあり、丹波の國小川の庄能勢と申ところ御室の御領その所のあづか所をば、仁和寺の藏人兼氏とこそ申けれ、その人の子に藤兵衛家兼とて、そのころ十九になりけるが、詩歌管絃に長じ、なさけも人に勝れたりしが、河内の國禁野に所領あるによつて、十日ばかり禁野にありしが、是もつれなくさのあまりに、あしやの野べに立いで、鶉狩をぞしたりける、家兼になく、姫のすがたを見つけ、うつろひ易き紫の色そめぬるこそよしなけれ、聲たつるはかりにおもへども、思の外にたちいで、はあしかりなんと思ひ、供の者をば、遙々としのばせ、わが身は一村す、きの候ひしにやすらひひめのすがたを見てまつるに、夕日西にかたふきたまへば、ひめはいへちにかへらんとて、こまつなきの一ふさ萌出たるをとりもちて、はるはまつこまつなきにぞ若葉さす、ふる葉の色も見え分かばこそ、くさ村にしのぶ家兼のしのぶ心も堪へかねて、春の野にぬしも見えざる放れ駒くもの井にてもつなぎとめばや、かやうに詠じて顯れいづる、めい月は御らんとて、あら恥かしや、この野邊に

しうは主従

出雲の神のむすび  
なり男女の縁は  
出雲の神の結ひ給  
ふより有し古く給  
は、大國主命に此神  
の故なりとて給ふ

人あるべしとも知らずして、口すさみけん悲しさよ、思ひのいろも青柳のいとはづかしげなる御有様露にしほる、花かこよ、乳母もさそはすふり捨て、いそがはしげなる歸るさは、嵐にたぐう落花のふけゆく風情もかくやらん、いご、心のあくがれて、めのが袂にすがり、夫婦なさけの和合は私ならぬ事し、うの中の愛執も、出雲の神のむすびなり、虎臥す野へをふみわけ、くさむらにきえんもこのみちなり、伊勢物がたり源氏にも、かやうの事をこそ傳へて候へ、たとへば卒爾の儀なりとも、風のたよりになびけてたべ、御供の人さひひすて、急ぎおつ付き候て、そこともしらぬ野べより戻ごつて、馬にうちのせめのごとも共に引具して、丹波の能勢へぞかへりける、あら痛はしや二にんの人々は、故郷のこひしさは、あさゆふひまなく思へども、めのは恐れておとづれせず、明月はち、は、の不興をいたくは、かりて、明ぬ暮ぬとせしほごに、三年になるは程もなし、國春夫婦のなげきは中々に申すばかりはなかりけり、人の子のよきよりも、かたはなる我子はなを不便におもふならひ、いはんやこれは佛神に祈誓申して、只



ひとりもちたる姫にてある間世にたぐひなくかしづきしを、行き方  
しらす失しなひて、なげく思ひもいかにばかり、いたはしや母こそせん、三  
年と申す秋の思ひに消ぞはてにける、形部左衛門國春は、一方ならぬ  
おもひごもに、妻女のかたみをとりもちて、高野のみねにまいりつゝ、  
おくのゐんにて鬢きり、さい女のかたみを籠めおきて、ひめがゆくへ  
を尋ねんとて、高野のみねを下向して、まづ三熊野にまいらるゝ、みつ  
の御山ふしをがみ、尋ね給へど行き方なし、同者船に便船し、四國へわ  
たりてたづぬれど、その行き方のあらざれば、又ふねに便船し、播磨の  
室にあがりつゝ、みやこの方のゆかしさに、あけぬくれぬとのぼると  
て、兵庫の浦をとほりけるが、捕手の人數にゆきあひて、おさへてとら  
れて牢舎となり、ごにもかくにも國春の運のきはとそきこえける、す  
でにこの島は三月十八日の辰の一點とさだめ置せ給へども、人柱の  
わづらひに、卯月もすぎてさ月になる、う月さ月には吉き日もなし、六  
月二十三日の午のこくにぞ定まりける、とられぬる物ごもが、近國他  
國よりまいり、ごとも助かるべきいのちならずと、具して海に入れら

れて、水層になつて消えばやと、思ひきることあはれなれ、中にも國春  
の思ぞいと、哀れなる、かく有るべきと期したらば、高野のみねにて  
露とも霜とも消ゆべき物を、浮世にもしもながらへば、姫がゆくへや  
聞くと思ひ、かゝる修行におもひたつて、今さらうきめを見る事よ、か  
ほごに薄き縁ならば、何しに生まれきたりけん、恨めしの契やとて、親  
子のちぎりをば今さら恨み給ひけり、かやうに思ひける思ひの念や  
通じけん、神のめぐみにてや候ひけん、丹波の野瀬にまします明月女  
の御方へ不思議のたよりぞ候らひける、そのゆゑをいかにぞ尋ぬる  
に、譬は、津の國渡邊ちかき神崎に、楠葉庄司長清と申人の子に、近藤  
次重友とてさうらひけるが、これも國春の姫のすがたを見つけ、より  
く、心を盡せしに、思ひの外に彼のひめの失せぬる由をつたへぎ、  
世をあちきなく思ひきつて、諸國を修行つかまつり候が、この二三日  
のさきほごに、商人のたよりに、ふるさとの事を尋ね給へば、めい月女  
の母は去年の秋空しくならせ給ふ、ちゝの國春は、高野の峯にて遁世  
し、諸國を修行つかまつるとて、兵庫のうらの人柱にとられぬるよと、



うき世ぞとおもひすて、も一  
入道の意は憂きなり  
の思はせし世の事  
は猶人の憂き事な  
りかかなしき事な  
なり

浅ましくて、一首のうたをぞ詠じける、うき世ぞと、おもひすて、も一  
すちに、人の上にもうき事ぞきく、かやうにえいじてた、すみける、折  
ふしめい月は、物ごしちかく御出ありけるが、なにとやらん胸打ちさ  
わぎ、人を出してしゆぎやうじやを、いづくの人ぞと問はすれば、かく  
浅ましき修行の身にて、世にありがほに故郷を申すべきにて候はね  
ど、包みても又何かせん、これは神崎のものにて候、めい月もかんざき  
の者と聞くからに、吹きくる風もなつかしくて、障子をほそめにあげ  
そのひまよりも見給へば、年にもたらぬ修行者なり、なふ修行者いせ  
んのあらましに、浮世ぞと思ひすてても一すちに、人の上にも憂き事  
ぞきくと、口すさみ給ひしは、さて世に何事のさふらふぞ、修行者うけ  
給はりて、人のうへと申も此發心の由來なり、何をかつ、み申べき、語  
つてきかせ申べし、たとへば津の國難波入江の三まつに、形部左衛門  
國春と申者うつくしの、一人のひめをもつ、玉のすがたを身にまとひ、  
なさけのふかき事共は、楊貴妃李夫人にもあひおさらじとぞ聞えし  
を、住吉まふでのありしとき、そと見初しより、静心なき戀となつて、よ

りく、心をつくせしに、思ひの外彼のひめのうせぬるよしをつたへ  
き、世をあぢきなく思ひきつて、やがて遁世候し、かやうに諸國をめぐ  
り候が、この二三日のさきはごに、商人の便りに故郷の事をたづね  
て候へば、めい月の母は、こそ秋空しくならせ給ひぬ、父のくにはる  
は高野のみねにて遁世し、諸國を修行つかまつるとて、兵庫のうらの  
人ばしらにとられ、六月十八日に沈めらるべき由をつたへき、うか  
りし人の行へさへかくなりぬるよと浅ましくて、何となく腰おれを  
つらねぬると申、めい月はきこしめし、夢かと思へばうつ、なり、うつ  
、かとおもへば誠しからず、重ねていかにとたづねさせ給へば、なふ  
さのみに問せ給ひそよ、わが身のかやうになる事も、其人ゆるの事な  
れば、なにはにつけて恨みのかす涙ならでは、友もなし、よその見る目  
も恥かしやと、たもとを顔におしあつる、明月はきこしめし、さる事の  
ありしぞや住吉まうでのありし時、輿のさきへたまづさをひき結び  
ておとせしが、どもの下女がひろいとつて、身づからに見よといふ、何  
なるらんと見てあれば、思ひもよらぬ花を見て、露ときえなん悲しさ



齋料 齋は僧の朝  
 正午 齋の食をい  
 ふ正食を云るに  
 非時に對せし名  
 なり其齋の料物  
 たり米錢を布施  
 するに

よもしこの風のためよりをも不便とおぼしめし御返事ましまさばか  
 んざきにきこえたる釋迦堂のかねの緒にむすびてたべとかきとめ  
 ておくに一しゆの歌をかくしらせてもしるしなくてはすきの門明  
 けぬ暮ぬといかでまちなんと書きとめたりし水莖をた、大かたに  
 おもひなし捨てたりし事のありしぞや、われを忍ぶの戀衣今きて見  
 るぞよしなき、吾ゆゑかやうになる人ならずば、たゞ今も立ちいで、  
 父母の御事をも問はまほしくは思へども、われ故かやうになるとい  
 へば、さすがかふとも岩代のまつことこの葉もかきくれて、落る涙のひ  
 まよりも、乳母花井が修行者に、齋料奉れやとて、簾中深くいり給ひ、  
 引き被きたふれふし、流涕こがれ給ひけり、その比丹波國へは、都より  
 ほくけの一族下向あつて三日の狩くらあり、國にありあふ弓取りた  
 ちも、皆々狩くらにいでらる、家兼もまかりいでけるに、きやうのひ  
 まなりしに、父母の御事を風のためよりにきこしめし、あるにあらぬ  
 御有様なか／＼申ばかりもなし、この人歸らせ給ひては、いかに思ふ  
 とかなふまじ、すこしも急ぎゆきつ、父の命にかはるべし、めのこの

女房うけたまはつて、さらば御急ぎ候へとて、人めをつつむ事なれば、  
 夜半にまされてたゞ二人、丹波の能勢をたちいで、足にまかせてた  
 ざりゆく、かのみぐさ山と申は、きこりの通ふみち多し、かなたこなた  
 と踏みまよひ、どある木蔭にたちよりて、一夜を明し給ひけり、かくて  
 もはてぬ夜半なれば、月西山に傾き、ほの／＼と明石がたなる早天に、  
 やう／＼木蔭をたちいづる、すゑの松山こいのもり、心ばかりは急げ  
 ども、ゆく道さらに見もわかず、日輪いでさせ給ふをこそ、東とばかり  
 はわきまゆれ、西北にまよへども、なにとてか南へ道のなかるらん、か  
 くて二人の人々は、そのぬししらぬ玉章の、ふみまよひぬる折ふし、斧  
 まさかりを持たりし、山人一人ゆきあふたり、この山人が見まいらせ  
 て、あらふしぎやな、秋まぢかぬる萩の色、桔梗かるかやをみなへし、露  
 おもげにてくねるかや、時雨に染るもみちばと、ませのうちの八重菊  
 に、あひ混ひぬる女房の、野干の恐れもはばからで、袖しほれぬる立ち  
 姿は、何をしるべのたよりにか、人倫まれなる深山に、かやうに立ち入  
 り給ひけん、あやしめ申して立つ程に、答めも問ひもせられずして、



こらうは虎狼つ

上臈のすべて上首  
の人を云る詞なる  
が本にて此頃は貴  
女を云る詞なり  
也

たがひに休らふはかりなり、こらうの變化かあやしやと、山人の思ふもとはりなり、めのごの女房是を見て、心ありけるの山人なれば、偽て兵庫への道のあんないをも尋ねばやとおもひ、これなる山人にやたき事の候、これなる上臈のち、は、兵庫の浦つき島の奉行に立せ給ひ、さらにひまなく御座さふらふ、母ごは繼母にてましますが、事のほかに御憎みあつて、父ご歸らせたまはぬさきに、あらざる事を申しつけ、失ふべしとの巧みのさふらふほどに、自あまりにいたはしさに、夜に混れて御供して、兵庫の浦を心がけ、これまで迷ひて候へども、行くへをしらでた、すむ也、野にも山にもしるべぐさ、兵庫の浦のあんないを、をしへてたべ山人よ、この山人がうけたまはつて、さらはとくにもこの道かくと仰なくして、こなたへ御入り候へとて、谷川をわたり、そばを歩き、めのごもめい月も互にたもとを取りかはし、草葉くを分けてゆく、高きところにあがり、これは古ひやうごへの追ひ分けと申候を、近年人まつがたうげと申ならば、す由來の候を、語つてきかせ申たくは候へども、少しも先へと急かせたまふ上臈たちにて御座ある

此邊誤字あるべし  
類本なく校し  
たし

間懸にはゆさぬなり、御らんせられ候へ、西へ道の候は、あれは室高砂へゆく道、かまへてそなたへ行かせ給ふな、たつ已へ少しゆき、一たん高き所より、東の方を御らんせられ候へ、湊川、さいたかしも、かんどり、雀の松原見かけの森、くも井にさらす布引や、渡邊、かんざき天王寺、住吉の濱も見えぬべし、西は明石高砂大くら谷といふ方なり、南にかすめる渚こそ、兵庫のうらにて候へど、うさいへはかつ道の人のいかに多く、いどさうへ危ぶみましまさで、兵庫のうらを目にかけて、直に行せ給ふべし、なごりをしほの夕日影、是よりおいとま申とて、山人は峯にとまりけり、めのごも主ももろごもに、此恐ろしき山の内、道しるべせし、嬉しさよいかさま、これは、山人にてはよもあらし、多年たのみをか、け申、鞍馬の大悲多聞の山人と現じ給ふかや有難さよとかたりつ、さしにも物うき道なれども、この物がたりに慰さみて、やうく行けは津の國や兵庫につかせ給ひけり、或浦人にゆきあひて、人柱の事をたつねさせ給へば、この浦人のうけたまはつて、上臈たちは何を御たつね候ぞ、君よりの御誕には、人柱のゆくへとて、尋ね來たりたらん



物に案内をもしらせ、音信をもしはせたらんすともがらを、やがて取  
て人柱にたつべしと、定めおかせ給ふ、いかで上臈たちを痛はしく思  
ひ申せばとて、わが身にかへて申べきか、中々思ひもよらぬ事なるべ  
しと、かたりすて、通る、さすが道理なりければ、重ねて尋ぬるまでも  
なく、とある所に宿をとつて、空しく日かすをおくらせ給ふ、さても丹  
波の家兼いせは、夢にもしらす三日の狩くらすぎ、わが宿所にかへる、御う  
ちの者とも走りいで、上さまこそ、めこの女房ばかり召し具してゆ  
き方しらすうせさせ給ひて候を、如何たつね申せども、御行き方もま  
しまさず、いか、はせんと申、いへかぬ聞て、不思議なる事を申物かな  
と、籠中にたちいり見れば、げに、失せて見え給はず、こは如何淺ま  
しくて、常に住みける所を見れば、委しき事をかき留むる、なに、今  
生ならざる花の縁かやうに散りかはるべしとは、夢々思はざりつる  
に、父母ぎみの御事を、風のたよりに聞きぬれば、身のとが業わざも恐しく  
御身のとがも恨めしや、いたはしや、母御せんは、去年の秋空しくなら  
せ給ひぬ、父の國春は一方ならぬ思ひごもに、高野のみねにて遁世し、

なに何と書しと思  
ひて文をよまんこ  
す前にもまづなに  
に今生ならざるこ  
云より文の詞なり

ろうばうは路傍の  
字にや

諸國を修行めさる、とて、兵庫の浦の人ばしらにさられ、けふともあ  
すとも御最後をさだめぬ由を承る、なさけの縁がつきばこそ、御身の  
恨みもをばせめ、少しなりとも急きゆき、ち、のいの中にかはるべし、  
思しめし、わすれずば、ほだいをどうてたび給まへ、返す、と、かきと  
、むる、家兼是を見て、あら口惜や、兵庫の浦の人ばしらを、た、大方に  
思ひなし、よその歎きと思ひしに、みの上か、る我か秋の、泪の雨とな  
りぬる事よ、道理なりことばりや、さりながら兼ては比翼連理とちき  
りつるに、なごや夢ばかりしらせぬぞと、取る物も取りあへず、駒を早  
めてうつほごに、兵庫の浦につき、かなたこなたを尋るに、兵庫ひろし  
と申せども、げにや、盡せぬ契かな、女房にろうはうの宿に尋ねあひ、嬉  
しといふも中々に、申はかりは無かりけり、さてなふ、父ごの御事は、い  
かにと問へは、中々音信をたにも申さぬなりとぞ歎かれける、家兼聞  
いて、心やすくおぼしめせ、此島は五條の大納言國綱の卿の一圓に御  
あつかりどうけたまはる、よき内縁をもち申て候、やかて參つて申さ  
んとて、國綱の卿にまいり、此由申されたりければ、國綱の卿きこめし



ていぢうさば上訴  
の事なり庭中の字  
なり鎌倉時代の常  
語

進上 上たる人へ  
對して言上する事  
なり古き書簡に進  
上某殿と書るも此  
意と聞えたり

されて、面々の訴訟自餘の事にて候は、何かは背き候べき、この島と  
申は私ならぬ御願なれば、國綱がはからひばかりにては、なか／＼思  
ひもよらず、明日はかならず島つかせらるべき内談あるべし、里内裏  
にまいり、ていぢうあらば、國綱も心のおよひは申べし、御一門の御座  
敷を伺ひ給へどありしかば、恐まつて候とて、わが宿に歸り、夜もすが  
ら出仕のいてたちを引きつくり、明れば出仕つかまつるとて、女房  
にかたりけるは、この事申かなへずば、庭上にて腹切つて冥途閻魔の  
廳にて詫申さんとかたりすて、里内裏にまいり、事の子細をうか／＼ひ  
しに、淨海かねての御誼には、三十人の人柱が、十八人は男にてつめ、い  
ま十二人は女とさき、男十八人を沖に沈め、をんな十二人は磯のかた  
に沈めよ、どり／＼の歎をいつて見んする事ども、なか／＼思ふも  
不便なるべし、一度にはつと沈むべしと仰出されたりければ、思ひき  
りぬるいへかぬも、肝魂も身にそはず、今申さではいつの世に申べき  
と思ひ、ふるふる聲をさしあげて、一人ならぬ歎きを、別けて進上せし  
むる事、世にも恐れ多き申條にて候ども、三十人のひとばしらの満す

る時に、召し置れたる修行者は、難波入江の三まつに、形部左衛門國春  
と申物にて候、ごぞの秋妻女にはなれ、さやうの事をや思けん、高野の  
峯にて遁世し、諸國を修行つかまつるを、御願の人數にめしおかれ、島  
の柱となりひひき、かの修行者がむすめは、このいへかぬめが、妻女に  
てい、父が最後の由をき、て、命に代はらんと申し、これまで参りてい  
へども、さすが女にていほどは、恐れをなして、殿中へ申あくる事なう  
て、餘に歎きいほどに、この家兼ねが、庭中申上くる事のかたじけなさ  
よと申て、恐れをの、く有様は、水にしたがふ柳ぎの伏ししづめるが  
如くなり、淨海御らんじて、あれは何と申訴訟ぞ、惣じて人はしらの行  
方とて尋ねきたりたらんする物に、案内をもしらせ、音信をいはいせ  
たらんする物を、やがてとつて人柱に立つべしと定めたるに、誰がは  
からひによつて是迄きたりたるぞ、さりながら父が命にむすめが代  
らんと申を、かなふまじいにては無けれども、汝思ひても見よ、三十人  
の人柱を一人憐みて、とりかへなば、自餘のうらみを如何せん、中々お  
もひもよらぬ事なれども、餘りに汝が生涯にかへて申すところの不



きらうこのはく  
さふいかなる文字  
かしたす

まもつさほしもさ  
をの讀みくせにて  
答を振り上げるこ  
と

便なるに、明々日をあいまちよ、そつと見参さすべしと、御内に入らせ給へば、いへかぬ時のめんぼく施して我宿にかへりて、あら目出たや候、明々日には必らず國春を賜はるべしとの御ちやうの候ぞや、御心安く思しめせと、とにかくに慰さむれども、めい月は父にもあはで此のまゝにさてのみ果ん哀しさよ、父よ〜といひけるを、物によくよく譬ふれば、きらうこのはくどふが、山路にすてし父を、こくふ〜と三度呼び消入りたらん有様も、かくやと思ひしられたり、かくて人柱の吉日吉時にはやなりぬ、三十の籠をつくらせ、三十人の人柱を、牢のうちにて入れさせ、ふね一艘に一人づつ、とぞ定めたる、妻子したしき物どもが、近國他國よりきたりて、あれは我子か我父か、或は兄弟なんど、て、袂にすがりかなしむを、放逸邪見の物のふどもが、心弱くてかなはじとて、しもつと當て、追ひのくる、今を最後の事なれば、云ひたき事のかす〜は、さこそ思ひやらるれども、責て近づく事なければ、傘をあげ袂をあげ、有るにあらぬ有様は、目もあてられぬ風情なり、中にも國春をば、この人ばしらには交らず、その故いかにと尋ぬ

傘をかしこにあげ  
すて此傘は今の  
日傘と云る物なり  
承久記に山田重忠  
の唐傘さいせて下  
知せし事も見え  
れば此頃より専ら  
用ひしなるべし

るに、家兼さる弓取なれば、とても最後の道と思ひ、いかなる所存やかたくむべき、軍兵どもを添へよとて、路次より籠にいれさせ、中に荷ひていつる、めのだの女房、これを見て、たゞいま運らせ給ふこそ、國春にてましますと申もあへねは、めい月傘をかしこにあげ捨て、諸人のなかを押しわけて、この籠にすがりつき、めい月こそまいりて候へ、吾れ諸共に沈まんと、言んとすれば物の、ふども、しもつとあて、退んとす、家兼その身をはばからで、情けなしとよ物のふたち、その人一人計りを御免あるぞといひければ、時の奉行の上総守、荒くな申そその人は、重々訴訟のある方なり、籠をすこし昇きすゑて、名残をしませ申せと、うけたまはると申て籠をかしこにかきすゆる、遂の別れとおもへども、東の間の對面さこそとおもひやられて、中々によるこびの涙は淵となつて、陸にて沈むばかりなり、や、ありて國春は落つるなみだのひまよりも、實に心ざしのましませばこそ、これまでは尋ねきたり給ふらめど、何とてか人の子のおやの思ふ心中相違してあるらん、和御前のおもひ深くして、母は遂に死してあり、國春も同じ道へと千度



も、たゞ思ひつれども浮世にもしもながらへば、わごせか行へや聞  
くと思ひ、かゝる修行に思ひたつて今更憂きめを見る事も偏へにわ  
ごせの故ぞとよ、子は敵か寶かど善惡二つを案するに、人の子は寶に  
て、わごせは親の敵なり、かくはいふてあれども深き恨みは残らぬぞ、  
此年月佛神に祈念申せし利生には、命の中に見つるこそ、何より以て  
嬉しけれ、かやうに小車の回りあふべき道ならば、母もろともになが  
らへて、見るとだに思ひなばいかゞは嬉しかるべきぞ、但し嬉しき中  
にもかく淺ましき最後の體をあのまれ人に見へぬるこそ、何より以  
つて耻かしけれ、よし／＼其も事の縁姫を思ひすて給はずば、見し物  
と思しめし、菩提をとふてたゞ給へ、なさけなの乳母や、かほご近きを  
たりに、住みながらへてある物か、今まで音信せぬ事の、恨めしさよと  
ありしかば、姫は涙のひまよりも、御道理にておはします、赦させ給ひ  
候へや、自共に沈みつ、御手をひかへ三つの川死出の山路をこえす  
ぎて、閻魔の廳の御供をも申べきにて候ふぞや、身自をもこの籠に添  
させ給へ人々とも、だへこがれ悲しめば、父は籠のうちにして、泣て

うさふながす血  
の涙 夫木集みち  
のくその濱な  
る呼子鳥鳴く  
聲はうさふや  
た此鳥子の抽  
たる時は母鳥  
涙を流すさい  
ふ論曲にもわり

はくごき恨みてなく、善知鳥がながす、血の涙、いまこそ思ひしられた  
れ、人の歎きも我思ひも、うき世に住めばおほけれど、かゝる哀れはた  
ぐひなしと、上下萬民おしなべて、袖をしぼらぬ人はなし、上総守は御  
覽じて、かくては時刻うつるなり、はやくて籠を昇せよとて、又中に荷  
ひて出る、さるあひだ淨海和田のみさきの観音堂にて、御見物あるべ  
しとて、祇王祇女をさきとして、御一門三百餘人、さゝめきわたつて出  
させ給ふ、博士の泰氏は渚に悲しむありさまを見て、これはひとへに  
泰氏が業となりなん哀しさよ、いかゞはせんと思ひ、観音堂にまいり、  
庭上にひれふし畏こまる、あれ／＼御覽候へ諸人のなげきは、偏に阿  
鼻、大焦の熱鐵のほに咽ふらんもかくやと思ひしられて候、され  
ば教主釋尊の難行苦行寶相をとかせたまひて候、釋尊一代の所行に  
法花經を致王とす、一萬部の法華經を書寫させられて、三十人の人柱  
の名字名乗をかきしるし、沈めの石には年號日付龍神納受ましませ  
と海底に沈むる物ならば、五十轉々の隨喜功德には、八十越劫の生死  
のつみも滅し、龍神納受ましまさば、かならず島は成就候べし、いかゞ



と申されたりければ、淨海きこしめされて、なか／＼御返事までもなく、御眼のけしきかはりければ、御一門の人々博士の泰氏もみな赤面してぞおはしける、されども丹波の家兼は、そのおそれをも憚ららず、女房乳母ひき具して、観音堂にまいり庭上にひれふし、あら御情なの御事や、たゞお助けあれと申さんにこそ、憎しどもおぼしめさるべけれ、我々二人を國春一人にめしかへさせ給はんに、何不足の御座あるべきぞと天に仰ぎ地にふして、流涕こがれかなしみける、淨海御覽じて不便とや思しめされけん、祇王をめしておほせけるは、人の上に吹く風のわが身にあたらぬ事やある、いかに心強くとも、あの女があはれをとふて得させぬぞと仰せいたされければ、祇王なのめによるこび、めい月の側により、御歎きは淨海も不便におぼしめさるゝに、御前ちかく御参りあつて、御申あれと引立つる、淨海御覽じて近うまゐつて申さずとも、汝が訴訟はき、わけぬるぞ、さらば國春一人をば、あの女にとらせよ、残る廿九人は時刻うつしてなげきあり、どつく沈めよとありしかば、残る人しゆのなげきは中々申すばかりもなし、かゝり

こんていは健見さ  
かくにや

だいくわんは代官  
にてたゞ代理の事  
に用ひたり

ける所に淨海の御うちに、三十人の童の中に、松王こんていとて、見めかたち尋常なるが、君の前にかしこまり、三十にんの人柱を皆々たてさせ給ふとも、人の歎きの島ならば、成就する事候まじ、又思しめしたち給ふ御願をむたいにしたまは、君の御意にも背くべし、所詮は博士の御申の如く、一萬部の法華經を書寫させられて、三十人のだいくわんに、なにかし一人立つならば、末代島は成就して、たえする事は候まじい、と申乞ひたる松王は、上古も今も末代も、ためしすくなき次第かな、淨海きこしめされて、まことに隨喜の泪をながし、あら不便の御事や、さらば博士どもかくも計ひぬへとありしかば、泰氏なのめに喜ろこんで、急ぎ濱に下り、まづ國春をとりいだし、名月女のかたへ渡し給ふ、さて又残る二十九人も、皆とり出し給ひて、こと／＼く歸し給ひければ受け取り／＼濱に出で、嬉しきにも涙、つらきにも涙、さきたつ物は涙なり、三十にんの人柱、不思議の命たすかるは、難波入江の國春の姫のゆるなると喜び、わが國里に返りて、或は兄弟孫子とりに取付／＼喜ぶ事、浦島がいにしへ七世の孫にあひぬるも、これにはいかで



禁野交野此二  
所は國春の所  
りしを此度改  
家兼給はる也  
は河内の地名  
同所なれど元  
御料地にて常  
な禁せられし  
りの名なり

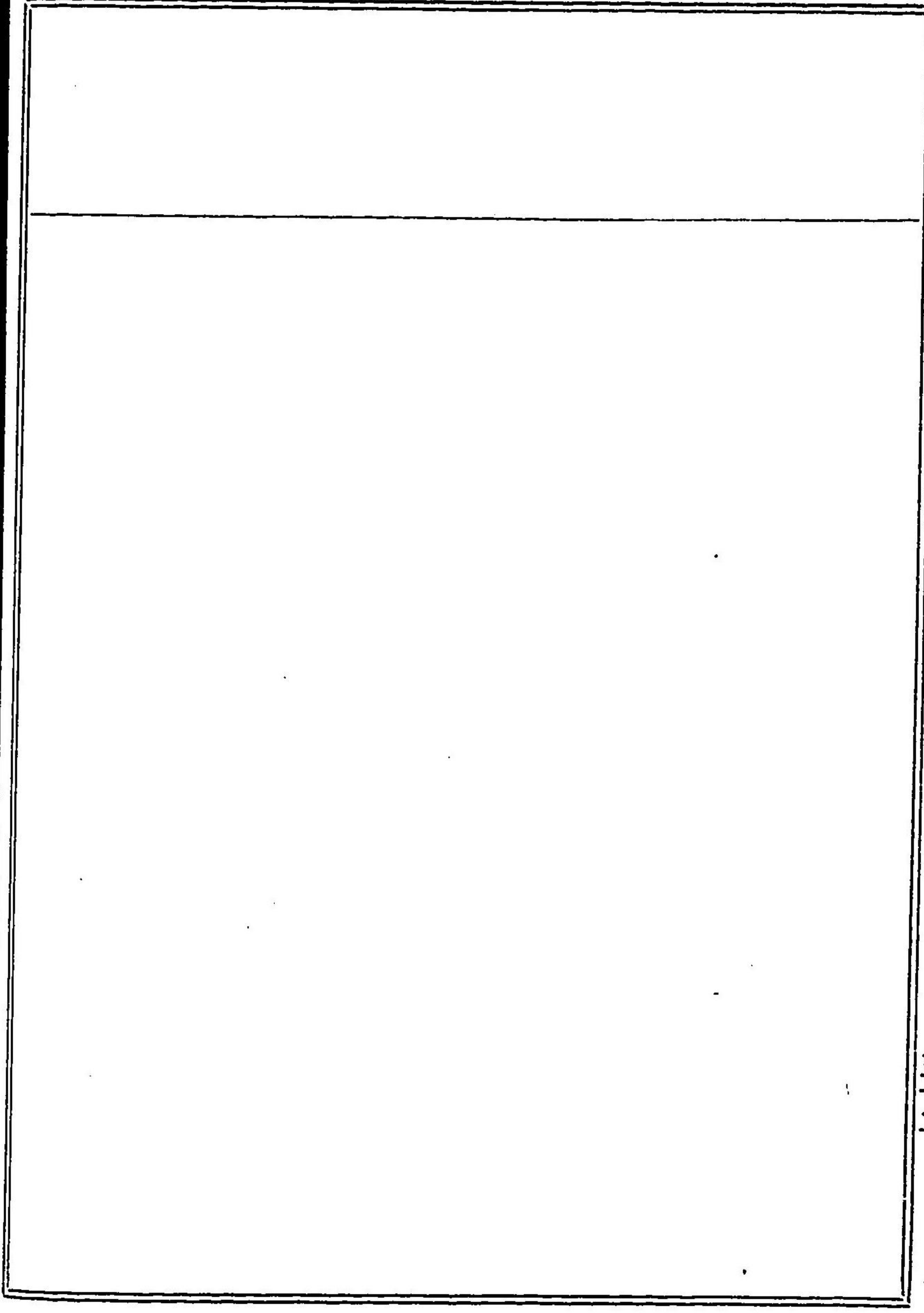
けうしやくは啓  
けうびやくの詠

こりうは建立な  
り

増るべき淨海よりの御説には、丹波の國の家兼が、舅のいのちにかは  
らんと、思ひきることやさしけれ、禁野交野能勢の庄、八百町をとらす  
るぞ、しうとを扶持して天下へも、よきにみやつき申せとて、下したふ  
こそめでたけれ、又吉日とあらため、七月十三日に定めさせ給ひて、一  
萬部の法花經を洛中洛外の寺へ、日記をあげて、書寫させられ、ほ  
ごなく御經いでき、兵庫のうらへ參らす、博士御經取り集め、數の御  
幣を切り立て、船おし泛べ打のつて、遙のおきへ押出し、御經しづめ、  
御幣をふつて、けうしやく祝詞を申さる、まことは松王望みの申け  
る間、彼一人ひとしらに立てられけるぞ有難き、讀誦の御經あるべ  
しとて、一千人の御僧を洛中洛外よりも請し下し給ひて、渚に御經あ  
そばせば、大少ちくの結縁を龍神納受あるによつて、島は成就する、十  
四町の所也、經の島として、平相國のこりうの、いまに有りこそ見え  
にける、めい月女と申は、たゞよのつねの人ならず、鞍馬の大悲多聞天  
の御計によつて、吉祥天女にて、島をも成就、人はしらをも助んため、  
めい月とげんじ給ふなり、さて松王と申すも、たゞ世のつねの人なら

ず、大日王の化身にて、島を成就のそのために立ち給ふとぞ見えにけ  
る、傳へきく古へ大せ太子は、忝なくも如意の玉を取らんと、ゑいしの  
かいを以つて、ちよかいをはかり盡くしつ、つひに寶珠を得たまへ  
り、大願としては又つひに空しき事あらじ、この淨海も末代たみをあ  
はれみ、兵庫に島をつき給ふ、地藏菩薩の化身、慈悲誓願の御ちかひ有  
り難しともなかなかに、申ばかりはなかりけり、





化物たりまりまりま



化物草子の開題

化物草子の繪巻といふもの、博物館に一本あり、今それにて校正せり、同館の卷子には跋語ありて、書は飯尾彦六左衛門尉常房、繪は土佐刑部大輔光持なり、常房は京都公方時分の人、鳥飼流と申流を書き、能書にて御座候といふ調をさへ加へたり。これはその書手にて、撰者は別にあらざれど、例の明ならず。されど此の跋文にて、大凡其の時代に程遠からぬことは知らる。

不思議なる奇事五條より成りて、文中に不思議といふ語を疊み用ひたるも、わざとの事なるべし、されば名つけて不思議物語とも異名すべきものなり。古くは今昔物語の怪異篇の系統に屬するもの、近くは貞享元祿の頃に、淺井了意が書ける御伽婢子は、全くこれらを粉本にして、筆を立てたるにやともおもはる。古雅なる様、この時代には得がたきものならん。

化物草紙

兵衛つかさなりける人、七月ばかりに簾すだれ巻上げて、端にながめ臥したるに、ふけゆくまゝ、に風涼しく、萩の葉のうちをよぐも秋知り顔なるほど、ものあはれなるこゝちして、月無き頃なれど、星の光さやかなるに、十二三ばかりにやと見ゆる、丈立たけだてのいみじく細き男なめり、又たどしへなく横ざまへ廣く肥えて、ひきくどしたると二人いで来て、相撲をぞとる、いと不思議におぼえてつくくど見れば、互あひまにいしゆふがけにて寄合よりのきたびくどれど勝負なし、何者ならんと心も得ねば、あれは誰ぞといふ聲を聞きて、萩すゝきの茂れる中へ急ぎ入りぬ、いと不思議なれば、侍さむらいめして見すれど、すべて人も無しといふいと心得難し、此人やもめ住なれば、いつもたゞながめ勝にて、一人のみあかし給へば、又の夜もよべのやうに見出しておはしますに、夜深くなるほどに同じやうに二人出来て、又相撲をぞとる、事のやう化物かぶつにてこそ覺えて、側わきにありける眞弓をやをら取りて、ひしくと二人か

丈立は身の丈をいふなれど、こゝの丈は立ちたる姿をいふ、細きは瘦せたるなり、ひきくは身の丈の低きを體言にして重れたる詞なり、いしゆふがけは未だしひていはい、かけは物語相撲の條に、手拵てぢりは小頭掛など見えたる如く、相撲の手なるべし、上のしのおはれなるの句一人のみあるの句に至りて、收照せり











驚かしは案山子  
いふ田に來る鳥  
を驚かす故の名  
古傳にソホド又ソ  
ホツゴもいへり  
驚ありし事は古事  
記少彦名神の段に  
も見えたり

蓋大三輪神の故事  
を本さして換骨脱  
胎せしものならむ  
文詞簡勁以て籠さ  
なすべし

物も無しやうく秋風も身にしみ心細くおぼえけるまゝに、門田の  
面に立出で、うちながめつ、驚かしにても來て、わらはがつまにな  
れかしとぞいひける、かくて過ぎ行くほどに、或夕暮に門の方より、採  
み、烏帽子着て弓矢持ちたるもの、宿からんといへば、宿して、どかくい  
ひよりて、其夜は語らひ明しぬ、かくて夜かれなく通ひけるが、ある曉  
起き別るとて、飄々として立出づれば、そら行く鳥も目馴れぬ、我身の  
さまも、あらはれぬべしといひけり、いづくを泊りとしもおぼえぬ氣  
色も心得られず、又此獨言もあやしくおぼえて、長き糸をつけて、歸る  
をりに繋ぎて見れば、そろくさあゆみく、て、止りたる所を見れば、  
田中にある驚かしといふ物にてぞありける、かへすと、おそろしく  
あさましく覺えけり、化あらはれぬとや思ひけん、其後は見えざりけ  
るとなん。

# 魚島平家



驚かしは案山子を  
いふ田に來る鳥、  
を驚かす故の名、  
古昔にソホド又ソ  
ホゾミといへり、  
驚ありし事は古事  
記少彦名神の段に  
も見えたり、

蓋大三輪神の故事  
を本として換骨脱  
胎せしものならむ  
文詞簡勁以て絶々  
なすべし

物も無し、やうく秋風も身にしみ、心細くおぼえけるまゝ、に門田の  
面に立出で、うちながめつゝ、驚かしにても來て、わらはがつまにな  
れかしとぞいひける、かくて過ぎ行くほどに、或夕暮に門の方より、採  
み、烏帽子着て弓矢持ちたるもの、宿からんといへば、宿して、どかくい  
ひよりて、其夜は語らひ明しぬ、かくて夜かれなく通ひけるが、ある曉  
起き別るさて、飄々として立出づれば、そら行く鳥も目馴れぬ、我身の  
さまも、あらはれぬべしといひけり、いづくを泊りとしもおぼえぬ氣  
色も心得られず、又此獨言もあやしくおぼえて、長き糸をつけて、歸る  
をりに繋ぎて見れば、そろくさあゆみくゝて、止りたる所を見れば、  
田中にある驚かしといふ物にてぞありける、かへすくおそろしく  
あさましく覺えけり、化あらはれぬとや思ひけん、其後は見えざりけ  
るとなん、

# 魚島平家



# 魚鳥平家

魚鳥平家は、一名を精進魚類物語ともいふ、平家物語に倣ひて、魚類と精進物との合戦をなぞらへ作れるものなり、作者は一條禪閣藤原兼良公といひ傳ふれども、慥ならず。此の頃は、武家戦闘の多かる世の常として、平家物語の流行おひ／＼に盛なるまゝに、合戦の事を種とせるもの尤世の好に適したればにや、演義戦史の外に、動植物を假り來りて、その趣向を立つること、鴉鷲合戦物語（これも一條禪閣作ともいふが我自刊我叢書の中に刊す）河海物語（板行本年月なし）蟲太平記、魚太平記、草木太平記など尙あるべし。蕎麥物語といへるも、この種の物なり。かの一休和尚の作と傳ふる佛鬼軍といふも、また同し類なり。さてこの魚鳥平家は群書類從に收めたる、精進魚類物語にて校しつ、文に異同なし。

## 魚鳥平家

必ひつすひは必は  
美物は生魚をいふ  
鎌倉室町頃の常語  
なり  
ここの牛は物を  
買ふ強き牛をいふ  
なり今俗にこつ  
てい牛といへるは  
是なり  
御料の大番御料は  
米飯のこまを指す  
大番はもさ語國の  
武士の禁裏を番直  
するものこまな  
りしつ後には將軍  
家の番衛にも將軍  
あり此は飯を將軍  
に擬したり

祇園林の鐘の聲、きけは諸行も無常なり、沙羅雙林寺の殿の汁、盛者ひつすひしぬへき理をあらはす、おこれる炭も久しからず、美物を焼は灰となる、猛き猪も遂にはかるもの下の塵となる、遠く異朝をたつぬるに、獅子や象豹や虎、これらは皆人主の政にも隨はず、或時は人を損し、或時は獸を害せしかは、つひには、人の爲にもどらばる、又ちかく本朝をたつぬるに、山の狼里の犬、ここの牛のそらたけり、荒たる駒のいはね聲、これらはみなとり／＼なりといへ共、ましかくは越後國せなみあら川、常陸國鹿島なめかた、凡北へ流る、河を領知しける、蛙の大介、緒長か有様を傳へ承るこそ、心も詞もおよはれね、去る魚鳥元年申八月一日、精進魚類の殿原は、御料の大番にそまわりける、運參をは闕番にこそ付られ、折ふし御料は八幡宮の御齋禮にて、放生會といひ、彼岸といひ、かた／＼御精進にて渡らせ給ひける、こゝに越後國の住人、蛙の大介、緒長か子共、鯛の太郎、粒實、同次郎、弼吉とて、兄弟二



魚鳥平家

魚鳥平家は、一名を精進魚類物語ともいふ、平家物語に倣ひて、魚類と精進物との合戦をなぞらへ作れるものなり。作者は一條禪閑藤原兼良公といひ傳ふれども、儲ならず。此の頃は、武家戦闘の多かる世の常として、平家物語の流行をひくりに盛なるまゝに、合戦の事を種とせるもの尤世の好に通じたればにや、演義戦史の外に、動植物を假り來りて、その趣向を立つること、鴉鷲合戦物語（これも一條禪閑作ともいふか我自刊我叢書の中に刊す）河海物語（板行本年月なし）龜太平記、魚太平記、草木太平記など尙あるべし。蕎麥物語といへるも、この種の物なり。かの一休和尚の作と傳ふる佛鬼軍といふも、また同じ類なり。さてこの魚鳥平家は群書類從に收めたる、精進魚類物語にて校しつ、文に異同なし。

魚鳥平家

ひつすひは必良は  
必吸をかけたり  
美物は生魚をいふ  
鎌倉室町頃の常語  
なり

ここの牛は物を  
買ふ強き牛をいふ  
より牡牛のこと  
なり今俗にこつ  
てい牛といへるは  
是なり

御料の一番御料は  
米飯のことな指す  
大番はもさ指す  
武士の禁裏を番直  
するものな指す  
りしか後には將軍  
家の番衛にも將軍  
あり此は飯を將軍  
に擬したり

祇園林の鐘の聲、きけは諸行も無常なり、沙羅雙林寺の厭の汁、盛者ひつすひしぬへき理をあらはす、おこれる炭も久しからず、美物を焼は灰となる、猛き猪も遂にはかるもの下の塵となる、遠く異朝をたつぬるに、獅子や象豹や虎、これらは皆人主の政にも随はず、或時は人を損し、或時は獸を害せしかは、つひには人の爲にもとらはる、又ちかく本朝をたつぬるに、山の狼里の犬、ここの牛のそらたけり、荒たる駒のいはれ聲、これらはみなとりく／＼なりといへ共、まちは越後國せなみあら川常陸國鹿島なめかた、凡北へ流る、河を領知しける、蛙の大介、鱧長か有様を傳へ承るこそ、心も詞もおよはれぬ、去る魚鳥元年申八月一日、精進魚類の殿原は、御料の一番にそまゐりける、遅參をは闕番にこそ付られければ、折ふし御料は八幡宮の御齋禮にて、放生會といひ、彼岸といひ、かた／＼御精進にて渡らせ給ひける、こゝに越後國の住人、鮭の大介、鱧長か子共、鯛の太郎、粒實、同次郎、阿吉とて、兄弟二

○魚鳥平家



人も人々しくは人  
もこそあれなさい  
しふも同じ意なるへ

人候ひしをは、遙の末座へそ下されける、こゝに美濃國住人大豆の御料の子息、納豆太郎糸重はかりをそ、御身近くはめされける、蛙か子共腹を立て、一つはし申て、殿原にあちは、せむと思へ共、父大介に申合てこそ、火にも水にも入らむすとて干蛙色の狩衣着て、山吹の井手の里へそ下られける、其夜も明ぬれば駒に鞭をあけて、夜を日について打程に、同八月三日酉の一點には、越後國大河郡鮎の庄、父大介の館に下着する、兄弟左右に相並ひて、畏て申しけるは、われら、此間大番近習の爲に、上洛仕候しかとも、大豆の御料の子息、納豆太郎に御心を移し、御目にもかけられず、剩恥辱におよひ、末座へおひ下され候間、當座にていかにもなり、火にも水にも入らんと存候しかとも、如斯の子細をも申合てこそと存候つる間、是まで下向とそ申ける、大介此事をき、赤かに腹をたて、我等か一門中には、北陸道蝦夷千島まで、北へなかる、川をは、我等かま、に管領すれば、國に不足はなれども、御料不便と仰あれはこそ、子どもをも進せられ、人も人々しく、納豆太ほどの奴原に、思召かへさせ給はむには、番にもられても何かせむ、蟠長年七十に

よはひ顔馴につけ  
さかあるへきかす  
誤れるなるへし顔  
の時は武帝の時  
事へたれとも不遇  
年までありし人な  
り  
うらみ伯鸞に同じ  
伯鸞は後漢の梁鴻  
さいふもこの字な  
を領りて五鹿の字  
な作れり、蕭宗の時  
の人なり

腹赤は魚の名なり  
鱒赤いふこそ正月  
に鱒赤の奏あり

あまりて、いく程ならぬ世の中に、已故に物を思ふこそ口惜けれ、よはひ顔馴につけ、うらみ伯鸞におなし、是につけても、故御料の御事こそ思ひ出さるれ、慙してこの君は御心こはき御料にて、年ころの我等か申事をも御承引なし、又諸國の受領、檢非違使、大名小名にも、白衣にて中帯はかりに、曳入鳥帽子にて對面し給ふも心得ず、哀此御料の兄御前のらくいん腹に、粟の御料とておはしますこそ、御心もこまくとし、ておはせしかとも、それはもとより御身ちひさくわたらせ給へは、われらか奉公仕るへきやうもなし、又君につかへ奉るには、禮を以て本とすといふ事あり、人の身として、兩君につかへさるは、皆人の法なり、されは我等か又人をたのむへきにもあらず、就中此御料の先祖をたつね承れば、天地開闢し、生あつて種くたり、稻田姫の御腹に、やどり世に出させ給ひしより以來、伊勢天照太神宮のかりのつかひ、賀茂の御祭のみつき物、腹赤を奏する節會まで、魚類をもつてむねとする、仙人の琪樹は冷にして色なし、王母か桃花は紅なれども、芳しからずか、る非情の草木までも、分々に隨て徳をほどこさすといふ事なし、まし



て我等か先祖譜代の從類として、いかてか君の御爲に不忠を振舞へ  
 きか様におほしめし捨られまゐらすれば、けふより奉公ふつと無益  
 とおもへ共故御料さしも見はなつなご御遺言ありしかは、それにそ  
 しはらく思ひと、まるた、何としても世間の示しの御料となり給  
 ふこそ、心も詞も及はれね、其儀ならば魚類の一門を催して、精進の奴  
 原をうちほろはし、われら御料の御内に繁昌せむ事いと安き事なり  
 とて、鯉房十連を指遣はして、國々へそ觸られける、その時馳參る人々  
 には誰々そ、先鯨荒太郎、鯛の赤介、鰐の大内權介、さちはこの帶刀先生  
 石持の太介、大魚伊勢守、鮭大介、鱈子、鱒太郎、粒實、同じき次郎、弼吉、鯉長  
 介、鯉冠者、鱒藤五、ひらたの左衛門をいかは左京權亮、いさなこの源九  
 郎、うるかの平三郎、太刀魚の備後守、鯖刑部大輔、鱒の判官代、螺出羽守、  
 ぎらの左少將、もろこの兵衛尉、池殿の君達には、美鯉の御曹司、小鮎近  
 江守、同山吹井手助、熊野侍にて、鱸しらはすの左大忠、宇治殿の御内に  
 は、鮎介か一族に、白鯉河内守、王除魚中務、餘判官代、鱈右馬允、すはしり  
 鱒法師、柳魚新兵衛、鯉尉、鰻陸奥守、かいらきの大藏卿、鮎介か子とも

池殿の公達これよ  
 り湖水の魚類をあ  
 けたり

には鯉の冠者、生海鼠次郎、鮎入道、魚鱒源六、あむかうの彌太郎、大蟹陰  
 陽頭、あふらき目戴、土長、飛魚、鮎入道か手に相したかふ者共には、鮎、烏  
 賊魚、小鮎、魚鱒の太郎、ひいをの源太、鮎又太郎、鯉藤三郎、鯉源三、よりの  
 大隅守、鯉冠者、飯尾、鮎介、守宮十郎、海老名の一、族此外山のうちの殿は  
 らには、獅子、麒麟、豺狼助、まみの入道か、鮎子、猪太郎、猪武者のそはみす、  
 兎兵衛穴基、鳥の中には、鳳凰、鸚鵡、鶴、うつほ鳥、呼子鳥、鶯、角鷹を將軍  
 として、金鳥大納言、鶯侍從、鵜大江尉、郭公中將、鶯少將、鴨中納言、鴨五郎、  
 鶴次郎、池上の鶯五郎、鶯鶴、かひつふり、鶴左近允、なかはしの宗介、侍大  
 將には、飛鶴判官、鶯隼人、佐、鶯の、小三郎、隼右衛門、鶯雅樂助、白鶯、壹岐  
 守、鶯新五、鶯新六、山鳥別當、山柄注記、水鷄主殿、鶯左衛門、鶯のと、や  
 の頭、鳥目代、定規、班鳩源八、松むしこから、四十柄、鶯又三郎、雀小藤、太鷲  
 陰陽助、つく鳥、小鳥、鶯鶴を先として、以上その勢二万五千餘騎、魚鱒、鶴  
 翼の二陣に群て、官軍旗をなひかし、激しき程の亂なり、凡四足の物と  
 もいつれも勝劣なかりけり、かゝるほどに、南都、北京の貝のかたへも  
 きこへければ、我等も海に生をうけたれば、まゐらては、あしかりなむ、



せいはい石脚さ  
てせいはい貝あ  
りそれいふ貝あ  
けたり

卓文君は前漢の人  
なり司馬相如に嫁  
して才女の名あり

いさや赤介殿の御供仕らむとて鮑貝どもまゐりけり、春は三吉野の  
仙家の昔をわすれぬ櫻貝、夏は泉の雀貝、秋は萩の花さし蘇芳貝、冬は  
時雨の音たて、寢覺かちなる板や貝、たま〜まち得て契る夜は、あ  
はれをそふる鳥貝、世をいとへとも尼貝のおもひへたつる雛貝、とし  
老たれはうかばいの女貝こそせわしけれ、山臥の腰に付たる法螺貝  
の友を促すはかりなり、その名を聞もおそろしきは、鬼貝のおとしか  
げたる鑑貝、總角かけてそやさしかりける、石の中なるせい〜を、か  
き集てそまいりける、棹鹿の星の光はかすかにて、しかも海上はくら  
けなり、をの〜しそくは持なから、狐はかりそ火をとぼす、貂の目の  
やうにそ赤かりける、

かゝる處に哀なる事ありけり、鯛の赤介は後見のは鮎飾の入道を近  
付て、のたまひけるは、味吉は沖の昆布の大夫のむすめ、磯の若和布を  
むかへて、妻とたのみて、幾程なくて、此大事出来たり、昆布大夫といふ  
は、精進のかたには、宗との物そかし、新枕せし其夜半は、末の松山はる  
〜ど、波こさしと、互に契りし言の葉は、卓文君にもおとらす、借老同

穴の契り、鴛鴦比目のかたらひあさからす、いかにせむと、その給ひけ  
る、鮎飾畏て申けるは、生死無常のならひ、有爲轉變の世間よな釋尊しやくそんいたた  
旃檀の烟をまぬかれ給はす、はしめあるものは終あり逢ものは定め  
て別離の愁にあふこと、今にははしめぬならひ也、されば人間の苦の中  
にも、五盛陰苦求不得、苦愛別離苦と説れたり、就中弓箭さるもの、二  
心あらむなどおぼしめさむ事、口惜かるへし、そのうへふるき詞の候  
ぞかし、唐土の虎は毛をおしむ、日本の武士は名をおしむとこそ申つ  
たへて候へ、疵を當代に始てつけ、そしりを後葉に遺さむ事、家のため  
身のため口惜かるべし、世しつまる物ならは、いかなる波の底にても  
めくりあはせ給はぬ事、よも候はしなど、様々にこしらへいさめ申け  
れは、赤介けにもとや思ひけん、むかへていくほともなくて、磯の若和  
布を昆布の大夫のもとへぞ送られける、その時わかめ一首はかくそ  
詠しける

なみだより外に心のあらはこそ思ひはわかめ後のちきりを  
赤介もとりあへず、かくそつらねける、



王昭君は漢の元帝の宮女なり顔容いと勝れたるを匈奴の單于に賜はりしは遂に胡國にゆきたり

忘れしと思ふ心のかよひせはなご二たびの契りなからん  
かくて送るほどに、赤介猛き武者と申せども、泪は空にかきくもり、むかし王昭君を胡國の夷のためにつかはされし時、胡角一聲霜後夢、漢宮万里月前腸など詠せしこと、今さら思ひしられて、むかしの人の別までも、おもひつらぬれば、あかぬ別にぬる、袖かはくまもなき旅衣、泣く、奥へそ下されける、よそのみるめまで、みな鹽たれてこそ見えにけれ、又赤介はもとするめの腹に六になる子の有けるを、近くよひよせて、汝をはいかにもして、御料の御見參にいれんとぞ思ひしかども、今此大事出来る上は力及はず、されはいかならん岩の礫波の底にもかくれぬて、世しつまるものならば、あらはれ出よといひ含て、父の鯛の乳母子、駿河國高橋庄知行する伯母の尼鯛のもとへそ遣されける  
かゝる程に武者共鎧を着、甲の緒をしめ、馬に乗りて出立たり、鮭大介鯖長か、其日の装束には、しかまのかちんの直垂に、刺鳥おとしの鎧を着て、同毛の五枚甲に、鹿角うつてそ着たりける、廿五指たる鴉の羽の箭

鯛水は石清水八幡宮にかけたり故に上の句に一切衆生の参るさいへり

頭高にとつてつけ、小男鹿の角はす入たる弓の真中にきり、鳥毛馬のふとくたくましきに、熊の草つ、みの黒鞍置てそ乗たりける、子息鯛太郎粒實、同次郎弼吉、前後左右にそ打立ける、鯛赤介味吉その日の装束には、水文の直垂に、宇治の綱代に寄るひをさしの鎧、草摺長にさくどきて、同毛の甲の緒をしめ、三尺五寸のいか物つくりの太刀をはき、廿四指たるうすへ尾の矢、頭高に取てつけ、我爲まつこたいの弓のまなかにきり、白波蘆毛の駒に、洲崎に千鳥すりたる具鞍おきてそ乗たりける、けふをかぎりぞや思ひけん、年ごろの郎等金頭太郎に、しやち銚をもたせて召具したり、かくて奥の方を見わたせば、おひた、しく物の光て見えければ、赤介あれは何ぞと問ければ、金頭申けるは、あれこそ一切衆生の御業と成て、まゐらぬ人も候はぬ、鯛水にて渡らせ給ひ候へと申ければ、さてはわれらか氏神にてわたらせ給けるやとて、馬よりをり、三度禮拜して、南無八幡大菩薩と祈念して、ゑひらの上指より、鯖の尾の狩俣抜出し、鯛水にぞ奉りける、かくて出ける所に、年四十計なる物の色黒かりけるか、すこし長き馬に乗て、おくれ馳して來



戒餅はかいもちひ  
にて蕎麥のり  
なり  
あたいは暖の意  
を含む

六孫王は經基をい  
ふ御仲を饅頭に  
けんが爲なり

れり、大介あれはたれといひければ、手綱かひくり弓杖にすかり、大音揚て名のりけり、是は近江國住人、犬上河の總追捕使、餘判官代とぞ申ける、など今まで遅參そとの給ひければ、さん候、鯨馬に轡をはめ、むくくとし候ひつる程に、遅參なりとぞ申ける。

さるほどに、國內通解の事なれば、精進の方へそきこへける、戒餅の律師四十八人の弟子を召具して、あた、けの御所へぞまいられる、御所此よしを聞めし、大きに驚かせ給ひて、本人なれば、先納豆太に告よと仰ありければ、律師か弟子けしやう文といふ者をもつてつげ、り、折ふし納豆太藁の中にひるねして有けるか、寢所見くるしくや思ひけん、延垂なからがばとのおき、仰天してそ對面する、けしやう文此由委く申ければ、納豆太その儀ならば、精進の物共促せとて、鹽屋といふものをもつて、先身ちかくしたしきものなれば、すり豆腐權守につけ、り、道德といふ者、みそかにはせめくりて催けり、先六孫王よりこのかたまんちう素麵をはしめとして、藪蕨兵衛酸吉、午房左衛門長吉、大根太郎、首次郎、連根近江守、大角山城守、渡邊黨には、藪豆武者重成、茗荷小太

まやうの唱歌に生  
姿なかりたり

郎、勘角戸三郎、いらたか、笋左衛門節重、納豆太郎、糸重甥の唐醬太郎、同次郎、近冬、菰新左衛門、獨活兵衛尉、落源太、苦吉、蕎麥大隅守、薯蕷藤九郎、芋頭太、宮司煎大豆、咬太郎、こたうふの權介、實辛新左衛門、河骨次郎、秋吉、昆布大夫、荒和布新介、青海苔、昆布、苔、雞冠雲苔、太郎、山葵源太、笈五色太郎、松館壹岐守、樹中の上臈には、權少將、粟宰相、桃侍、從栗伊賀守、大和國住人、熟柿冠者、實光は、柿の蓋はかりの所領とて、乗替一騎もひかさりけり、柘榴判官代、枇杷大葉三郎、弟の柑子五郎、橘左衛門、李式部大輔、梨江藏人、松茸太郎、熊野侍には、柚皮庄司、糺太左衛門、青蔓の三郎、常吉を始として、以上其勢五千餘騎、久かたや雲の梯引おとし、分取高名我も、いとおもはれる、中にも、藪蕨兵衛酸吉、氏神のはしがみへまゐりて、酸吉か今度のからき命をたすけ給へと、終夜わが身の藝能をつくして、さまぐのなれこまひなどまけるが、管絃の具足や忘れけむしやうかはかりしたりける、

さる程に、納豆太、敵は大勢なり、縦討死するともはかしく、からし、要害にか、らむとて、美濃國豆津庄へぞ下ける、かの所と申は、究竟の城郭



漢王漢の高祖楚の  
項羽七十餘戰し  
たはし言ひ傳ふ  
をいふにやこれ  
秦王破陣樂唐の太  
宗のまだ秦王たり  
時劉武周を破りし  
軍中にて作れる樂  
なり本文の漢王の  
戦とこれとは二つ  
各別のものなり

也、おぼろげにて落へきやうもなし、それをいかにと申ば、青山峨々として不破の關につゞき伊勢路をさして遙なり、青陽の春くればゆるくたる遠山に霞の衣たちかさね、紫塵嫩、巖こゝやかしこにおひ出る後にはあしか洲俣くひ瀬川、三の大河ぞながれたる、東岸西岸柳遅速不同、南枝北枝の風冷しく寄くる白波は、舊苔の洗鬚川のおもてには、亂材逆もきをひき、上下には大綱小綱をはへたれば、いかなるはやりをのしら籠などもたやすく通るべきやうもなし、そのうへに獅子がきく、垣をゆひたて、ひだや鳴子を用意する、かゝりければ武者共既によすると聞えしかば、兵うつたち出たり、龍櫻の八陣をかまへ、當時漢王の七十餘度の戦に秦王破陣樂を奏するも、いかでかこれには勝るべき、納豆太そ、の日の装束には、鹽干橋かきたる直垂に、しらいとおどしの大鏡、草摺長にさくとき、梅干の甲の緒をしめ、かふら藤の弓のまむ中にきり、礮のかちめをめし寄て、きたはせたる青蕪を十六までこそ指たりけれ、五きにあまるむき大豆に、前後の山形には陶淵明か友とせし重陽宴に汲なれし菊酒にさかづきとりそへたる所を、みか

きつけにしたりける、金覆輪の鞍おきて、ゆらりと乗てうち出たり、甥の唐醬太郎、これも同装束にて河原毛の馬にそのつたりける煎大豆、咬太郎、自然のとあらは腹きらむするおもひにて、おどりはねするこまめの五さゝなるにそのつたりける、さるほどに五聲の宮漏明なむとする後、一點の窓灯消なんとする時、大手搦手に寄來り一度に時をつくり、大音揚て名のりけるは、遠くは音にも聞つらむ、近くは目にもみよかし、極樂淨土にあんなる孔雀鳳凰には三代の末孫、戀しき人に逢坂にすむ、鶏の雅樂助長尾と名乗て、ほろ袋を敲てた、かけろくとぞ下知しける、城の中にも是をき、て納豆太あふみふんはり、つ立あかつて、大音あけて名のりけるは、神武天皇よりこのかた七十二代の後胤深草の天皇に五代の苗裔、島山のさやまめには三代の末孫、大豆の御料の嫡子、納豆太郎糸重と名乗て、二羽矢の味噌蕪をうちくはせ、よつひきつめてひやうと射、雅樂助長尾か母衣袋ふと射さほし、次に立たる、白鷺壹、岐守か細頭あやうく射かけて、後なる大角豆、島山にこなりしてこそたちたりけれ、かゝる所に、鯛太郎粒實進出て申ける



やうはた、今よせたる物をはたれどかみる、今度謀叛の最長、遠くは音にもききつらん、近くはめにもみよかし、大日本南閩提正像二天はさておきぬ、大通知勝の世と成て、二千餘年ははや過ぬ、自樂以降天神七代にいたるまで、豊葦原の中津國五畿七道をかたれし王城より、子の方北陸道越後國大河郡鮎の庄の住人、鮭の大介、鱒長か嫡子、鱒太郎粒實、生年積て廿六歳にまかりなる、われとおもはむものは、押ならへてくめやといひて、ゑひらのうはさしより、鯖の尾の狩俣ぬき出し、能引つめて放矢に芋頭の大宮司かしら射わられ、馬より下に落にけり、芋の子共引しりそきいか、にせむとそなけきける、燠大豆咬太郎是をみて、合戦に出る程ては、それほどの薄手おひてさのみ歎くかどて腹の皮をきつてそ笑ける、芋の子共これをき、にくき物共のいひ事かな、合戦に出る程にては死せん事をは歎かね共、見放すへきにあらねは、かやうにあつかふそかしといひて、御前なる瓶子に酒の残りの有けるをとりて、咬太郎か面にいかけたり、頓やがてにがくとして酔むつかりにそ成にけるその、ち大宮司世にくるしけなる息をつき、鬢か

きなての給ひけるは、われほたけ畑くろを出しより、命をば御料に奉る、かはねをば龍門原上の土にうつみ、名を後代にあけむと存せしなり、しかるによりて此疵をかふむる、これにてたすかる事はよもあらした、跡に思ひ置事とては、そ、り子の事はかり也、我いかにもなりなむ後は、すりたうふの權の守をたのむへし、始より今にいたるまで、なさぬ中はよからの事なり、かまへてく權の守にたのむへしとのたまひければ、嫡子黒ゆての太郎、是をき、我等も弓箭とる身にて候へは、けふあれはとて明日あるへしともおほえす候、乍去そ、り子は權の守に申つくへく候と申ければ、大宮司是をき、すいきのなみたをそ流されける、御料是を御覽して、かくそ詠せさせ給ひける、  
このいもの母いかばかりはかるらん、にたる子ともをみるにつけても

其後は弓箭刀杖の庭に歩みを運ふといへども、觀念の床に心をすまし、輪廻得脱の不可思議なる所を覺りて、魚鳥元季八月廿八日の寅の一點には、終に空くなりけり、



城の中には大宮司射ころされむねん申はかりなし、渡邊黨の者共、蘭豆武者重成、筋角戸三郎をはしめとして、深澤の芹尾の太郎、覆盆子れいしなんどの究竟の手たれの精兵、荒馬乗の大力、同心にはつと掛出て、さしつめひきつめ射けるほどに、鯛の赤介はひれの所を籠ふかに射させて、馬より下へ落にける。後見の鯨飾の入道つとより魚頭を膝にかきのせて、今生におほしめし置事候は、鯨飾に委承候へし、さためて北御方小き人々の御事をそおほしめし給ふらむ、それは鯨飾かくて候へは、御心易覺しめせと申ければ、赤介鬘かきなて、の給ひけるは、人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にはまよふならひそといふ、誠に理なり、顔花忽盡春三月、命葉易零秋一時、いまさらなけくへきにあらねとも、小き者どもの事思ひつらぬるに、安き心更になし、いかさまよみちの障ともなりぬへし、只今黄泉中有の道に越きて、親きも疎なるも、たれか伴つて行へき、鯨飾かしまつて申けるは、人の親の子をおもふこゝろさしの深き事、蒼海も及はず、五岳も跡をとめかたくは候へとも、親を思ふ子はまれなるならひなり、されば經に

もどかれたり、諸佛念衆生、衆生不念佛、父母常念子、子不念父母とみえたり、少愛の人々の事おほしめすも理也、夜の鶴の籠の中になき、焼野の雉子の徒に身をほろほす、かかる禽獸鳥類までも、子をおもふはならひなり、されとも鯨飾かくて候へは、少愛の人々の御事は、御心易おほしめせた、後生を御たすかり候へ、人の身には後生ほどの一大事さらになし、今度三途の故郷を出すは、又いつの時をか期せむ、あひ構てく、後生を御ねかひ候へと申ければ、赤介さらば後生の爲に、六道講の式を聴聞せむといひければ、鯨飾急き鉢法師を一人請し、六道講の式を讀せけり、その式に曰、謹敬て一代のかますは、へむつ、かれむ、るむ、鯛水の大明神に申て言、夫何の世々にもあひかたき、餘經にあふ事を待たり、無端も此鯖世界をふり捨て、或は入道いるかとなり、或は鉢法師となりて、此魚を網地獄に落す事なけれ、第一に地獄道といふは、以外にくらげなり、助けよと蜻の手をするめけ共、るむといふこのしろもなし、第二に餓鬼道といふは、面の赤き事いりるびの如し、頭の細き事蟹のひげに似たり、腹の太き事ふぐのごとし、第三に修羅道といふ



は、太刀魚を以てきられ、さちほこを以てさされ、如斯苦患未來永劫に  
 もうかびかたし、天の羽衣まれにきて、撫ては必つきぬべしといへど  
 も、一たび悪趣におもむけは、うかひかたし、かむにしくついたりきらう  
 をいつるさい、蟬海鼠成佛道とるかうしければ、僅に息はかりをすい  
 りく、とそしたまふ、されどもいかなるつみの報にや、うしをにとい  
 ふ物にそなられける、それにて御料はくはれさせたまひける、おそろ  
 しかりしためし、とそきこえける、さる程に、糞太左衛門は赤鯛の首取  
 て、分取高名は我一人との、しつて、御料の御前に高座してそ座した  
 りける御料是を御覽して、糞太左衛門か高座の振廻過分なり、あれへ  
 下れと仰ければ、糞太左衛門かしこまりて申けるは、過去莊嚴劫より  
 深きちきりをおもへば、花下半年日客、月前一夜友、みなこれ多生廣劫の  
 縁そかし、され共善を修ては佛となり、悪を行しては、地獄に落、墮志を  
 おこして修羅となり、慳貪にしては貧に生る、これみな過去の因果也、  
 今更嘆へきにあらねども、身貧に候しは、不及力、御料の御身したしき  
 物とは、たれかしらす候と申ければ、御料是をきこしめし、げにもとや

このかゝるこれし  
 され言なり

おほしめしけむ、したしくは、なとつねに此方へこのかゝるとてやが  
 て備後守にそなされける、

爰にあはれなる事ありけり、さしもわかく盛に有しときは、紅梅の少  
 將といひ、花やかにいつくしく、鶏舌を含て、紅氣をかねたり、淺紅嬋娟  
 仙方之雪愧色、濃香芬郁、岐嶺之煙讓薰、事をわすれて本結きり、遁世し  
 て石山の邊龜山寺といふ所に、閑藏名をは梅法師とそ申ける、近比荒  
 行をのみ好て、さしも暑き六月にも、晝は日にほされ、夜は定にそ入に  
 ける、其頃御料の御氣色に入、よき酒にひたされてほうのかはすこし  
 のび、ふくらひて有しが、弓矢とる身のならひとて、納豆太か謀叛にく  
 みし、疵をかうふるのみならず、遂にむなしく成にけるこそ、何より哀  
 に覺えたれ、

さる程に寄たる、武者共の申けるやうはいつまでかくてあるへきそ  
 一合戦とて、ひ應の判官代、白鷺壹岐守、山の内の殿原には、獅子きりん  
 猪武者をさきとして、三百余騎馬の轡をとり、とがり、矢肩にたてなら  
 へ、おめひて懸ければ、ひだやなるこにしぶかれて、左右なくはよせさ



りけりしはらくありければ、ひだや鳴子も見なれ聞なる、程にし、垣くの垣物ならず、塀のきはまでせめ付たり、城中にも是をみて、あはれよかんなる敵こそ近付たれ、あますな洩すな、生取ねち首にして高名せよとて、柘榴判官代びはの大葉の三郎を大將として、究竟の物とも五十騎、木戸をひらきてかけ出る、三百余騎のをのこも中をあけてぞどほしける、その、ちに引つ、いて、くもて十文字にいれかへく戦ひ互に命をおします合戦す、究竟の兵二百余騎忽にうたれければ、ひたかの判官かなはしとやおもひけむ、陣をひらいてそ歸られけるか、りければ鳥類物共是を見て、金鳥大納言、鴨五郎、鶴次郎、鴈金のと、やのかみをはしめとして、五百余騎入かへてかかりけり、されども精進のかたには一人もうたれさりけり、栗伊賀守はかへしからしとやおもひけん、むきくゝにぞなりて落にける御れう是を御覽してかくぞ詠せさせ給ひける。

いか栗のむくかたしらす落うせていかなる人のひろひ取るらん

稚の少將は、いつかたともなき谷そこへおちられけるか、獨言にかくぞ詠せさせ給ひける。

今こそは身のおき所しらすともつみうしなへや後の世の人か、りければ、魚類の方には赤介を初として、宗との物とも三百余騎うたれければ、あるひはおちうせ或は降参して、残りすくなになる程に本人、蛙の天介いた手負て、波うちきはに有けるか、今は此事かなはしとやお思ひけん、底しらすといふふち馬にのりて、鱈の太郎一人めし具して、河をのほりにのとくゝとぞ落られける、爰に近江國蒲生郡豊浦の住人、青蔓の三郎常吉といふもの爰を落るこそ大介なれ、あはれ敵やおしならへてくまむとて、二尺八寸く、太刀をぬきて、まつかうにさしかさし、爰を落るは大介か、いか、敵にいひかひなく、總角をみするものかな、かへせやくゝとておめいてか、りければ、大介名をや惜みけむ、引返し散々に戦ほどに、痛手は負たり、心はかりは、猛くおもへど、うての力つきうけ、はづす所をさし及て、そうちたりける、胸元を後のひれをさして切付たり、鱈太郎も痛手負てんければ、精進の物と



新豊の折臂翁

もは次第に重さなる間、かなはしとや思ひけむ、もとより用意の事なれば、鍋の城をそこしらへける、彼城と申は究竟の要害也、たやすく人のおとすへきやうもなし、されは、こゝへむかふ物は、新豊の折臂翁か、瀧水の戦に、村南村北に哭する聲を聞て、五月万里雲南に征とを辭するにことならず、されは面をむくる物一人もなし、爰に山城國の住人大原木太郎といふもの、三百余騎にておしよせ、下より猛火を放て責ければ、ほむらとなりてもえあかる、譬は黒繩衆合叫喚、大けうくわむ、八大地獄に異ならずか、る所に抄子の荒太郎、本より山そたちの男にて、心も剛にはやり物なりけるか、た、一人かけ入てひたたくむ、御器の中へとうとおとす、御料取て引寄、御心みあつて、嗚呼生ても死ても、大介程のものはなかりけりと仰有ける魚類のものとも、爰にてさんくになり、大介うせぬるうへは、餘の物共と、まる事なし、されは合戦のならひ、無勢多勢にはよらさりける、さしたる事なくして、かやうに促く亡びけるこそ、かへすくもあはれなれ、さてこそむかしより今にいたるまで、青蔓の三郎常吉をは、御料の近習の物にて、朝夕奉

公つかまつりける、有かたかりし事ともなり、于時魚鳥元年壬申九月三日、静謐畢、



井、く、新、あ、あ、あ